

にし だに ふん ほ ぐん

# 西 谷 墳 墓 群

—平成14年～16年度発掘調査報告書—



2006年3月

島根県出雲市教育委員会

にし だに ふん ほ ぐん  
西 谷 墳 墓 群

—平成14年～16年度発掘調査報告書—

**2006年3月**

**島根県出雲市教育委員会**

# 序

出雲市大津町に所在する西谷墳墓群は、山陰の独特の個性をもった弥生時代の墳丘墓である四隅突出型墳丘墓を6基含む弥生時代後期～古墳時代中期にかけての墳墓群です。近隣にある神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡と並び、歴史的価値の高い重要な遺跡です。

出雲市教育委員会では、この重要な歴史的遺産の保護・活用を図るため、平成9年度より整備を進めております。平成12年3月には国史跡となり、その後、公有地化、便益施設の整備を行い、平成16年4月29日に西谷墳墓群史跡公園「出雲弥生の森」をオープンさせたところです。今後は、墳丘墓の整備、博物館の建設を計画しています。

以上のような計画を掲げ、出雲市教育委員会は西谷墳墓群の内容確認調査を平成14年度から平成16年度の3年間行い、多くの貴重な成果を得ることができました。今回報告する資料を基に、西谷墳墓群の整備・活用を進めていきたく思っております。また、多くの方々からの意見を賜り、出雲地方の歴史解明に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にご協力賜りました土地所有者の方々、ご指導いただきましたみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

出雲市教育委員会

教育長 黒目俊策

# 例　　言

1. 本書は出雲市教育委員会が平成14年度～16年度に国庫・県費の補助を得て実施した西谷墳墓群発掘調査の報告書である。現地調査は平成14年～16年度に報告書作成は17年度に行った。
2. 調査は1、2、4、6、7、9、10、11、17、18、19、20、21、25、26、27号の墳丘墓16基と、番外1・2号墓のマウンドをもたない墓の計2基、新たに発見した配石墓3基、集石遺構2基と総計23基の墓についてトレンチ調査及び崩落断面調査を実施した。
3. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

調査期間	調査箇所	事業名
020819～030207	1号・番外1号・番外2号・2号・4号・17号・6号	市内遺跡発掘調査事業
030602～031226	4号・9号・18号・19号・20号・10号・11号・21号・27号	市内遺跡発掘調査事業
040105～040329	9号	西谷9号墓保存修理事業
040601～040806	9号	市内遺跡発掘調査事業
040802～041130	2号・4号	西谷墳墓群保存修理事業
041201～050228	2号・7号・25号・26号	市内遺跡発掘調査事業

4. 調査を行った地番は、次の通りである。

島根県出雲市大津町3596-6ほか

5. 調査は、次の組織で行った。

調査指導者	渡辺 貞幸（島根大学法文学部教授） 山内 靖喜（島根大学名誉教授） 山田 康弘（島根大学法文学部助教授） 会下 和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター） 中村 唯史（島根県立三瓶自然館） 池淵 俊一（島根県教育庁文化財課 文化財保護主事 平成14年度） 原田 敏照（島根県教育庁文化財課 文化財保護主事 平成15年度） 丹羽野 裕（島根県教育庁文化財課 主幹 平成16年度） 東森 晋（島根県教育庁文化財課 文化財保護主事 平成16年度）
事務局	板倉 優（出雲市役所文化企画部芸術文化振興課長 平成14年～16年度） 神門 勉（出雲市役所文化観光部文化財課長 平成17年度）
調査員	川上 稔（同 文化財室長 平成14年～16年、17年度は文化財課主査） 坂本 豊治（同 文化財室主事 平成14年～16年度、17年度は文化財課副主任）

調査補助員 錦田充子 宮崎 綾 高橋亜紀  
現場作業員 片山尚子 客野祐治 久保田由希 鈴木小織 千葉淳美 中村佳珠 中村倫子  
錦織 崇 三井 修 村上達郎 百田 麻 山室瑠璃枝 山根 航（以上島根大学学生）  
高橋誠二（花園大学学生）  
安食 魁 石橋弥生 稲村玉枝 今岡 彰 今岡勝美 太田幸一 小村康二  
小村保夫 小村恒利 来間達夫 公田悦郎 小玉順子 佐野静枝 高根 豊  
高根常代 高橋イキコ 塚原立之 日野靖夫 福田益之 藤江 実 藤原一男  
森脇弘治 吉田 栄 渡部政義（以上出雲市発掘作業員）  
遺物整理 荒木恵理子 田部美幸 永田節子 糸口令子 中島和恵（以上出雲市室内整理作業員）  
片山尚子 客野祐治 久保田由希 鈴木小織 千葉淳美 中村佳珠 中村倫子  
錦織崇 村上達郎 百田麻（以上島根大学学生）

6. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々から多大な協力を賜った。記して謝意を表します。

また、現地調査及び報告書作成中に次の方々から有益な御指導・御助言を頂いた。

池淵俊一、伊藤実、岩橋孝典、梅木謙一、大賀克彦、大久保徹也、大谷晃二、肥塚隆保、角田徳幸、  
勝部明生、亀田修一、小寺智津子、佐古和枝、佐藤寛介、重松辰治、下條信行、白石純、白敷真也、  
田崎博之、田畠直彦、常松幹雄、中川寧、仁木聰、錦田剛志、乗安和二三、東森市良、肥後弘幸、  
楢野真司、平塚幸人、藤田憲司、藤田等、朴天秀、松尾充晶、松本岩雄、松山智弘、南武志、  
村上恭通、守岡利栄、山内靖喜、須賀照隆、高橋智也

7. 掘図に使用した方位は磁北を示し、座標は座標系第三系（日本測地系）に基づいたものである。

8. 本書で使用した図面のうち、2、4、9、17号墓の測量図は、島根大学考古学研究室所蔵の測量図面を一部改変して使用している。また、1972年に調査を実施した1号墓、番外1号墓、番外2号墓に関係する図面も一部改変して使用している。

9. 掘図中の縮尺は図中に記しているが、基本的に墳丘測量図は1/300、トレンチ実測図1/50、遺物実測図1/3で統一している。しかし、紙面の都合上例外なものもある。

10. 遺構・遺物の実測は、調査員、調査補助員、島根大学学生、花園大学学生、石橋弥生が行った。  
写真撮影は坂本が主に行つたが、一部は渡辺貞幸、松尾充晶（島根県埋蔵文化財調査センター）にお願いした。

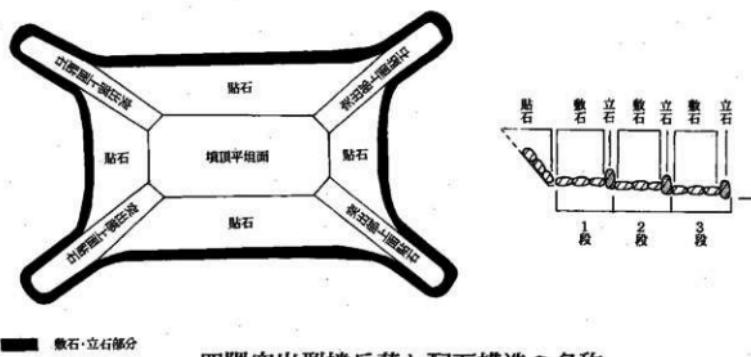
11. 執筆は分析を山内靖喜、肥塚隆保、白石純、南武志にお願いした。本文は西谷2号墓の一部を島

根大学学生が執筆し、文末に執筆者の名を記している。他は坂本が執筆した。

12. 本書の編集は坂本が行った。

13. 本報告書掲載遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

14. 四隅突出型墳丘墓の配石構造の名称を以下のとおりにする。本文では立石をトーンで表現した。



四隅突出型墳丘墓と配石構造の名称

15. 土器編年は以下の論文を参考とした。

松山智弘1991「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『島根考古学会誌』

#### 第8集

赤沢秀則編1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会

中川寧1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域関係」『島根考古学会誌』第13集

古代学協会四国支部1996「弥生後期の瀬戸内海—土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通—」

古代学協会四国支部第10回松山大会資料

藤永照隆1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究」XIX

松山智弘2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集

松山智弘2002「第7節出雲における墳墓の変遷」「神原神社古墳」加茂町教育委員会

大久保徹也2002「中国・四国地方の土器」赤塚次郎編『第2巻弥生・古墳時代 土器Ⅱ』小学館

大谷晃二2003「第4節宮山古墳群をめぐる諸問題」「宮山古墳群の研究」島根県古代文化センター

岩橋孝典2004「装飾壺・スタンプ文土器からみた弥生時代後期の出雲地域」「古代文化研究』No12

# 本文目次

第1章 位置と環境 .....	1
第2章 西谷墳墓群の概要 .....	4
第3章 調査の概要 .....	7
第1節 西谷1号墓の再調査 .....	8
第2節 西谷番外1号墓の再調査 .....	13
第3節 西谷番外2号墓の再調査 .....	15
第4節 西谷2号墓の調査 .....	16
第5節 西谷1・7号墓の調査 .....	56
第6節 西谷4号墓の調査 .....	58
第7節 西谷6号墓の調査 .....	81
第8節 西谷9号墓の調査 .....	85
第9節 西谷1・8号墓・1・9号墓・2・0号墓の調査 .....	106
第10節 西谷7号墓の調査 .....	113
第11節 西谷1・0号墓・1・1号墓・2・1号墓・2・7号墓の調査 .....	126
第12節 西谷2・5号墓の調査 .....	138
第13節 西谷2・6号墓の調査 .....	145
第4章 まとめ .....	148
第5章 分析編 .....	157
出雲市西谷墳丘墓出土赤色顔料の分析 .....	157
西谷2号墓・4号墓出土土器の胎土分析 .....	161
西谷墳墓群の貼石調査報告 .....	171
西谷2号墓出土ガラス遺物の科学調査 .....	182

## 挿図目次

図1 出雲平野の主要遺跡分布図 .....	3
図2 西谷墳墓丘陵周辺の旧地形 .....	6
図3 西谷墳墓群分布図 .....	6
図4 西谷1～6号墓測量図 .....	9～10
図5 1号墓・番外1・2号墓測量図 .....	11
図6 1号墓 .....	12
図7 1号墓出土土器 .....	12
図8 1号墓配石実測図 .....	12
図9 番外1号墓 .....	14
図10 番外1号墓出土土器 .....	14

図1 1	番外 2号墓	15
図1 2	2号墓トレンチ配置図	16
図1 3	2号墓調査後測量図	17
図1 4	2号墓墳頂部トレンチ配置概念図	18
図1 5	2号墓第1主体	19
図1 6	2号墓H 4グリッド北東部	20
図1 7	2号墓A 2~4グリッド	23
図1 8	2号墓E 1トレンチ	24
図1 9	2号墓G 1・2トレンチ	25
図2 0	2号墓I 1トレンチ	26
図2 1	2号墓5・6トレンチ	26
図2 2	2号墓J 2トレンチ	27
図2 3	2号墓J 2トレンチ出土鉄製品	27
図2 4	2号墓I 3トレンチ	28
図2 5	2号墓7トレンチ	28
図2 6	2号墓G 5・6トレンチ	29
図2 7	2号墓B 6トレンチ	30
図2 8	2号墓A 5トレンチ	31
図2 9	2号墓集石遺構①	32
図3 0	2号墓9トレンチ	32
図3 1	2号墓8トレンチ	32
図3 2	2号墓集石遺構②・③	33
図3 3	2号墓中央トレンチ	34
図3 4	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(1)	36
図3 5	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(2)	38
図3 6	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(3)	39
図3 7	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(4)	41
図3 8	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(5)	42
図3 9	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(6)	43
図4 0	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(7)	44
図4 1	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(8)	45
図4 2	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(9)	47
図4 3	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(10)	48
図4 4	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(11)	49
図4 5	2号墓E 4・F 4グリッド出土土器(12)	51
図4 6	2号墓E 4・F 4グリッド出土ガラス釧・管玉	52
図4 7	日本におけるガラス釧出土地	52
図4 8	2号墓G 1・3グリッド出土及び表採土器	53
図4 9	2号墓復元図	55
図5 0	17号墓	57
図5 1	4号墓トレンチ配置図	58
図5 2	4号墓調査後測量図	59

図 5 3	4号墓6・14トレンチ土層図	60
図 5 4	4号墓6・14トレンチ	61
図 5 5	4号墓7トレンチ	62
図 5 6	4号墓20トレンチ	63
図 5 7	4号墓8トレンチ	64
図 5 8	4号墓13トレンチ	65
図 5 9	4号墓19トレンチ	66
図 6 0	4号墓12トレンチ	66
図 6 1	4号墓1トレンチ	67
図 6 2	4号墓21トレンチ	68
図 6 3	4号墓2トレンチ	69
図 6 4	4号墓17トレンチ	69
図 6 5	4号墓15・16・18トレンチ	70
図 6 6	4号墓3トレンチ	71
図 6 7	4号墓10トレンチ	71
図 6 8	4号墓11トレンチ	72
図 6 9	4号墓23トレンチ	73
図 7 0	4号墓4トレンチ	73
図 7 1	4号墓22トレンチ	74
図 7 2	4号墓5・9トレンチ	75
図 7 3	4号墓5トレンチ土層図	76
図 7 4	4号墓集石遺構	76
図 7 5	4号墓出土土器	77
図 7 6	4号墓集石遺構出土土器	78
図 7 7	4号墓復元図	80
図 7 8	6号墓投影図	82
図 7 9	6号墓出土土器	82
図 8 0	6号墓崖面土層図	83
図 8 1	9・18・19・20号墓トレンチ配置図	85
図 8 2	9号墓突出部配石模式図	86
図 8 3	9・18・19・20号墓調査後測量図	87~88
図 8 4	9号墓17トレンチ	89
図 8 5	9号墓18トレンチ	89
図 8 6	9号墓9トレンチ	90
図 8 7	9号墓12トレンチ	91
図 8 8	9号墓8トレンチ	92
図 8 9	9号墓7トレンチ	92
図 9 0	9号墓13トレンチ	93
図 9 1	9号墓6・14トレンチ	94
図 9 2	9号墓21トレンチ	95
図 9 3	9号墓28トレンチ	96
図 9 4	9号墓22トレンチ	97

図 9 5	9号墓 25トレンチ	98
図 9 6	9号墓 16トレンチ	98
図 9 7	9号墓 27トレンチ	99
図 9 8	9号墓 5トレンチ	100
図 9 9	9号墓 20トレンチ	101
図 1 0 0	9号墓 24トレンチ	102
図 1 0 1	9号墓 19トレンチ	103
図 1 0 2	9号墓 26トレンチ	103
図 1 0 3	9号墓 23トレンチ	103
図 1 0 4	9号墓出土遺物	105
図 1 0 5	18号墓 10トレンチ	107
図 1 0 6	18・19号墓 1トレンチ	107
図 1 0 7	18号墓出土土器	108
図 1 0 8	19・20号墓 2トレンチ	109
図 1 0 9	19号墓 4トレンチ	109
図 1 1 0	19号墓 11トレンチ	109
図 1 1 1	11トレンチ箱式石棺	109
図 1 1 2	20号墓 3トレンチ	110
図 1 1 3	9・18・19・20号墓復元図	111~112
図 1 1 4	7号墓トレンチ配置図	113
図 1 1 5	7号墓調査後測量図	114
図 1 1 6	7号墓トレンチ実測図	115
図 1 1 7	7号墓 1・2・3・4トレンチ	116
図 1 1 8	7号墓 5トレンチ	117
図 1 1 9	7号墓 6トレンチ	117
図 1 2 0	7号墓 7・8トレンチ	118
図 1 2 1	7号墓 9・S-2トレンチ	119
図 1 2 2	7号墓 12トレンチ	119
図 1 2 3	7号墓 10・11トレンチ	120
図 1 2 4	7号墓 13・14・15・16トレンチ	121
図 1 2 5	7号墓 17トレンチ	122
図 1 2 6	7号墓 18・19・20トレンチ	123
図 1 2 7	7号墓主体部実測図	124
図 1 2 8	7号墓第1主体出土土器	125
図 1 2 9	7号墓復元図	125
図 1 3 0	10・11・21・27号墓測量図	127
図 1 3 1	10号墓調査後測量図	128
図 1 3 2	10号墓 2トレンチ	128
図 1 3 3	10号墓 1トレンチ	128
図 1 3 4	10号墓 3トレンチ	129
図 1 3 5	10号墓 4トレンチ	129
図 1 3 6	11号墓調査後測量図	129
図 1 3 7	11号墓 1トレンチ	130

図138	11号墓2トレンチ	130
図139	11号墓3トレンチ	131
図140	11号墓4トレンチ	131
図141	11号墓出土土器	132
図142	21・27号墓調査後測量図	133
図143	21・27号墓1トレンチ	134
図144	21号墓2トレンチ	134
図145	21号墓3トレンチ	134
図146	21号墓4トレンチ	134
図147	21号墓出土土器	135
図148	27号墓5トレンチ	136
図149	27号墓6トレンチ	136
図150	27号墓7トレンチ	136
図151	10・11・21・27号墓復元図	137
図152	25号墓測量図	139
図153	25号墓トレンチ配置図	140
図154	25号墓調査後測量図	140
図155	25号墓1トレンチ	141
図156	25号墓2トレンチ	141
図157	25号墓3トレンチ	142
図158	25号墓4トレンチ	142
図159	25号墓5トレンチ	143
図160	25号墓6トレンチ	143
図161	25号墓復元図	144
図162	26号墓測量図	145
図163	26号墓トレンチ配置図	145
図164	26号墓1トレンチ	146
図165	26号墓2トレンチ	146
図166	26号墓調査後測量図	147
図167	西谷3号墓復元図	155
図168	西谷2号墓、4号墓出土土器の比較（K-Ca散布図）	166
図169	西谷2号墓、4号墓出土土器の比較（Ti-Fe散布図）	166
図170	西谷2号墓、4号墓出土土器の比較（Si-Al散布図）	166
図171	西谷2号墓出土特殊器台・壺の比較（K-Ca散布図）	167
図172	西谷2号墓出土特殊器台・壺の比較（Ti-Fe散布図）	167
図173	西谷2号墓出土特殊器台・壺の比較（Si-Al散布図）	167
図174	実態顕微鏡写真（1）	169
図175	実態顕微鏡写真（2）	170
図176	西谷墳墓群周辺の地質図	172
図177	円磨度の区分	174
図178	疊種構成比較グラフ	175
図179	山口県下関市塚の原遺跡	152

表 1	出雲平野の主要遺跡一覧	2
表 2	西谷墳墓群の変遷	150
表 3	西谷墳墓群における低脚坏の変遷	150
表 4	出雲平野における四隅突出型墳丘墓の変遷と配石構造	151
表 5	西谷墳墓群一覧	156
表 6	遺跡朱のイオウ同位体比	159
表 7	西谷 2号墓、4号墓出土土器の分析一覧表	165
表 8	最大径 10 位までの礫	176
表 9	礫種構成比較表	181
付録 1	1号墓礫種記録	176
付録 2	2号墓礫種記録	177
付録 3	3号墓礫種記録	178
付録 4	4号墓礫種記録	179
付録 5	9号墓礫種記録	180
付録 6	6号墓礫種記録	181
Fig. 1	測定試料	182~183
Fig. 2	試料 N o. 1	184
Fig. 3	試料 N o. 1	184
Fig. 4 a	試料 N o. 1	184
Fig. 4 b	試料 N o. 2	184
Fig. 5	試料 N o. 2	184
Fig. 6	試料 N o. 2	184
Fig. 7	アルキメデス法による測定	185
Fig. 8	ピクノメータ法による管玉試料の密度測定	186
Fig. 9	平行ビーム形非破壊X線回折分析装置	186
Fig. 1 0	緑色ガラス鉄の表面に形成している白色物質のX線回折スペクトル	187
Fig. 1 1	予備調査における測定箇所	188
Fig. 1 2	試料 N o. 1 の蛍光X線スペクトル	189
Fig. 1 3	試料 N o. 2 の蛍光X線スペクトル	189
Fig. 1 4	試料 N o. 3 の蛍光X線スペクトル	190
Fig. 1 5	試料 N o. 4 の蛍光X線スペクトル	190
Fig. 1 6	試料 N o. 5 の蛍光X線スペクトル	191
Fig. 1 7	ガラス鉄のX線CT画像	193
Fig. 1 8	保存処置作業風景	194
Fig. 1 9	西谷 2号墓出土ガラス鉄顕微写真	195
Fig. 2 0	西谷 2号墓出土ガラス管玉顕微写真	196
Table. 1	ガラス鉄の密度	185
Table. 2	非破壊回折データ	187
Table. 3	蛍光X線分析の結果 I	188
Table. 4	蛍光X線分析法(非破壊)による測定結果	191
Table. 5	試料 N o. 6 の化学分析結果	192

# 第1章 位置と環境

## 第1節 西谷墳墓群の位置（図1）

西谷墳墓群が所在する地籍は、島根県出雲市大津町3598-1ほかである。遺跡の所在する出雲市は出雲平野と北の島根半島北山山系、南の中国山地からなる。出雲平野の西側の日本海沿岸部には砂丘が南北に伸びている。

西谷墳墓群は斐伊川が中国山地から出雲平野に流れ出る出口の西岸をなす丘陵の尾根上にある。この丘陵は斐伊川の扇状地の扇頂付近に位置し、その尾根は斐伊川河床から約40m高くなっていて、ここからは出雲平野を見渡すことができる。

西谷に墳墓が築かれた弥生時代から古墳時代頃の出雲平野は、斐伊川が西流して入海（奈良時代の「神門水海」）に注いでいた。また、宍道湖の西端も現在より西にあったと考えられている。現在の地形に近い形に定着したのは江戸時代以降で、中国山地の製鉄の「鉄穴流し」によって、土砂流入量が増大したため、斐伊川は東流し宍道湖に注いでいる。斐伊川が注いでいた入海は現在神西湖としてその名残がみられる。

## 第2節 歴史的環境

### 縄文時代

現在出雲平野で知られている早期末の遺跡として、出雲平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚（27）や菱根遺跡（31）がある。続く前期末～中期では、斐川町の上ヶ谷遺跡（53）が確認されているのみである。その後の海退が進んだ後晩期の遺跡が近年の発掘調査によってわかっている。三田谷I遺跡（9）、後谷遺跡（49）、矢野遺跡（34）、原山遺跡（30）、出雲大社境内遺跡（28）などがあげられ、集落の増加がみられるが遺構の確認は少ない。

### 弥生時代

弥生時代前期の遺跡は縄文晩期から続き、特に三田谷I遺跡（9）、矢野遺跡（34）で多くの遺物が出土している。

中期から後期にかけては入海周辺の集落が飛躍的に増大し、天神遺跡（36）、古志本郷遺跡（13）、下古志遺跡（18）などの大規模集落が出現する。これらの遺跡は集落に多重の溝を配置するものがみられ、平野で生活する上で水の処理が大きな問題であったことがわかる。

出雲平野の南東の丘陵地には大量青銅器埋納で知られる神庭荒神谷遺跡（51）や加茂岩倉遺跡があり、出雲の各集落がまとまっての共同体祭祀が行われたと考えられる。

墓制では、前期の配石墓で知られる原山遺跡（30）、中期中葉の中野美保遺跡（42）の貼石墓、中期末頃の青木4号墓（46）、そして、弥生後期後葉～終末にかけての大規模な四隅突出型墳丘墓で知られる西谷墳墓群（1）がある。

## 古墳時代

古墳時代になると弥生時代の大規模集落が急激に衰退するといわれてきたが、近年の発掘調査では、古墳時代前期～中期の遺構・遺物の出土が増えつつある。

前期の古墳としては、景初3年銘鏡が出土した神原神社古墳、前方後円墳の大寺古墳（47）や筒型銅器が出土した山地古墳（22）が知られている。西谷墳墓群（1）では西谷7号墓や西谷21号墓、西谷18号墓があり、弥生時代よりは規模が縮小するが継続的に墳墓が築かれる。

中期の古墳としては北光寺古墳（23）、軍原古墳（54）、神庭岩船山古墳（50）があげられる。今回の発掘調査により西谷11号墓も円筒埴輪をもつ中期の古墳であることがわかった。

後期後半以降になると、今市大念寺古墳（41）、上塩治築山古墳（7）などの出雲地方最大級の横穴式石室を有する大古墳が築造される。また、南の丘陵には上塩治横穴墓群（5）、神門横穴墓群（21）などの大規模な横穴墓群も築かれる。

## 奈良時代・平安時代

官衙施設の関連と考えられる遺跡として、古志本郷遺跡（13）、三田谷I遺跡（9）、天神遺跡（36）、後谷遺跡（49）、鹿藏山遺跡（29）、青木遺跡（46）などがあげられる。また、仏教関連遺跡として、神門寺境内廃寺（6）、長者原廃寺（2）、天寺平廃寺（52）などがあり古代寺院が建造される。そして、石櫃をもつ光明寺3号墓（10）や小坂古墳（11）などの初期火葬墓が神戸川周辺で多く見られる。

表1 周辺の主な遺跡一覧

1	西谷墳墓群	19	宝塚古墳	37	海上遺跡
2	長者原廃寺	20	知井宮多聞院遺跡	38	小山遺跡
3	菅沢古墓	21	神門横穴墓群	39	藏小路西遺跡
4	長瀬遺跡・權現山古墳	22	山地古墳	40	姫原西遺跡
5	上塩治横穴墓群	23	北光寺古墳	41	今市大念寺古墳
6	神門寺境内廃寺	24	庭反II遺跡	42	中野美保遺跡・中野西遺跡
7	上塩治築山古墳	25	御領田遺跡	43	荻杼古墓
8	地蔵山古墳	26	三部竹崎遺跡	44	里方別所遺跡
9	三田谷I遺跡	27	上長浜貝塚	45	山持川川岸遺跡
10	光明寺3号墓	28	出雲大社境内遺跡	46	青木遺跡
11	小坂古墳	29	鹿藏山遺跡	47	大寺古墳
12	朝山古墓	30	原山遺跡	48	斐伊川鉄橋遺跡
13	古志本郷遺跡	31	斐根遺跡	49	後谷遺跡
14	大槻古墳	32	井原遺跡	50	神庭岩船山古墳
15	田畠遺跡	33	白枝荒神遺跡	51	神庭荒神谷遺跡
16	妙蓮寺山古墳	34	矢野遺跡	52	天寺平廃寺
17	放れ山古墳	35	老丁田遺跡	53	上ヶ谷遺跡
18	下古志遺跡	36	天神遺跡	54	軍原古墳

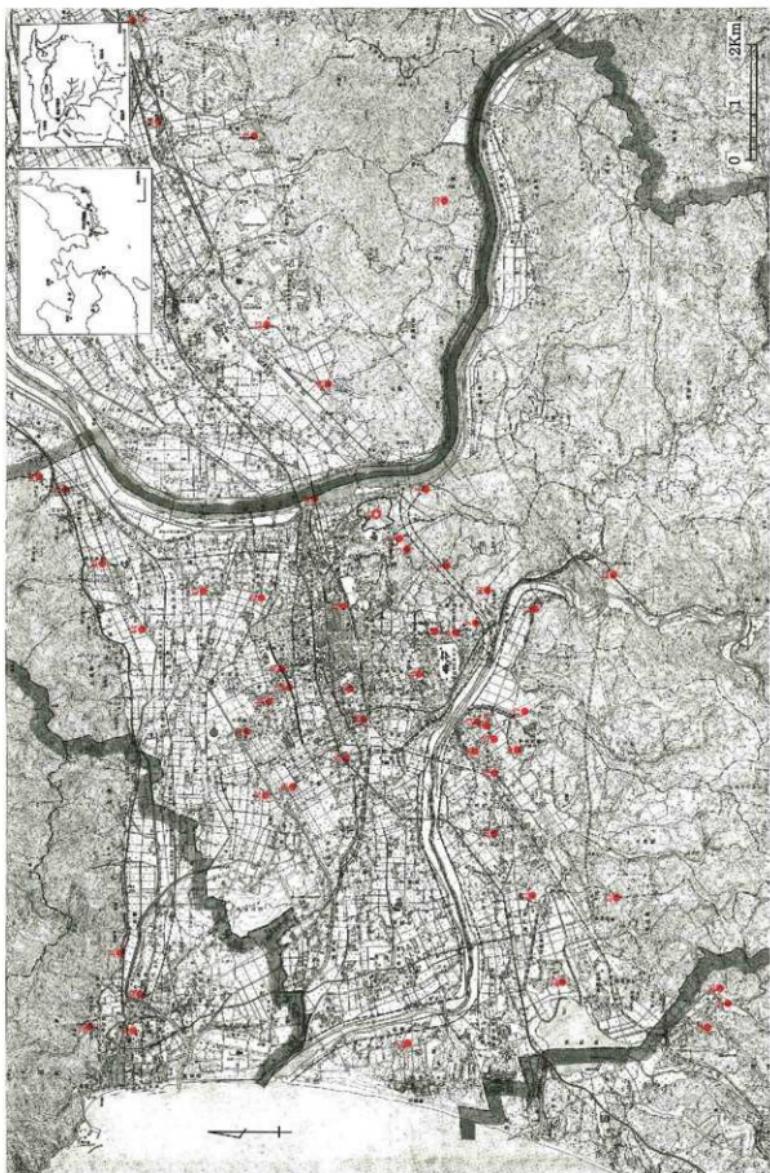


図1 出雲平野の主要遺跡分布図（1：7500）

## 第2章 西谷墳墓群の概要

### 第1節 西谷墳墓群の調査と整備の歴史（図2・3・4）

西谷墳墓群の発見は、1953年に西谷4号墓の開墾中に多量の土器が出土したことによる。その後、1958年に池田満雄氏が上記の遺跡と遺物を「下原西谷丘陵出土土器」として報告した。1971年に東森市良氏により下原西谷丘陵出土土器に吉備型器台・壺があることが指摘される。

同年、西谷墳墓群の西側の谷（鬼谷）が島根県立商業高校敷地として造成されることとなり、島根県教育委員会が分布調査し、西谷1号墓を確認した。翌年の1972年に西谷1号墓が崩壊する恐れがあるとして、出雲市教育委員会が緊急発掘調査を実施し、西谷1号墓が四隅突出型墳丘墓であることがわかった。併せて、番外1号墓、番外2号墓の調査を行い、来原古墳群として報告した。

同年1972年になり大きな墳墓と考えられる西谷8号墓が敷地造成により調査前に破壊される。

その後、1980年までに島根県教育委員会と出雲考古学研究会により2号墓～14号墓を発見し、墳丘測量が行われている。その成果が1980年に出雲考古学研究会により『古代出雲を考える2 西谷墳墓群』として報告される。この時に、来原古墳群から西谷墳墓群へ遺跡名が変わっている。この報告は、西谷墳墓群の各墳墓の検討を行い、西谷墳墓群の保護及び指定を求めるものであった。現在、西谷墳墓群は国史跡となって出雲市教育委員会が史跡の整備を行っているが、その出発点はここにあるであろう。また、1号墓、2号墓、3号墓、4号墓、6号墓、9号墓の6基を四隅突出型方形墓として、これらが弥生墓であることを指摘した重要な報告である。

1983年から1992年にかけては、島根大学考古学研究室を中心とした調査団によって西谷3号墓の発掘調査が行われている。埋葬施設の調査では、ガラス製の勾玉・管玉・鉄劍などが副葬され、葬送儀礼に使用されたと考えられる大量の土器が出土している。また、第4主体に伴う柱穴が確認され、葬送儀礼に伴う墓上施設があったと考えられている。貼石の調査からは、突出部上面が面状をなすことがわかり、四隅突出型墳丘墓を復元する際の大きな成果となった。併せて、主要な墳墓の詳細な墳丘測量図も提示されている。この報告のなかで、9号墓西側にも3基の方形台状のマウンドが存在していることを指摘している。これが、後に18号墓、19号墓、20号墓と呼んでいるものである。

1991年～1992年にかけては、簸川南地区広域営農団地能動整備事業に伴って、農道ルート上に15号墓、16号墓、番外4号墓が新たに発見され発掘調査が行われた。15号墓は古墳時代中期後半の方墳で、16号墓は古墳時代前期末～中期にかけての円墳で、朝鮮半島産のタビが出土している。調査後、これらの墳墓は農道工事によって破壊されている。

その後、1996年出雲市は歴史・民俗資料等保存活用に関する検討委員会を発足させ、西谷墳墓群を国指定史跡化、史跡整備を進めることを決定した。

翌年の1997年には島根県教育委員会が開催した「古代出雲文化展」で、西谷3号墓が展示のメインの1つとして注目を浴びた。また、同年に出雲市、斐川町、加茂町が「文化財を活かしたモデル地域」として全国10ヶ所のうちの1ヶ所に選定され、出雲市は「王墓の里ゾーン」として西谷墳墓群、今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、上塩冶地藏山古墳を主な文化財とし、その中核となる遺跡を西谷墳墓群とした。また、拠点整備として古代出雲王墓館（仮称）の建設を計画した。

出雲市教育委員会は西谷墳墓群を国指定史跡にするための基礎調査として、1997～1998年にかけて墳墓群全域の詳細測量調査を行っている。この調査により、21号墓～26号墓を新たに発見し、墳墓群全体の基礎資料が整ったと考えられる。

1998年～1999年には、出雲市教育委員会が内容確認調査を行った。特に、2号墓は大型の四隅突出型墳丘墓であることがわかり、配石構造も2段であることがわかった。また、他の墳墓の時期や規模もわかってきて、新たに27号墓も発見している。

以上のような経過を経て、2000年3月30日に西谷墳墓群の四隅突出型墳丘墓に関する部分36,000m<sup>2</sup>が国史跡になった。そして、同年に西谷墳墓群等整備検討委員会、2001年には西谷墳墓群整備指導委員会を開催し、「西谷墳墓群史跡公園整備基本計画書」ができた。

現在は、西谷墳墓群は一部を公有地化し、園路や便益施設の整備を行って、2004年4月29日に西谷墳墓群史跡公園「出雲弥生の森」としてオープンしている。また、古代出雲王墓館（仮称）基本計画も策定し、整備を進めているところである。

国史跡指定後も2002年～2005年にかけて、出雲市教育委員会は更なる西谷墳墓群の内容確認調査及び保存修理に伴う発掘調査を行った。この調査の報告が本書である。

以上のように、西谷墳墓群は出雲市の文化財活用の中核遺跡となってきている。現在、墳丘を有するもの27基、墳丘を有さないもの5基以上あり、弥生時代後期後葉～古墳時代中期後半にかけて継続的に墳墓が築造された遺跡であることがわかってきた。特に、弥生時代の四隅突出型墳丘墓が6基あり、その内の2号墓、3号墓、4号墓、9号墓が大型の墳丘墓である。

### 【参考文献】

- 池田満雄1958「下原西谷丘陵出土土器」「出雲市文化財」第1集 出雲市教育委員会
- 東森市良1971「九重式土器について」「考古学雑誌」57巻1号
- 門脇俊彦1972「また出た発生期の古墳」「季刊文化財」17号
- 出雲考古学研究会編1980「西谷墳墓群」古代の出雲を考える2
- 渡辺貞幸他1992「西谷墳墓群の調査（I）」「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学考古学研究室
- 出雲市教育委員会編1993「簸川南地区広域営農団地農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会編1997「古代出雲文化展—神々の国 悠久の遺産」
- 出雲市教育委員会編1998「西谷墳墓群測量調査報告書」
- 出雲市・加茂町・斐川町編1998「計画名 古代出雲王国の里」文化財を活かしたモデル地域づくり推進計画
- 出雲市教育委員会編2000「西谷墳墓群—平成10年度発掘調査報告書—」
- 西谷墳墓群等整備検討委員会編2001「西谷墳墓群整備検討委員会提言書」
- 出雲市編2002「西谷墳墓群史跡公園整備基本計画書」
- 古代出雲王墓館（仮称）基本計画策定委員会編2005「古代出雲王墓館（仮称）基本計画」

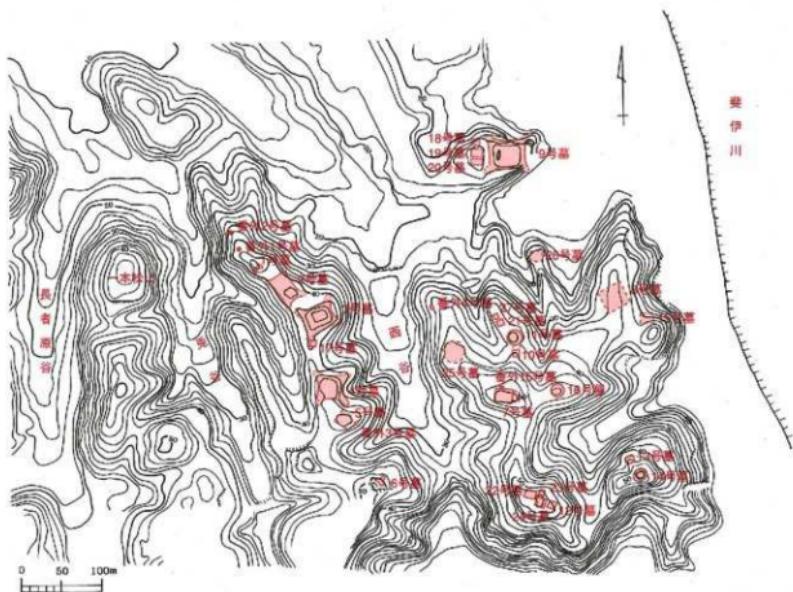


図2 西谷丘陵周辺の旧地形（渡辺貞幸他1992を改変）（1：6000）

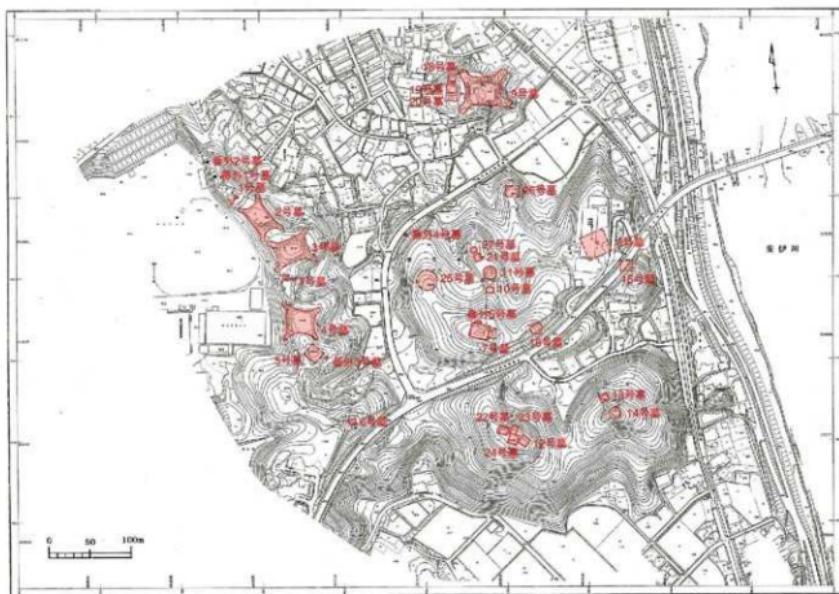


図3 西谷墳墓群分布図（1：6000）

## 第3章 調査の概要

今回の発掘調査は、西谷墳墓群の解明を目的とした。平成12年3月に当遺跡は国指定史跡となったが、指定範囲は四隅突出型墳丘墓が確認されている丘陵のみで、それ以外の古墳群は指定範囲外である。西谷墳墓群の全体が史跡に指定されなかった背景として、小規模古墳群であることと、その内容がほとんどわからていなかったためである。また、指定地内の四隅突出型墳丘墓にしても、その全容がわかっている墳墓は島根大学考古学研究室が調査した西谷3号墓、1972年に出雲市教育委員会が緊急調査した西谷1号墓のみである。このように一部が史跡である西谷墳墓群は不明な点が多く、今後の史跡の保護・活用のために、各墳墓の調査の必要性を強く感じていた。そこで、墳丘規模と形態、築造時期の確認を主な目的とし、トレンチ及び崩落断面確認を基本とした調査を実施した。調査を実施した墳墓は、2号墓、4号墓、6号墓、9号墓、10号墓、11号墓、17号墓、18号墓、19号墓、20号墓、21号墓、25号墓、26号墓、27号墓、14基の墳墓である。また、1972年に調査を実施した1号墓、番外1号墓、番外2号墓の正確な位置を確認するために、再発掘調査を行った。

墳墓の確認調査の他に、墳墓の保存修理を目的に2号墓、4号墓、9号墓の発掘調査を実施した。2号墓と4号墓は墳墓の復元を目的とした発掘調査を実施し、9号墓は崩落崖面保護工事の事前確認調査として発掘調査を実施した。

特に、平成16年8月23日～9月13日までの約3週間は、島根大学考古学研究室と出雲市が西谷2号墓の合同発掘調査を実施した。島根大学考古学研究室は主に残丘部の埋葬施設の調査と、墳端の配石構造の調査を行った。

掘削作業は全て手掘りによって行い、遺物取り上げ、遺構検出を行った。検出した遺構については、遺構図・土層図を作成し、写真撮影などによる記録を行った。調査後は、必要と思われる箇所を土壌で補強し、全てのトレンチを発生土により埋め戻しを行った。

## 第1節 西谷1号墓の再調査

1号墓は1972年に出雲市教育委員会が調査主体となり、調査担当者は島根県教育委員会の門脇俊彦氏により発掘調査が行われ、報告書が刊行してある。緊急発掘であったため、現状では1号墓の正確な位置が不明であった。よって、1号墓の正確な位置を確認することを目的に再調査を実施した。

### 1. 墳丘の現状（図5）

1号墓は西谷と兎谷に挟まれて北北西方に派生する丘陵上に位置する四隅突出型墳丘墓である。すぐ南東に2号墓が、北西には番外1号墓、番外2号墓がある。

現状は公園整備に伴って伐採が行われ、マウンドの北西及び北東側は、明治～戦後しばらく行われた採土によって大部分が削平され、西側は昭和39年の集中豪雨により地崩れしたようである。

### 2. 1972年の調査（図6）

1972年の調査の原因は1970年に地元研究者数名が西谷丘陵の北側で土壌暮らしいものの中に古式土師器壺が露呈していることを発見したことによる。その後、この丘陵の西側へ島根県立出雲商業高等学校が移転することになったため、1971年に島根県教育委員会が造成予定地内の分布調査を実施した。前記の古式土師器壺の露呈地点は造成地から東へ約1mはずれた位置にあり、また、他にも古代墳墓があることが判明した。そこで、これらの墳墓は造成予定地内をはずれているが、西側斜面は地崩れにより地山が露出している状況で、今後遺跡が崩壊する危険性が高いため、記録保存の目的で緊急発掘調査を実施した。これが、西谷墳墓群の発掘調査の始まりである。

1972年の調査の結果、1号墓が四隅突出型墳丘墓で、主体部が4基残存していることがわかった。出土遺物は報告書では「周溝底で検出した少数の土師器片のみであったが、この土師器片の中に、口縁部片があり、そのタイプを見るといわゆる5字口縁に沈線を残す式のもので・・・」と記述されているのみで、実測図の掲載はなかった。現在、その土器は行方不明である。

### 3. 再調査（図8）

調査実施前に、1972年の調査記録（原図）が島根県古代文化センターに保管していると聞き、閲覧及び複写を行った。公表されていない測量図や遺物実測図・写真が存在し、今回の再調査を実施するにあたり、かなりの情報を得ることができた。また、公表されていない土器実測図・写真を今回掲載し、今後の西谷墳墓群の解明に役立てたい。

再調査を実施した場所は、1号墓南東側の墳端で配石構造が残存している部分である。配石構造を実測し、1972年の調査図面と重ねて、1号墓の正確な位置が判明した。加えて立面図の作成を行った。配石構造は斜面に貼石、裾部に1段の敷石、1列の立石が巡っている。

土器実測図は2点あり、実測図に出土地の記載がないためはっきりしないが、出土状況の写真と比較し、西谷1号墓の周溝底で出土した土器と考え掲載する。図7の1・2は壺の口縁部片から屈曲部の破片で、2次口縁が上部に大きく拡張し、口縁部外面に擬円線が施されている。胴部内面にはケズリが施されている。1は口径約29cmを測る。2は口縁上部を欠いている。1よりやや小さい壺と考えられ、残存最大径が約25cmを測る。これらの土器の時期は弥生後期後葉（草田3期）と考えられる。元位置を留めていないが、西谷1号墓に伴う土器と考え、当墳墓の時期は弥生後期後葉であり、西谷3号墓と近い時期に築造されたと考えられる。



図4 西谷1号～6号基測量図 (1 : 1000)

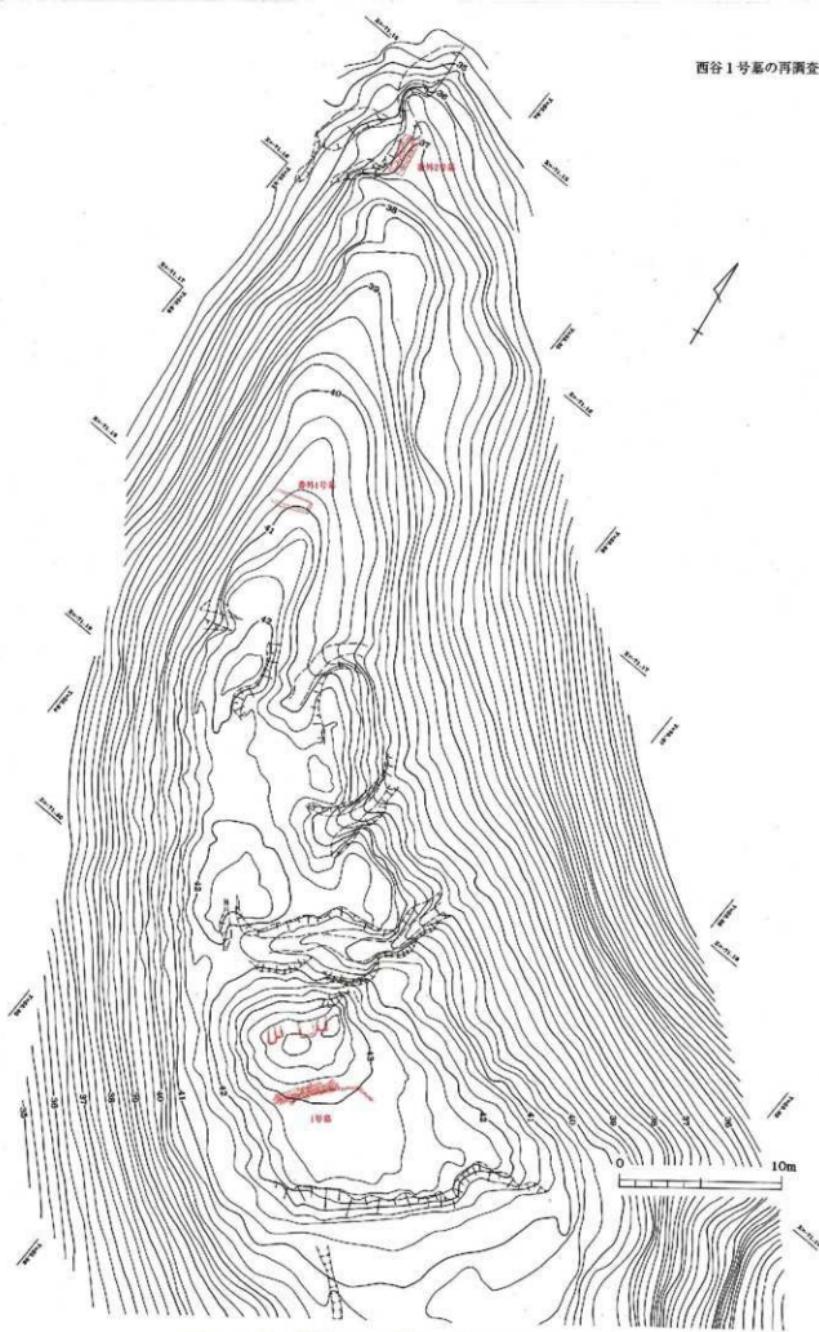


図5 1号・番外1号・番外2号墓測量図 (1 : 300)

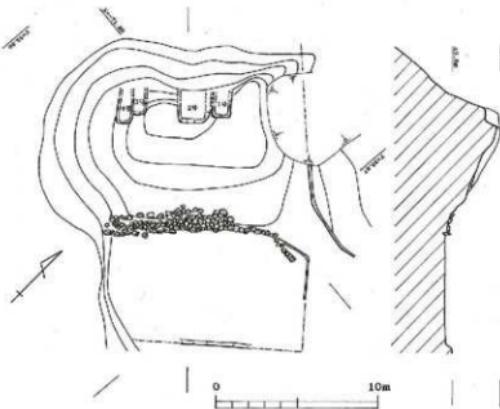


図6 1号墓 (1:300)

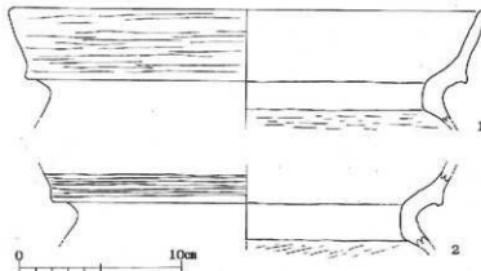


図7 1号墓1972年出土土器 (1:3)

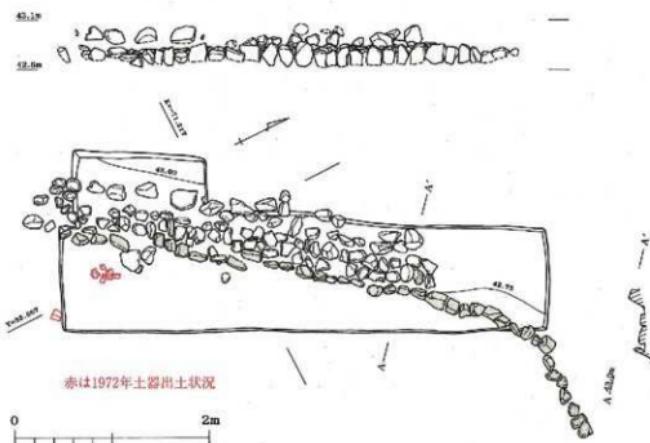


図8 1号墓配石実測図 (1:50)

## 第2節 西谷番外1号墓の再調査

番外1号墓の調査は、1972年に1号墓と同じ原因で調査が実施されている。1970年に地元研究者数名が西谷丘陵の北側で土壙墓らしいものの中に古式土師器壺が露呈していることを発見した。これが番外1号墓である。番外とは西谷墳墓群の独特な呼び方で、マウンドのない墓を番外と呼んでいる。

### 1. 遺構の現状（図5）

番外1号墓は西谷と兎谷に挟まれて北北西方向に派生する丘陵上に位置する土壙墓である。南東には1号墓が、北西には番外2号墓がある。1号墓から北西にかけて尾根は狭くなり、標高は次第に低くなる。現状は山林で、赤道がちょうど遺構の真上を通っている。

### 2. 1972年の調査（図9）

調査の結果、番外1号墓は土壙墓で、土壙の西南西は地崩れによって壊れていることがわかった。土壙の規模は、上面で長軸2.2m以上、短軸0.7m～0.9m、底面で長軸2.1m以上、短軸0.54m～0.6m、深さ0.3mの細長い長方形をしている。埋葬方法については、木棺を直葬したと考えられるが、木棺の痕跡は全く残っていなかった。

番外1号墓の発見の原因となった露呈した古式土師器壺は副葬品として考えられ、鼓型器台も出土している。土器の出土状況は、丘陵の土砂崩れの際に若干元の位置から動いたものらしく、墓壙ベースよりも前下にずり落ちた状態で検出した。器台の上に壺形土器を載せて副葬していたと考えられている。番外1号墓の時期は土器の特徴から、飯石郡（現雲南市）三刀屋町松本1号墳（古墳時代前期）と同時期と考えられているが、実測図は掲載されていない。

### 3. 再調査（図9）

番外1号墓はマウンドがないため、現状ではどこに当遺構があるか不明であった。1972年調査の測量図を参考に、トレンチを設定して土壙墓の検出を行った。調査の結果、番外1号墓は尾根に垂直に掘り込まれており、平面及び断面図を作成し、正確な位置が判明した。

また、1972年の原図ファイルに番外1号墓と考えられる土器実測図があったため、それを掲載する。実測図には出土地の記載がないため、断定することはできないが、出土状況の写真などから番外1号墓出土土器と考え報告する。図10-1は複合口縁壺で、胴部最大径部分を欠いている。口径約21.5cm、復元高約35cmを測る。1次口縁は大きく外反し、頸部には有輪羽状文が施してある。胴部外面はヨコハケメ、内面はケズリが施してある。図10-2は鼓形器台の受部から屈曲部にかけての破片で、口径約18cmを測る。脚部内面にはケズリが施してある。これらの土器の時期は、古墳時代前期と考えられ、番外1号墓の時期は古墳時代前期と考えられる。図10-1の底部片は出雲市教育委員会で保管しているがその他の遺物は行方不明である。

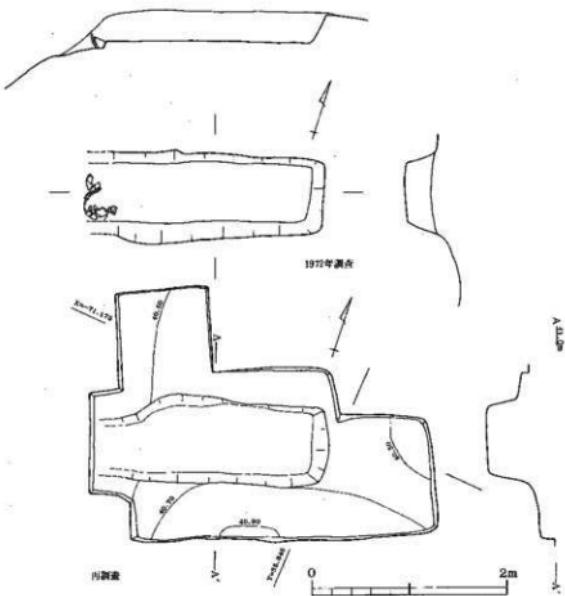


図9 番外1号墓 (1:50)

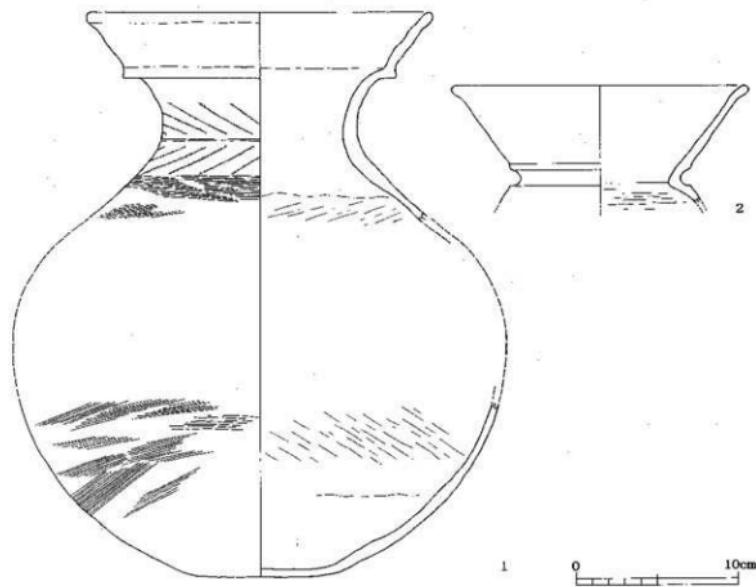


図10 番外1号墓出土土器 (1:3)

### 第3節 西谷番外2号墓の再調査(図11)

#### 1. 1972年の調査

番外2号墓は番外1号墓の北側の狭い尾根状に位置する。この付近も土砂崩れが激しく、遺構の西部部分の土が流失した状況で発見され、緊急発掘が行われた。調査の結果、番外2号墓は上壙墓で内部に箱式石棺が安置してあるもので、土壙は南北に主軸をおき、北側が広く作られている。土壙の底部規模は長さ2.5m、幅0.9m~1.02m、深さ0.7mを測る。土壙の内部には主軸を若干変えた箱式石棺があり、南側の底には2個の石が重ねて置いてあった。これを石枕と判断すれば、頭は南にあったと考えられる。また、石棺の構造は、棺身を構成する石を土壙底に置き並べ、外側の粘土と控積みの石で支えてあり、棺底には玉砂利が敷き詰めてある。遺物は出土していないため、時期は不明である。調査後は、そのまま埋め戻されている。

#### 2. 再調査

番外2号墓はマウンドがないため、現状ではどこに当遺構があるか不明であった。1972年調査の測量図を参考に、既に位置が確定した1号墓や番外1号墓からの距離を測り、トレーナーを設定して土壙墓の検出を行った。調査の結果、20cm~30cmの扁平な石と玉砂利を検出した。この玉砂利は箱式石棺の棺底の玉砂利であると考えられるが、当時の箱式石棺の面影はなく遺構が崩壊した状態と判断した。1972年の調査以降しばらくの間は当遺構が現地で確認できたようであるが、ここ十数年の間に崩壊した可能性が高い。

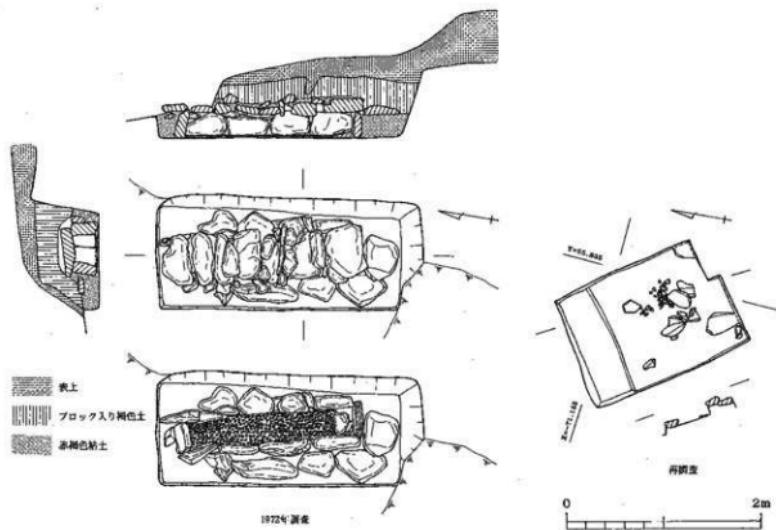


図11 番外2号墓 (1:50)

## 第4節 西谷2号墓の調査

### 1. 墳丘の現状

西谷2号墓は西谷と兎谷に挟まれて北北西方向に派生する尾根上、標高41mに立地する四隅突出型墳丘墓である。北西には1号墓、南東には3号墓が尾根沿いに隣接しており、2号墓はその間の尾根に築造してある。

墳丘の北西側は明治初年から戦後しばらく行われた採土によって大部分が削平されているため、東西15m、高さ2mの残丘のみが確認できる。その後、山林となっていたが現在は整備のために伐採が行われて、南東側は3号墓、4号墓が見え、北西側は1号墓がよく見える状況である。

### 2. 過去の調査

2号墓は1980年に出雲考古学研究会により発見され、墳丘測量が行われ15m程度の小型の四隅突出型墳丘墓と報告された。また、墳丘の断面観察が行われ、2つの土壙を確認したと報告されている。

その後、島根大学考古学研究室により詳細な測量図作成が行われた。出雲市教育委員会も周辺の追加測量を行い2号墓の測量図が完成した。

1998年には出雲市教育委員会が規模確認のための発掘調査を行っている。調査の結果、北端を確認し、南北36m×東西24m、高さ3.5m、突出部を含めると約50mの大型の墳丘墓となった。そして、全体の3/4が破壊された状況であることがわかった。併せて、吉備の特殊壺・器台も出土していた。

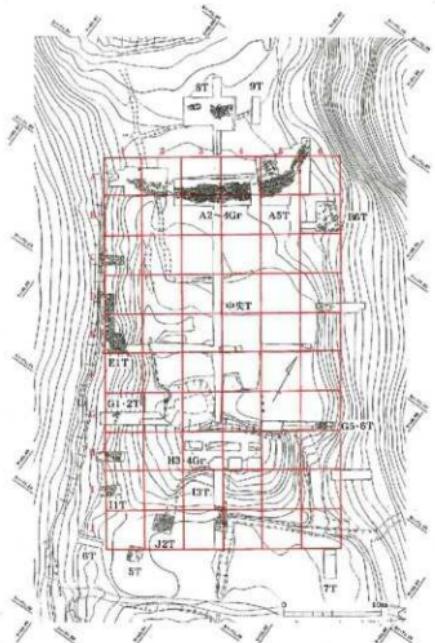


図12 2号墓トレチ配置図 (1:500)

### 3. トレチ配置と調査区の分担

(図12)

2号墓の調査は、2002年と2004年に行った。2002年は突出部確認と、東端確認を目的に地形に合わせてトレチを設定した。トレチは幅1mを基本とし、必要と判断した場合拡張した。2004年は、2号墓の復元整備を行うため、詳細なデータを得ることを目的とした。調査区は4mグリッドを設定してトレチ調査を行った。また、併せて残丘の崖面精査を行った。トレチ名のついてないものは、1998年に調査したものである。また、1998年調査のトレチを拡張したものもある。

そして、2004年8月23日～9月13日の約3週間は島根大学考古学研究室と合同発掘調査を行った。主に、島根大学考古学研究室は残丘部における埋葬施設の確認調査と北側墳壇部(A2～4グリッド)の配石構造の調査、及びG・Eトレチの墳丘調査を行い、それ以外は出雲市教育委員会が行っている。

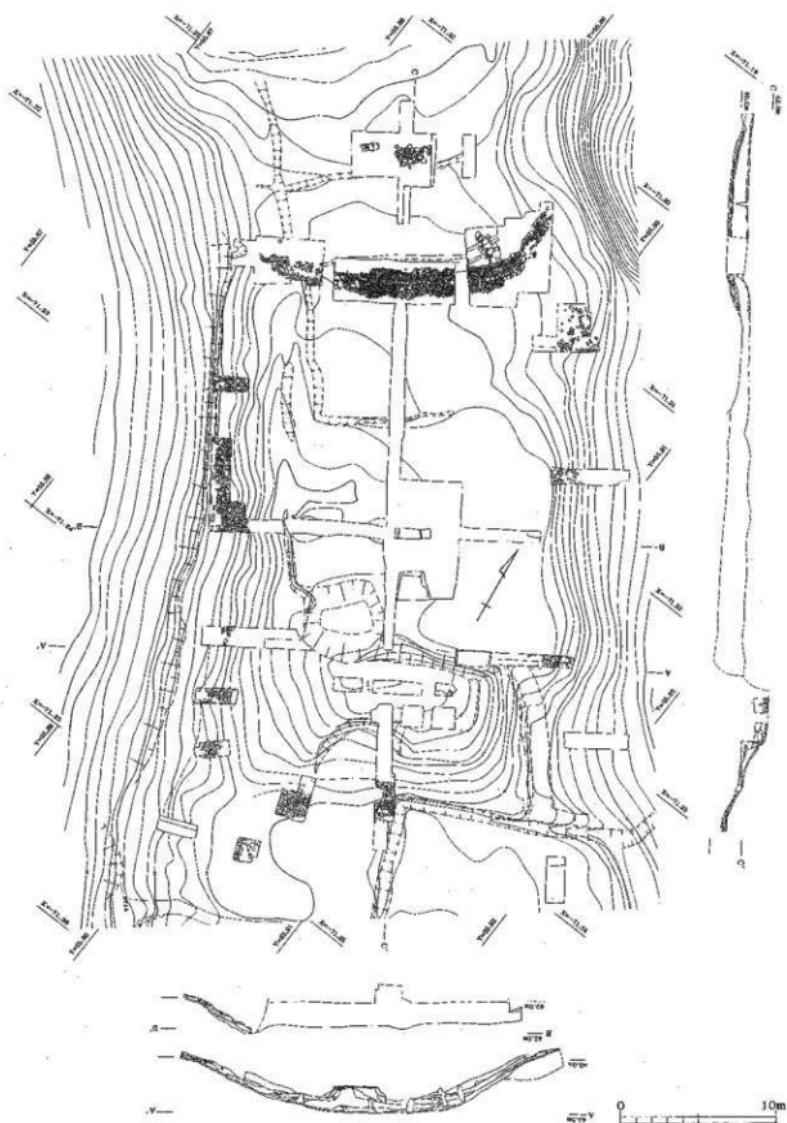


図13 2号墓調査後測量図（1:300）

#### 4. 第1主体の調査

##### (1) 墳頂部における発掘区の設定 (図14、16)

西谷2号墓の墳丘は大部分が土取りのために削られており、南側の約1/4のみが残存している。今回の調査では、残丘部における埋葬施設の有無を確認した。

調査にあたっては、H3とH4の各グリッドを $2 \times 2\text{m}$ で4等分し、8つの区画にわけて発掘した。発掘区は、一部拡張したり土手をはずしたりしたため、最終的には図14のようになっている。

調査の結果、H3グリッドの北部からH4グリッドの北西部にかけて、大型土壙の南東辺を示す平面プランが検出された。また、H4グリッドの北東部では、表土から0.5m程度掘り下げたところで、盛土内に搅乱もしくは土坑と考えられる暗褐色土を確認した(図16)。しかし、今回は内部まで調査を進めていないため、時期・性格については不明である。その他の発掘区では、遺構・遺物とともに検出されなかった。

##### (2) 平面プランの確認 (図14、図15-(1))

H3グリッド北部からH4グリッド北西部にかけて検出された大型の土壙を、第1主体と呼ぶことにする。土壙内部の土(平面図の⑤層)と土壙外部の土(⑥層)を比べると、土壙外部の土の方が白・黄・赤色のくさり疊片が多く、色調もやや赤みを帯びている。

第1主体の平面プランは、墳丘表土から東で0.78m、西で0.85mの深さで検出された。これは、後述する崖断面における土壙の掘り込み面とほぼ同じレベルであることから、この平面プランが崖断面で確認された土壙の南東辺を示していることは確実である。図15からわかるように、平面プランのラインを延長していくと、崖断面における土壙の東西の立ち上がりに一致する。

第1主体の平面規模は南北2m以上、東西約4mで、長軸が南北方向を向いているか東西方向を向いているかは不明である。形態は隅丸(長)方形であると考えられる。なお、土壙内部の調査は実施していない。

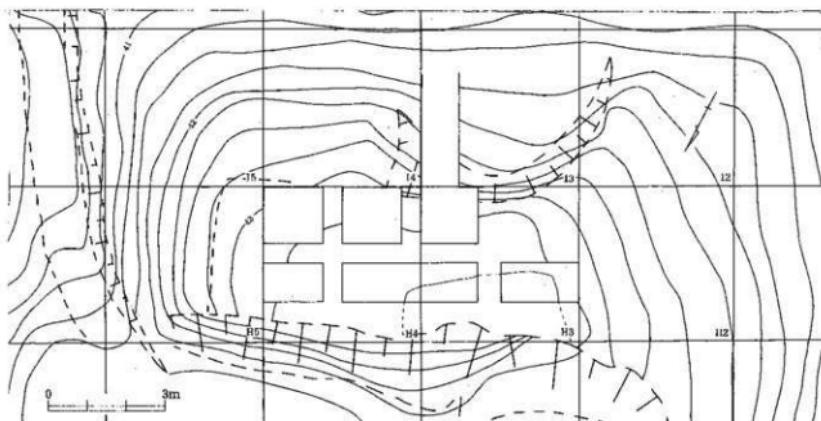


図14 2号墓墳頂部トレーンチ配置概念図 (1:125)

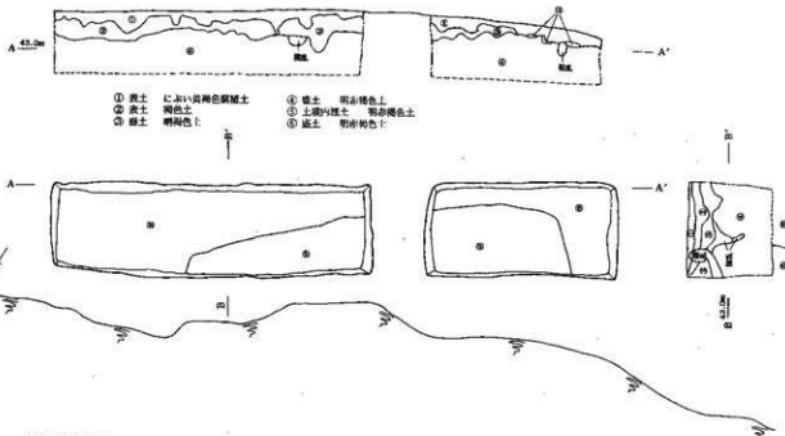
土器の細片が、土壤上部の表土および盛土最上部から十数点検出されている。土壤上に置かれていた土器が残存していた可能性がある。

### (3) 崖断面の調査 (図15-(ii))

残丘部に埋葬施設が遺存していないかどうかを調べるために、残丘北側の崖断面の清掃を行なった。清掃は、遺跡の保護のため腐植土を取り除くにとどめて、必要以上に削り込むことはしなかった。その結果、図15-(ii)のような大規模な土壤の断面が検出された。前記したように、これは墳頂部でプランが確認された第1主体の断面である。

第1主体は、地山である山廻砾層の上に積まれた盛土から掘り込まれている。土壤は二段掘りで、その崖断面における寸法は、外塘上縁で東西4.34m、掘り込み面からの深さは東で0.66m、西で0.56m

(i) 平面図



(ii) 崖断面図

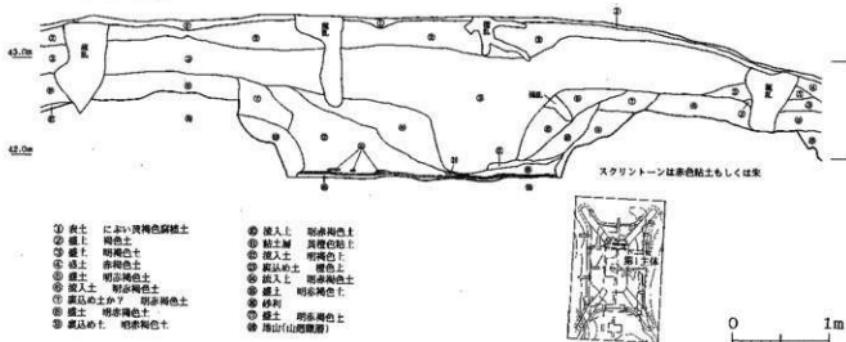


図15 2号墓第1主体 (1:50)

m、内壠上縁で東西3.04m、底面の東西は2.80m、外壠底からの深さは東で0.36m、西で0.32mである。ただし、これらの数値はあくまで崖断面における計測値であり、土壙の長軸・短軸の規模を示しているわけではない。外壠の東壁は垂直に近く掘り込まれているが、西壁はなだらかに傾斜している。

土壙の底には、東端と西端を除いた部分には細かな砂利がわずかに敷かれ、その上に赤色粘土もしくは朱の薄い層がある。一部削られているためにこれらを確認することができない部分もあるが、その両側では確認することができる。本来は両端を除く全面に砂利と赤色粘土もしくは朱が敷かれていたと判断できる。東端と西端では砂利と赤色粘土もしくは朱が見られず、地山の上に直接埋土(⑨・⑩層)がのっている。これらの土層は傾斜が垂直に近いことから、木棺もしくは木桶を支える裏込めの土だと判断される。したがって、この裏込め土に挟まれた範囲が木棺もしくは木桶であり、その範囲に砂利および赤色粘土もしくは朱が広がっているわけである。木棺もしくは木桶の規模は、崖断面で東西約2.65mである。

土壙底面に敷かれた砂利と赤色粘土もしくは朱の上面には粘土層(⑪層)が断続的に存在している。これは蓋板の上に置かれていた粘土が、木棺もしくは木桶が腐朽し崩れた時に一緒に落ち込んだものと考えられる。よって、その下の⑫層は木棺もしくは木桶の陥没の初期において流れ込んだ土と考えられる。

②・③層は、土壙を埋めた後に積まれ、墳丘の形を整えた盛土である。図15-(ii)に見られるように、③層は土壙の中央やや西寄りで土壙の底近くまで大きく落ち込んでおり、その部分の土は橙色をしていたが、明確に分層することはできなかった。

②層の上部には土器細片がわずかに露出していた。しかし、検出した箇所は木の根の付近であり、本来の位置を示しているかどうかはわからない。

なお、出雲考古学研究会による調査では残丘の北西側削平部断面に小さな土壙を2基確認したと報告されている。しかし、今回の調査では該当するようなものは認められなかった。

#### (4) 小結

2号墓は大部分が土取りのために削られており、今回調査することができた残丘は墳丘南端の一部にすぎない。したがって、第1主体は2号墓における中心的な埋葬施設ではなく、周辺埋葬の1つであると考えられる。

第1主体は大部分が破壊されているため、土壙の長軸が南北に向いているのか、東西に向いているのかはわからない。しかし、土壙の規模は東西約4mであり、これが短軸の規模であるとすれば、西谷3号墓の中心的な埋葬施設である第1主体・第4主体に匹敵する大規模なものであったことになる。また、長軸と考えてもかなり大型のものであると考えられる。したがって、西谷2号墓の中央にあった中心的な埋葬施設はこれよりもさらに大規模なものであったと推測されよう。



図16 2号墓H4グリッド北東部 (1:50)

次に第1主体の構造について若干の検討をしたい。

崖断面において検出された土壙には、木棺もしくは木槨の裏込め土と考えられる土層が見られた。裏込め土は上下2層に分層できるが、その上にのる盛土（③層）が土壙の中央付近で落ち込んで土壙の底近くまで届いており、蓋板の上に置かれていたと考えられる粘土（⑪層）の直上に達している。このような土壙の堆積状況から考えると、木棺もしくは木槨の高さは90cm近くあった可能性がある。土壙底に見られた細かな砂利は棺もしくは槨の下に敷かれたものと考えられるが、これは裏込め土の下にはほとんど及んでいなかった。土壙の周縁部には礫が敷かれていたのかもしれない。

木棺もしくは木槨の平面規模は崖断面で東西2.65mを測る。隣接する西谷3号墓の中心的埋葬施設の一つである第1主体の木槨が南北2.60m、東西1.20m、木棺が南北2.20m、東西0.96mであることを考えると、2号墓の第1主体は木棺としては規模が大変大きいことになるが、以下のように、木棺と木槨の両方の可能性を考えておきたい。

#### i. 大型木棺の場合

3号墓第1主体では、朱は木棺内のみに敷かれ、その外側の木槨内には広がっていない。しかし、2号墓第1主体では、赤色粘土もしくは朱が裏込め土に囲まれた範囲に同じように広がっている。赤色粘土もしくは朱が棺内に敷かれるものだったとすれば、第1主体は大型木棺の可能性が高いことになる。

#### ii. 棺槨二重構造の場合

崖断面では木棺の明瞭な痕跡を認めることはできなかったが、木槨内全体に赤色粘土もしくは朱が敷かれていたとすれば、棺槨二重構造であった可能性もあることになる。この場合注意されるのは、赤色粘土もしくは朱は、③層が落ち込んでいる部分の下およびその周辺が、その両側の部分よりも赤味が強かったことである。したがって、木棺の内部には朱が、その外の木槨内には赤色粘土が敷かれていたという可能性も考えられよう。

これらのことから、大型木棺であったとも木槨をもつ二重構造をしていたとも考えられ、現状ではどちらであると決めることはできない。

（客野祐治・鈴木小織・中村佳珠）

### 5. 各トレンチの調査

#### A 2～4グリッド（図17）

北側埴堀は、出雲市教育委員会によるこれまでの調査から配石構造の遺存状態が良いと予想されたので、この部分の配石構造を精査すること目的として、A 2～4グリッドの南側からB 2～4グリッドの北側にかけて、図17のように東西8m、南北3mのトレンチを設定し調査を行った。

#### ・土層堆積状況

土層観察のためトレンチ内に1m幅の土手を2mおきに残した。この土手は断面実測の後に取り払った。土層を観察すると、表土の下には厚さ50～70cmの擾乱土が堆積していた。これは陶土を探取した際の排水と考えられる。これをさらに掘り下げると、流土が40～50cmにわたって確認できた。流土下層である⑨層には転石が多く含まれている。その下から貼石と2段の敷石・立石を持つ配石構造が良好な遺存状態で確認された。

### ・配石構造

まず墳丘斜面では、標高40.5m付近から下に貼石が確認された。その上の墳丘は削平されており、前述した流土中にはかなり多くの転石が含まれていたことから、本来の貼石はかなり上方まで施されていたと考えられる。貼石は西端から約2mの間では遺存状態が悪く、一部しか認められなかつた。

貼石の大きさは場所によって明確な差がある。トレンチの東端から約1.2mの間と西端から約1.8mの間には15~20cm大の石が使われている。東端から約1.2m~3.6mの間には20~30cm大のやや大きめの石が使われ、中には40cmを超える大きなものも見られる。そして、東端から約3.6~6.2mの間では10cm大の特に小さな石が密につめられた状態で用いられている。また、貼石の裾部付近では上方の貼石に比べて大きな石が使われる傾向がある。用いられた石はほとんどが丸みを帯びた河原石であるが、東側の一部には板石もみられる。

配石の断面図から墳丘斜面は概ね30度の傾斜をもっていることがわかる。貼石は下から上へ向かってなされていると考えられる。墳丘斜面には地山の上に若干の盛土がなされているが、貼石の大きなものは広い面を貼るように、小さなものは狭い面を差し込んで、斜面に向けて盛土にしっかりと据えられており、小さな石を用いた部分では貼っているというよりは積んでいるような印象を与える。斜面貼石下端の標高は西端で39.8m、東端で39.7mであり、西から東に向かってやや傾斜している。

次に敷石と立石について述べる。上段の敷石は10~15cm大の石をおおよそ2列に並べており、敷石帯の幅は約20~30cmである。この外方に上段の立石がめぐらされており、20cm大の石が用いられている。この立石の外方に上段より5~10cmほど低いレベルで下段の敷石と立石がめぐらしている。下段の敷石は10~20cm大の石を用いており、上段のそれよりもやや幅が狭くなっている。下段の立石は10~40cm大の石が使われている。上段、下段の立石とも貼石や敷石に比べると扁平な石を立て並べて用いている。短軸に比べて長軸が特に長い石は、長軸を倒して用いているようである。長軸と短軸にあまり差がないものは、特にどちらかを倒して用いるというような傾向は認められない。敷石と立石の石の大きさは貼石で見られたような顕著な違いはないが、やはり近くの貼石の大きさに合わせた多少の違いがあるように観察される。下段立石下端の標高は西側で39.7m、東側では39.6mであり、やはり西から東に向かってやや傾斜している。

敷石と立石の遺存状態を見ると、上段の敷石、立石はほぼ完存している。しかし、下段の敷石は東端から0.7~1.2mの間、東端から2.5~4.0mまでの間、東端から5.5m~西端までの間で失われている。また、下段の立石は東端から0.6m~1.1mの間、東端から2.6~3.9mまでの間、東端から5.4mから西端で失われていた。

### ・小結

この調査区では墳丘裾部を囲繞した2段の配石構造が良好な状態で確認できた。また、一定の範囲で石の大きさに明確な違いがあることも観察できた。斜面の貼石の下端と上段立石の下端は西側から東側にかけて同じような傾斜を示しており、ともに東西の標高差はわずか10cmほどであるなど、造墓工事の見事な企画性がうかがわれる。

(中村倫子・百田麻)

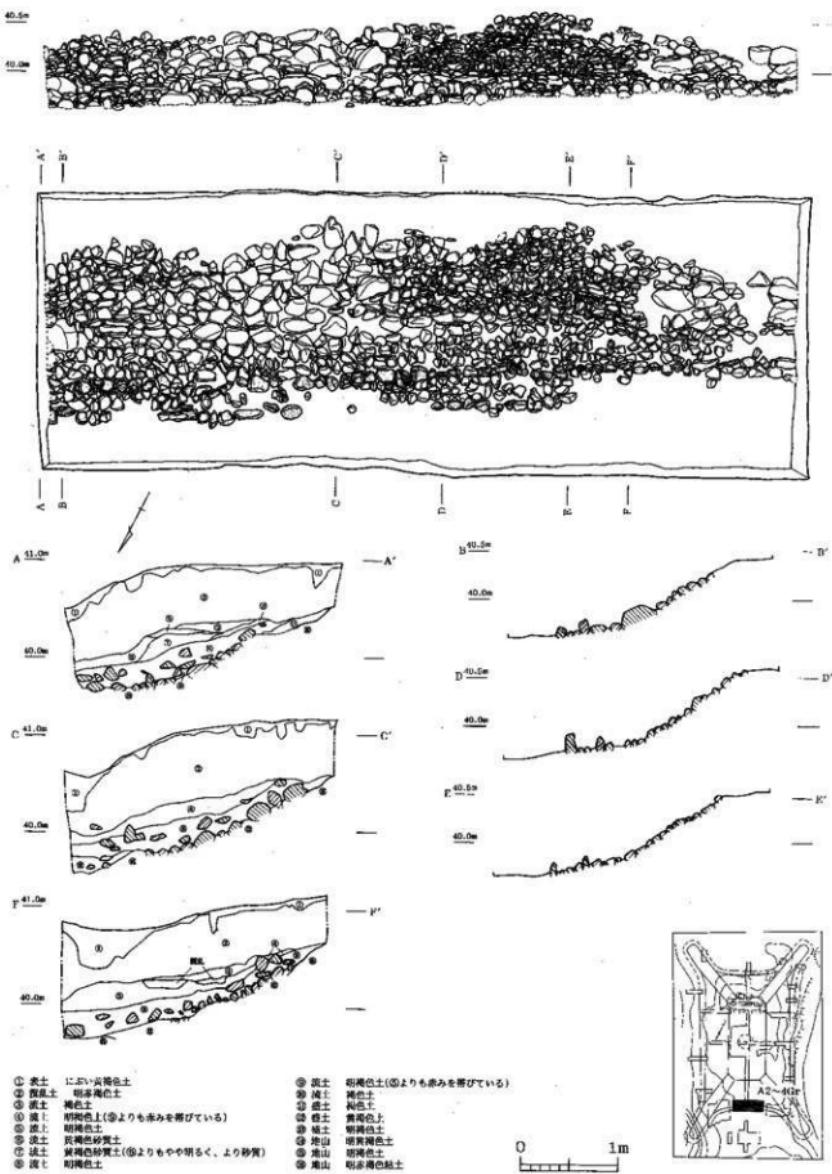


図17 2号墓A2～4グリッド (1:50)

## E 1 トレンチ (図18)

貼石がどの程度残存しているかを確認するために、西側の墳丘斜面にFラインに沿って東西5m、南北1mのトレンチを設け、1998年に出雲市教育委員会が調査したW-2区に連続させた。

陶土採取時の排土と考えられる搅乱土(①層)、表土(②層)の下には、本来の墳丘面からの流土(③~⑥層)が20~40cm程度堆積していた。地山上面が凹凸していることから、墳丘斜面の上方は削られていると考えられる。墳丘斜面の角度は25~35度程度である。

配石構造は比較的良好な状態で確認された。斜面の貼石は標高約40.7mより下で幅約1.4mにわたって確認されたが、本来の貼石はかなり上方まで施されていたと考えられる。貼石は盛土の上に密に貼りめぐらされており、その多くは石の下部が墳丘盛土に入り込むような形で貼られていた。斜面の貼石に使用された石は20~30cm大の大きめの河原石が多く、斜面の下端近くで比較的大形の扁平な石を多用する傾向がみられる。斜面の貼石下端の標高は39.9mである。

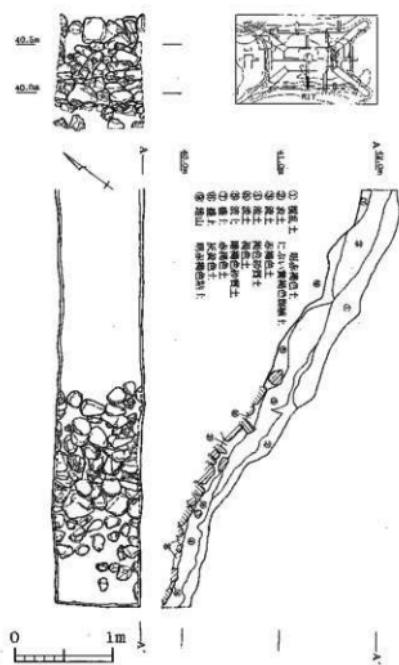


図18 2号墓E1トレンチ (1:50)

斜面の貼石の外方には、2列の敷石および立石が確認された。貼石下端外方に幅40~60cmの敷石帯がめぐり、25cm大以下の比較的小形の石が敷きつめられている。この敷石帯の外周には20~30cm大の扁平な石を立て並べた立石がめぐらされる。この立石の外方にはもう1段ずつ同様の敷石および立石が、内側のそれより10~20cm低いレベルでめぐっているが、遺存状態はあまり良くなかった。  
(片山尚子)

## G 1・2 トレンチ (図19)

東西方向の墳丘断面図を作成すること、配石構造の遺存状態を確認することを目的とし、残丘部崖面の継ぎとなる西側の墳丘斜面から墳丘裾部にかけて、東西7m、南北1.5mのトレンチを設け調査した。トレンチはG1・G2グリッドの中央南寄りに位置している。

ここでは、墳丘斜面の低い方には表土の下に墳丘斜面からの流土(②・③層)が20~50cm程度堆積している。流土中には転石が多く含まれている。墳丘の盛土については、地山の上に⑩~⑫層を盛った後、斜面の高い方に⑨層を厚く盛り、さらにその上に④~⑧層を積んで墳丘の形を整えている。

墳丘斜面の下方では、流土の下に斜面の貼石

の一部が確認されたが、遺存状態は良くなかった。貼石は盛土（⑫層）の上に貼られており、残存していた貼石には15~35cm大の河原石が使用されていた。斜面の貼石下端の標高は推定で40.0m程度と考えられる。敷石・立石は残存していなかった。

流土下層（③層）から土器片がいくつか検出された。それらの中には、綾杉文をもつ特異な土器の破片も含まれている（図48-9~11）。

（片山尚子）

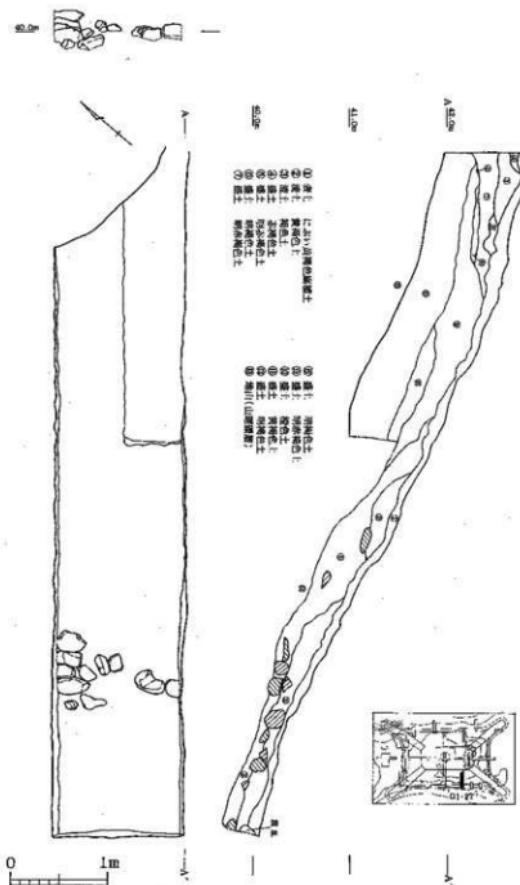


図19 2号墓G1・2トレンチ (1:50)

## I 1トレーニチ(図20)

I 1トレーニチは西端から南西突出部に向かう部分の墳形を確認する目的で調査した。調査の結果、貼石・敷石を確認した。立石部分は崩壊している。かなり動いているため、また、斜面が急であるために、明確な貼石と敷石の区別は難しい。貼石には主に30cm程度の石が、敷石部分には10~20cmの小さい石が目立つ。

貼石・敷石はトレーニチに対し斜めに目地が通っていて、突出部に曲がり始めた部分と考えられる。遺物は出土していない。敷石の下には約10cmの盛土を確認した。

## 5トレーニチ・6トレーニチ(図21)

5・6トレーニチは南西突出部の幅及び形を確認するために調査した。調査の結果、探土の搅乱を受けていて突出部に関係する遺構は確認できなかった。5トレーニチで石を確認したが、元位置ではないと判断した。

## J 2トレーニチ(図22)

J 2トレーニチは、南端から南西突出部へ曲がる部分の形を確認するために調査した。調査の結果、貼石と2段の敷石・立石を確認し、非常に残りの良好な場所であった。また、墳端も明確で、南西突出部へ曲がる部分であることがわかった。貼石・敷石は地山に置かれている。

出土遺物は搅乱土内の萬祥山焼と一緒に鉄製品が2点出土している。問題はこの鉄製品の出自であり、可能性として2案あり、1つは2号墓の埋葬施設に伴うもので、探土の際に出土し萬祥山焼と一緒に捨てられた説と、別の墳墓で出土しこの場所に捨てられた説が考えられる。単純に2号墓に伴

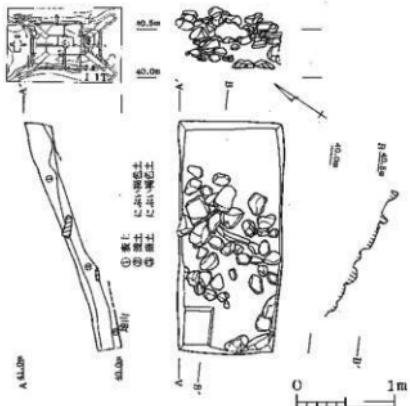


図20 2号墓I 1トレーニチ(1:50)

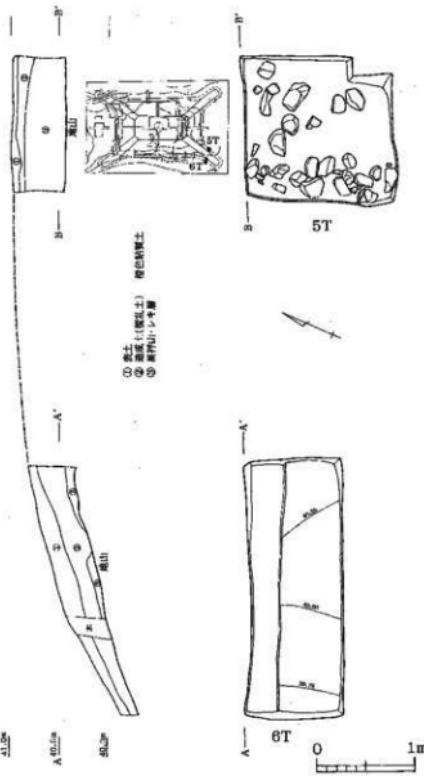


図21 2号墓5・6トレーニチ(1:50)

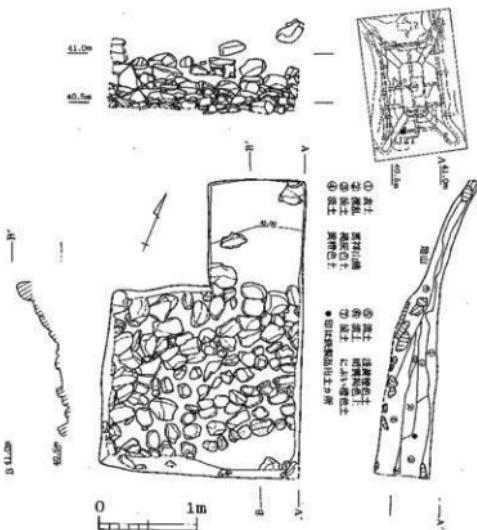


図22 2号墓J2トレンチ (1:50)

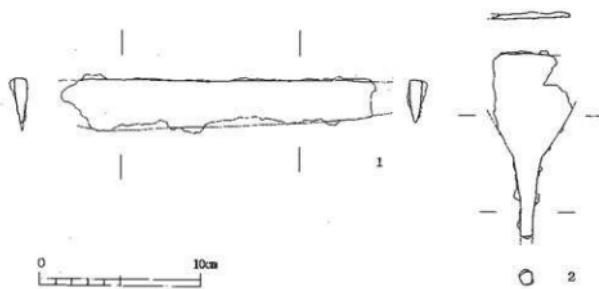


図23 2号墓J2トレンチ出土鉄製品 (1:3)

う遺物と断定することは難しい。

図23の1は鐵刀の破片であり、切っ先・柄は残っていない。刃部もかなり壊れている。残存長19.3cm、最大幅3.2cm、最小幅2.2cm、厚さ0.8cmを測る。島根県内の弥生時代遺跡から刀が出土することは珍しいが、鳥取県では出土している。

図23の2は、鐵鎌に似た鐵製品であるが、国内には類例がない不明遺物であり、現段階では鐵鎌状鉄製品と呼んで、今後の検討課題としたい。円形に近い茎をもち、ヘラ状に上に開くような形をしているが、先の両端は欠けていて正確な形態は不明である。残存長11.5cm、残存幅4.8cm、茎径0.8cm、厚さ0.4cmを測る。別の鐵製品も付着しているようである。

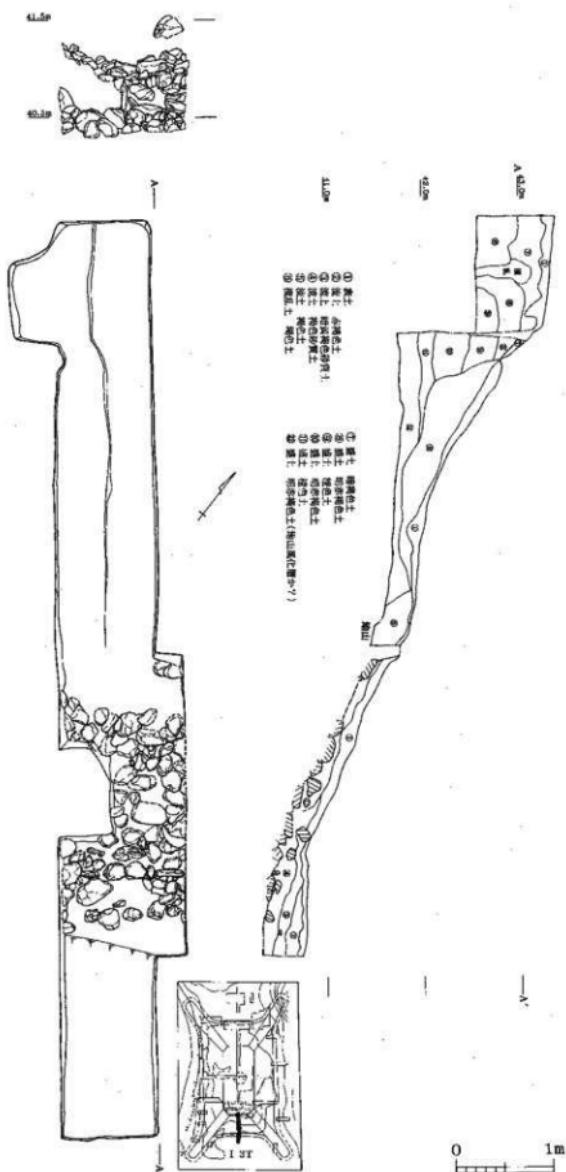


図24 2号墓I-3トレンチ (1:50)

## 図24 2号墓I-3トレンチ (1:50)

I-3トレンチは1998年のSトレンチを墳頂側に拡張したトレンチである。このトレンチは2号墓の中心を通るトレンチで、貼石が残存していないため墳丘の断ち割りを目的とし調査した。1998年のSトレンチでは、貼石、2段の敷石・立石を確認し、墳端は明確である。

今回の調査の結果、墳丘斜面は搅乱を受けているが、墳頂部では約1.5mの盛土で墳丘を築造していることがわかった。

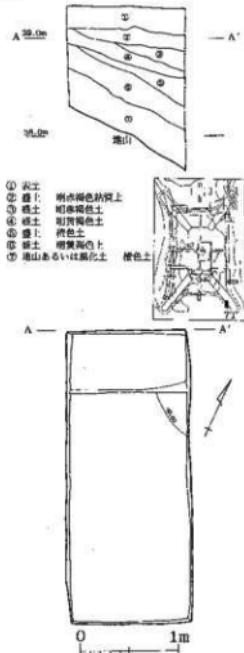


図25 2号墓I-7トレンチ (1:50)

## 7 トレンチ (図25)

7 トレンチは南東突出部の南側を調査した。既に南東突出部は削平されていて、現況地形からは突出部とわかる情報を得ることはできない。しかし、突出部の築造方法を解明するためトレンチ調査を行った。調査の結果、墳丘面は現況でわかるように削平されていた。また、築造前の地形は、より狭い尾根であったことがわかつた。狭い尾根に突出部を作るため、7 トレンチ部分では40cm～1mの盛土をし築造している。南東突出部は復元すると、7 トレンチから東へ約6mは突出部が延びると予想すると、かなりの盛土が行われたと考えられる。

## G 5・6 トレンチ (図26)

G 5・6 トレンチは、1998年の調査では不明であった東端を確認するために調査を行った。また、残丘の崖面とほぼ同じ位置であるため、東西のラインの断面土層を作成した。

調査の結果、墳丘の搅乱土が斜面に押し出してあることがわかつた。また、貼石・敷石を確認した。貼石の1段目は明確に残っていたが、2段目は崩壊していた。他の墳端の例から、2段の敷石・立石の幅が80cm～1mであるからトレンチ内に墳端があると考えられる。

墳丘斜面は40cm～60cmの盛土があり、その上面に貼石が行われている。

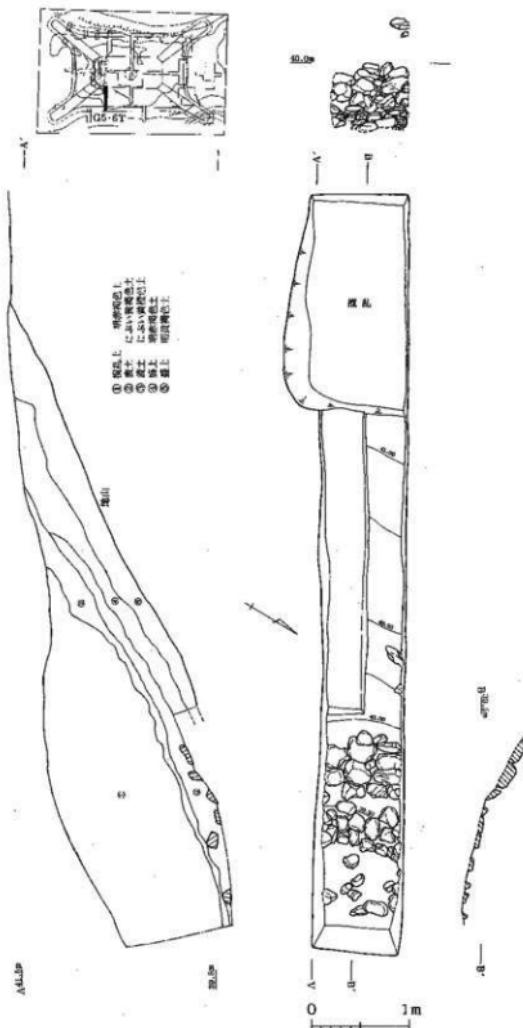


図26 2号墓G 5・6 トレンチ (1:50)

## B 6 トレンチ (図27)

B 6 トレンチは東端の北東突出部に近い部分を確認する目的で調査を行った。調査の結果、かなり配石が崩壊している状況であったが、一部に配石が残っている部分があった。それは、貼石のように斜面に敷かれた石とその下に立石がある状況であり、この部分を以下の通り判断した。通常敷石は、垂平に近い状態に並べるものであるが、2号墓の場合、尾根ぎりぎりに造っている為、垂平部分を造らず斜面なりに敷石・立石を配石したと考えられ、残っている部分は1段目の敷石・立石であろう。のことから、墳端は標高39.25mのコンタライン付近と推測した。

配石の残りが悪いため、北西側に拡張したが状況は変わっていない。

墳丘斜面には10cm程度の盛土があり、その上面に敷石・立石がある。このトレンチからは遺物は出土していない。

## A 5 トレンチ (図28)

A 5 トレンチは北端から北東突出部に曲がる部分を確認する目的で調査を行った。現況は、墳丘擾乱土が押し出されている状況で、突出部形態はわからない。

調査の結果、突出部上面は削半されているが、一部に貼石と2段の敷石・立石が突出部にかけて残っていることがわかった。貼石は、根石に30cm程度の大きな石を使い、それより上は10cm程度の石を貼るのではなく積んでいるようである。これは石が河原石で扁平な石を使っていないためと考えられる。

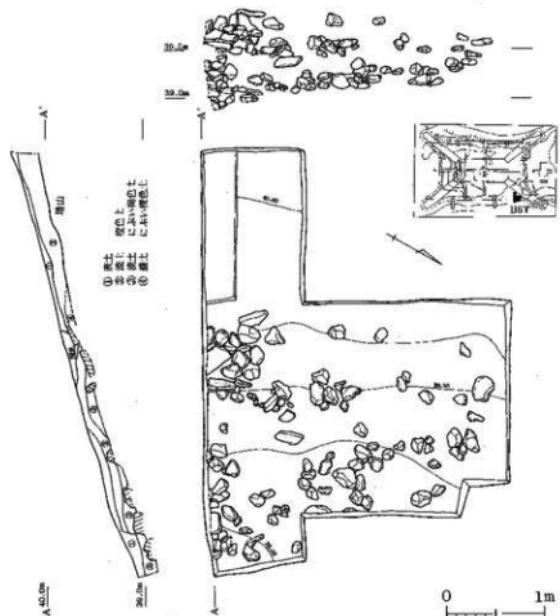


図27 2号墓B 6 トレンチ (1:50)

2段の敷石・立石は良好に残っているが、突出部分では崩れが大きく元の位置からやや西側に動いていると考えられる。

また、2号墓築造とほぼ同じ時期に造られた集石造構①を検出した(図29)。集石造構①は北突出部に曲がり始める墳端の立石から、北東側に向って50cm程度の扁平な石が6個敷くように並んでいる。それを囲むように10cm~30cmの石が置いてある。長軸2.3m、短軸1.2mを測る。

この遺構に伴う遺物は出土していないため正確な時期は不明であるが、遺構の検出状況から以下のことが考えられ

る。石が敷いてある面は、2号墓と同じ面であり、また、2号墓の2段目の立石に接するように造られていること、2号墓の配石と同じ流土で埋まっていることから、集石遺構①は2号墓に伴う遺構と考えられ、築造時期も近い時期であろう。この遺構の性格を明らかにするため、2号墓からみて4番目の石を取り上げて遺構の下を掘削したが、掘り込みはみつからなかった。よって、当遺構の性格は不明で、墓以外の性格を持つと考えられる。

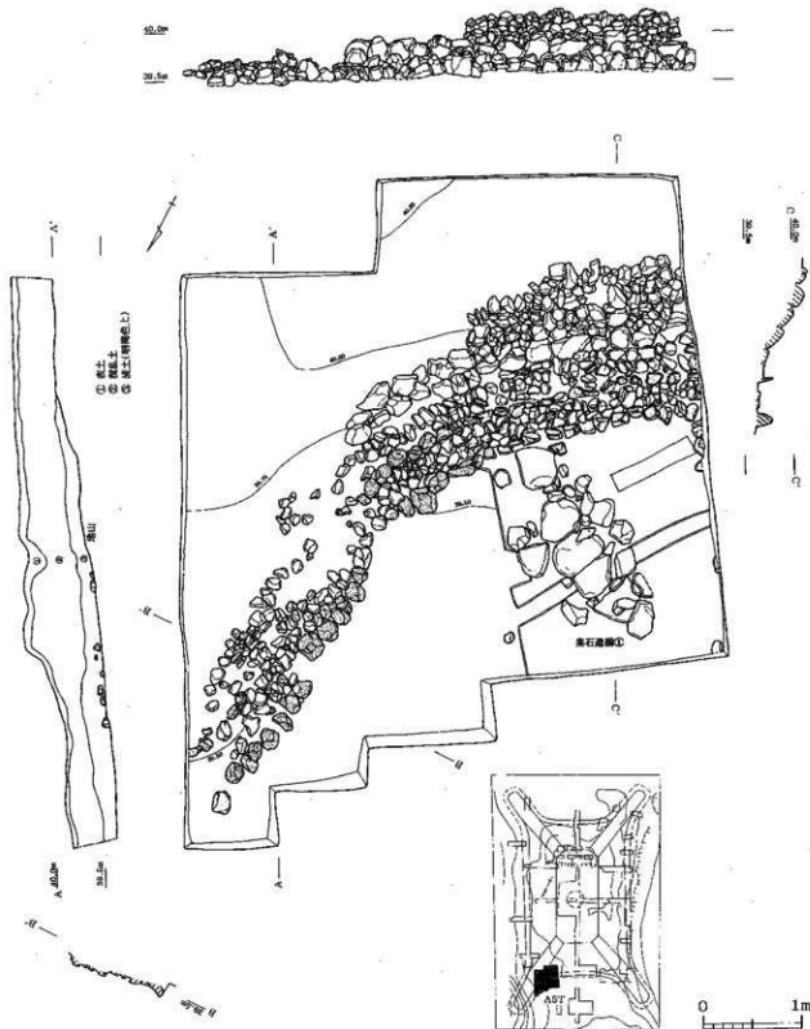


図28 2号墓A5トレンチ (1:50)

西谷2号墓

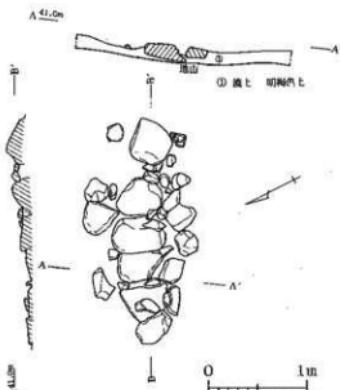


図29 2号墓集石造構① (1:50)

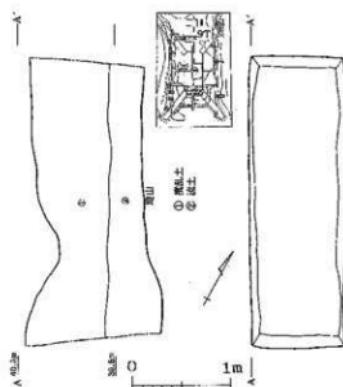


図30 2号墓9トレンチ (1:50)

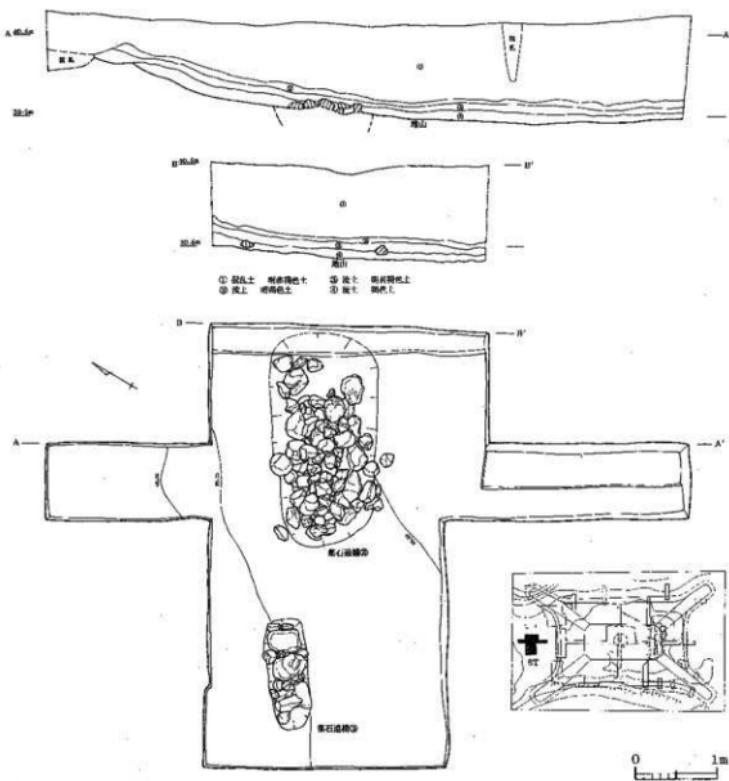


図31 2号墓8トレンチ (1:60)

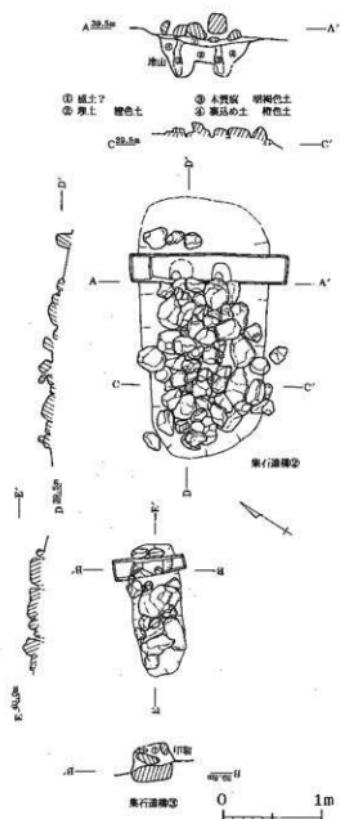
## 9トレンチ(図30)

9トレンチは、西谷2号墓の北側平坦面の東よりに位置する。8トレンチで集石造構②を確認したため、その造構の範囲を確認する目的で調査した。調査の結果、転石は検出したが集石造構②は9トレンチまで続かないことがわかった。

## 8トレンチ(図31)

8トレンチは、西谷2号墓北西の平坦面の状況を確認する目的で、2号墓の南北の中心ラインを延長したトレンチである。

調査の結果、墳丘を崩した土が約80cm堆積して平坦面ができていることがわかった。また、2号墓築造面と同じ面で集石造構②を検出した。この造構の範囲を確認するためトレンチを拡張したところ、西側で集石造構③を確認した。



集石造構②・③は、地山に築造されている(図32)。築造当時は2号墓の墳端から北側には約7mの平坦面があり、それから、北側の地山のレベルが徐々に上昇している。現況で確認できる西谷1号墓のある面との段差は、採土の際にできたことがわかる。

集石造構②は長軸2.7m、短軸1.3m、深さ0.2mを測る平面形が隅丸長方形の土壙墓と考えられ、20cm~30cmの河原石が土壙の上に集石してある。この造構の土層を確認するため、集石が少ない部分にサブトレンチを設定した。その結果、木棺の側板と考えられる部分が確認でき、また、地山に側板を立てる溝があることもわかった。このように木棺を安置した後、裏込め土を入れ、全体にさらに盛土をし、その後、集石したと考えられる。

集石造構③は長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る平面形が隅丸長方形の土壙墓と考えられ、約40cmの大きな河原石を土壙の上に3個敷き、その周りに10cm程度の石が集石してある。この造構の土層を確認するため、北東側の約40cmの大きな石をはずして掘削をした。その結果、掘込みがあることがわかり、その掘込みの中には集石した石が落ち込んでいた。

集石造構②・③は一般的に配石墓と呼ばれているもので、出雲市大社町の原山遺跡や、松江市鹿島町の堀部第I遺跡に類例がある。また、集石造構②・③の築造時期は出土遺物がないため不明確であるが、西谷2

図32 2号墓集石造構②・③(1:50)

号墓と同じ流土で埋まっているため、近い時期に造られたと考えられ、西谷2号墓の周辺埋葬ととらえることができよう。

四隅突出型墳丘墓には、西谷2号墓の集石遺構①のような性格が不明な遺構が伴うことがある。類例として、西谷4号墓の集石遺構、順庵原1号墓のストーンサークルや中野1号墓の集石遺構などがあげられる。これらの遺構も性格は不明であり、今後の検討すべき課題である。

### 中央トレンチ（図33）

1998年の調査で、西谷2号墓の中心ライン（北—南）は一部調査が行われている。その際に、搅乱土から在地土器や吉備の特殊壺、吉備型器台が出土した。これらの土器は西谷2号墓の中心埋葬施設に伴う土器と考えられ、まだ多くが埋まっていると予想した。そのため、今回の調査では、できるだけ多くの遺物を採取したいと考え、1m幅で十字にトレンチを設定し、調査を行った。調査の結果、E4グリッド付近で多くの土器が出土したため、E4グリッド、F4グリッドを拡張して掘削を行った。すると、在地弥生土器、吉備の特殊壺、吉備型器台、吉備の模倣土器、北陸系土器、ガラス銅、ガラ

ス管玉、水銀朱が出土している。これらの遺物は、採土の際に出土し、そのまま近くに捨てられたものと考えられ、すべて搅乱土からの出土であるが、2号墓に伴う遺物であると考えられる。遺物は標高40m付近まで出土するが、その下では遺物は出土しないため、主な調査は40m付近で止めている。一部は搅乱がどこまで行われたかを確定するため、その下も掘削した。そして、標高39.2m付近で地山を検出した。これにより、西谷2号墓の墳頂は標高43.5m付近であるから、約4.3mは墳丘が搅乱をうけていることがわかった。

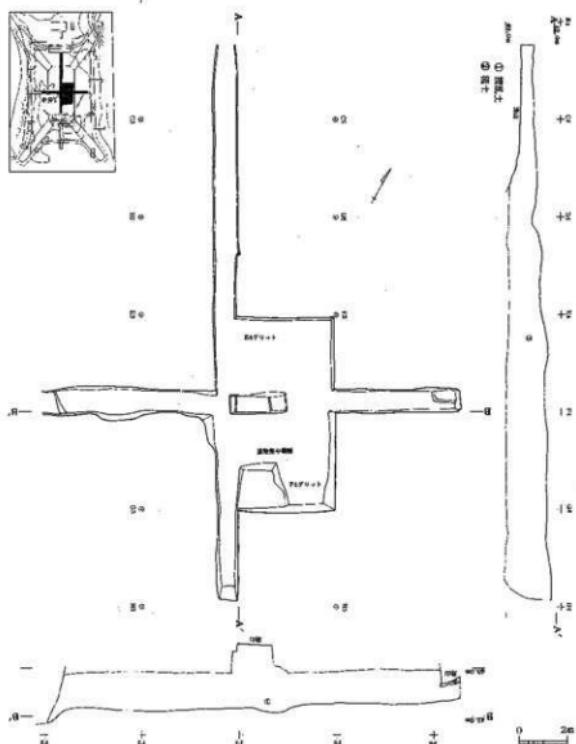


図33 2号墓中央トレンチ (1:200)

## 5. 出土遺物

中央トレンチとGトレンチ出土遺物を報告するが、土器胎土、朱、ガラス鏡・ガラス管玉については第4章の分析編で詳細に報告する。中央トレンチでは、E4グリッド・F4グリッドとG3グリッドの2ヶ所で遺物が出土している。E4・F4グリッド出土遺物は、西谷2号墓の中心埋葬施設（第2主体）に伴う遺物の可能性が高いためまとめて報告する。G3グリッドとG1トレンチ出土遺物は第1主体部に伴う可能性があるものとしてまとめて報告する。

### E4・F4グリッド出土遺物

土器は在地土器と吉備型土器などが出土している。在地土器の色調は、主に浅黄橙色をなす。

#### 壺形土器

図34の1～19は複合口縁をなす壺あるいは壺の口縁部から胴部にかけての破片で、34-19以外には口縁部外面に平行沈線文が施してあり、胴部外面には、平行沈線文と貝殻復縁による羽状文が施してあるタイプである。色調は浅黄橙色をなし、焼成は良好である。34-1は口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存部の最大径12cmを測る。外面の口縁部から屈曲部にかけて平行沈線文が施しており、胴部上半には貝殻復縁による羽状文が施してある。胴部上半の内面にはケズリが施してある。34-2は口縁部片で口径14cmを測る。口縁部外面には19条の平行沈線文が、内面には丁寧なヨコナデが施してある。34-3は、口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存部最大径14.8cmを測る。口縁部外面及び胴部上半外面には平行線文が施してあり、胴部内面にはケズリが施してある。34-4は、口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存部最大径12cmを測る。口縁部外面には平行沈線文が、胴部外面には4条の平行沈線文の下に貝殻復縁による羽状文が施してあり、胴部内面はケズリが施してある。34-5は口縁部から胴部上半までの破片で、口径17cmを測る。口縁部は磨滅が激しく、平行沈線文は残っていない。胴部上半には3条の平行沈線文の下に、貝殻復縁による羽状文が施してあり、胴部内面はケズリが施してある。34-6は口縁部から胴部上半までの破片で口径17cmを測る。全体に磨滅が激しく、口縁部外面に平行沈線文が少し残っている。34-7は口縁部から胴部上半にかけての破片で口径約14cmを測る。器壁は薄く全体に磨滅が激しい。34-8は口縁端部を欠いた胴部上半までの破片で、残存最大径13.5cmを測る。口縁部外面には平行沈線文が施してある。34-9は口縁端部を欠く胴部上半までの破片で、口縁部外面は磨滅が著しい。34-10～13は口縁部から胴部上半までの破片で破片が小さいため復元図の作成をやめたものである。いずれも口縁部外面に平行沈線文が施してある。34-14～17は胴部片で上には34-1～13までの口縁部がつくと考えられる。34-14は胴部最大径約14.2cmを測る。胴部外面には4条の平行沈線文の下に貝殻復縁による羽状文が施され、それが交互あり、合計で平行沈線文が4段、その間に羽状文が3段現状でわかる。内面はケズリが施してある。34-15～17も35-14と同じ文様構成で、35-16は肩が張る器形をなす。34-18は屈曲部から胴部上半にかけての破片で、上記のものより小型で胴部最大径約10cmを測る。胴部外面には貝殻復縁による羽状文が施されている。平行沈線文は施されず、他のものとは文様構成が異なる。34-19は2次口縁部が約2.6cmと短く、平行沈線も施されていない。1次口縁と2次口縁の接点の突出が34-1～13よりも鋭く、これらのタイプよりやや新しい器形と考えられる。34-20～22は底部片で上記の胴部片の下につくものと考えられる。色調は浅黄橙色をなし、焼成は良好である。34-20は底径5cmを測る。平底

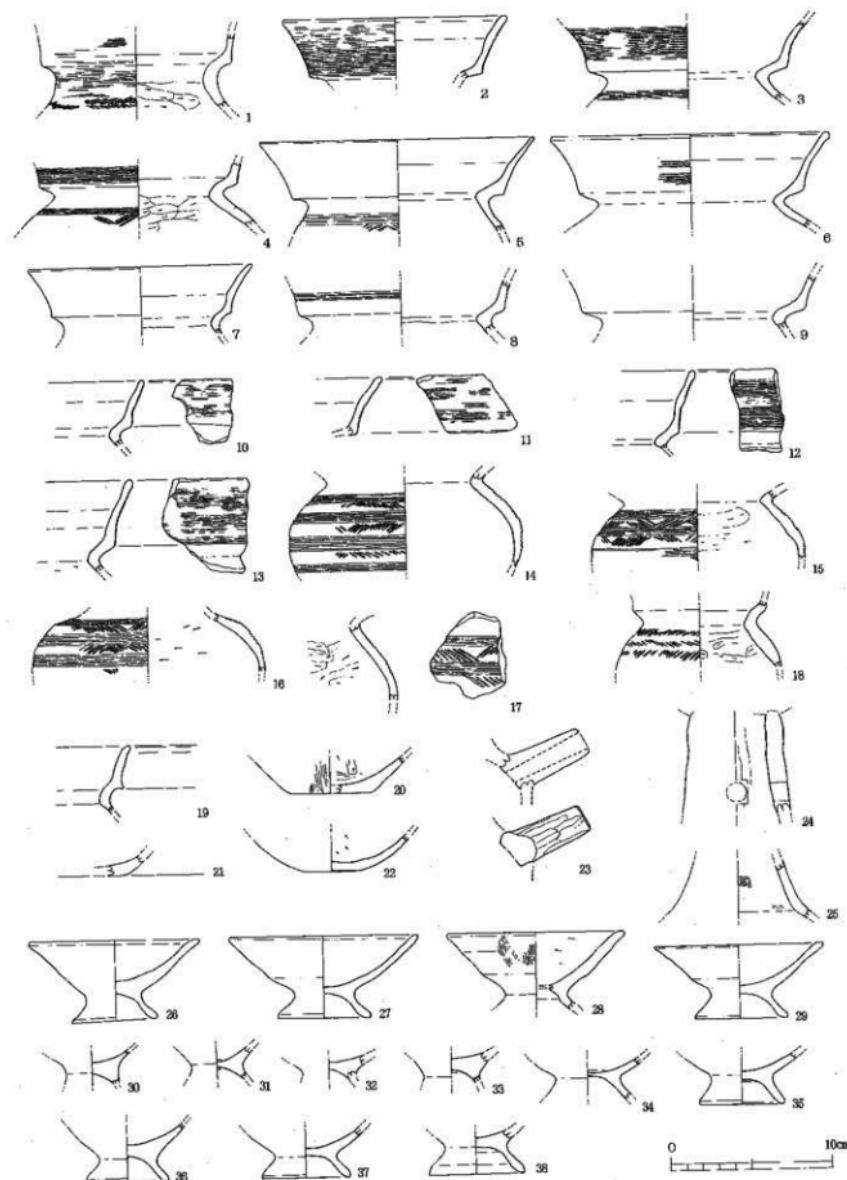


図34 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(1)(1:3)

で、くびれず直線的に開いて立ち上がる。外面にはハケメ後ナデが、内面にはケズリが施してある。34-21は平底であるが、34-20と同じくくびれず立ち上がる。34-22は底径4.5cmを測る丸底気味の底部である。

#### 注口土器

注口土器とわかるものは34-23の1点のみであった。34-23は注口部で、長さ5cm、幅2cm、孔径1cmを測る。外面には丁寧なミガキが施してある。色調は浅黄橙色をなし、焼成は良好である。

#### 高坏

34-24、25は高坏の脚部の破片である。34-24は円盤充填で作られる高坏の筒部で、最大径6.2cmを測り、器壁は1cmと厚い。円形の透かしが1ヶ所あり、内面には絞りの跡が残る。色調は明黄褐色をなし、焼成は良好である。34-25は開くタイプの筒部で、屈曲し裾に開く部分である。最大径約9cmを測り、器壁は6mmと薄い。内面にはハケメが施してあり、在地土器の調整手法と異なる。胎土は金雲母を多く含みやや在地の胎土とは異なる印象を受ける。外面色調は明黄褐色をなし、内面には黒斑がみられる。北陸系の高坏の可能性も考えられる。

#### 低脚坏

34-26~38は低脚坏である。口径約11cm前後、器高5cm、脚径5~6cm、脚高1.4cmのもので、坏部はやや湾曲しながらも直線的に広がり、脚部は塊形に開くタイプで、すべて同じ器形である。色調は明黄褐色をなし、焼成は良好である。34-26は口径10.5cm、器高5cm、脚径5.4cm、脚高1.6cmを測る。口縁部の一部と脚端部を一部欠くが完形に近い。全体に磨滅が激しい。口縁端部には黒斑がみられる。34-27は口径10.4cm、器高4.4cm、脚径5.8cm、脚高1.4cmを測る。脚部を一部欠くが完形に近い。外面の磨滅が著しい。外面には黒斑がみられる。34-28は口径約11cmを測る。全体に磨滅が激しい。34-29は坏部の湾曲が他のものより少し大きい特徴をもつ。口径11.6cm、器高5cm、脚径5.7cm、脚高1.4cmを測る。全体的に磨滅が激しい。34-30~34は坏部と脚部の接合部である。34-35~38は接合部から脚部の破片である。脚径及び器高は西谷3号墓第1主体のものよりやや大きくなっている。

#### 鼓形器台

図35~図36-10は鼓形器台である。大小のタイプがあると考えられるが、破片のため明確にわけることは難しい。全体的に磨滅が激しく調整の把握は難しい。そのため、器受部か脚部かの判断が難しく可能性の高いほうで図を作成している。35-1~15は大きい器台を集めている。35-1~9は器受部である。器形としては、筒部があるものと(35-1~3)と、筒部がほとんどなく屈曲するもの(35-7~9)がある。35-1は口縁部から筒部にかけての破片で、口径19cmを測る。器受部は湾曲して立ち上がり、口縁部付近でより広がる。筒部は内面で2.4cmあり、外面には3条の平行沈線文の下に羽状文、その下に平行沈線文が施してある。筒部内面はケズリが施してある。色調は淡黄色をなす。35-2は口縁端部を欠く筒部までの破片で、35-1と同じ器形をなす。口縁部外面はナデが施され平行沈線文はみられない。筒部は35-1より短いが、文様構成は同じである。35-3は、口縁端部を欠く筒部までの破片で、35-1と同じ器形をなす。磨滅が激しい。35-4~6は器受部の破片で、湾曲して立ち上がり、口縁部付近でより広がる。口縁部外面には平行沈線文が施してある。35-7~9は器受部から脚部との接合部までの破片で、器受部は直線気味に開く。筒部はほとんどなく、屈曲

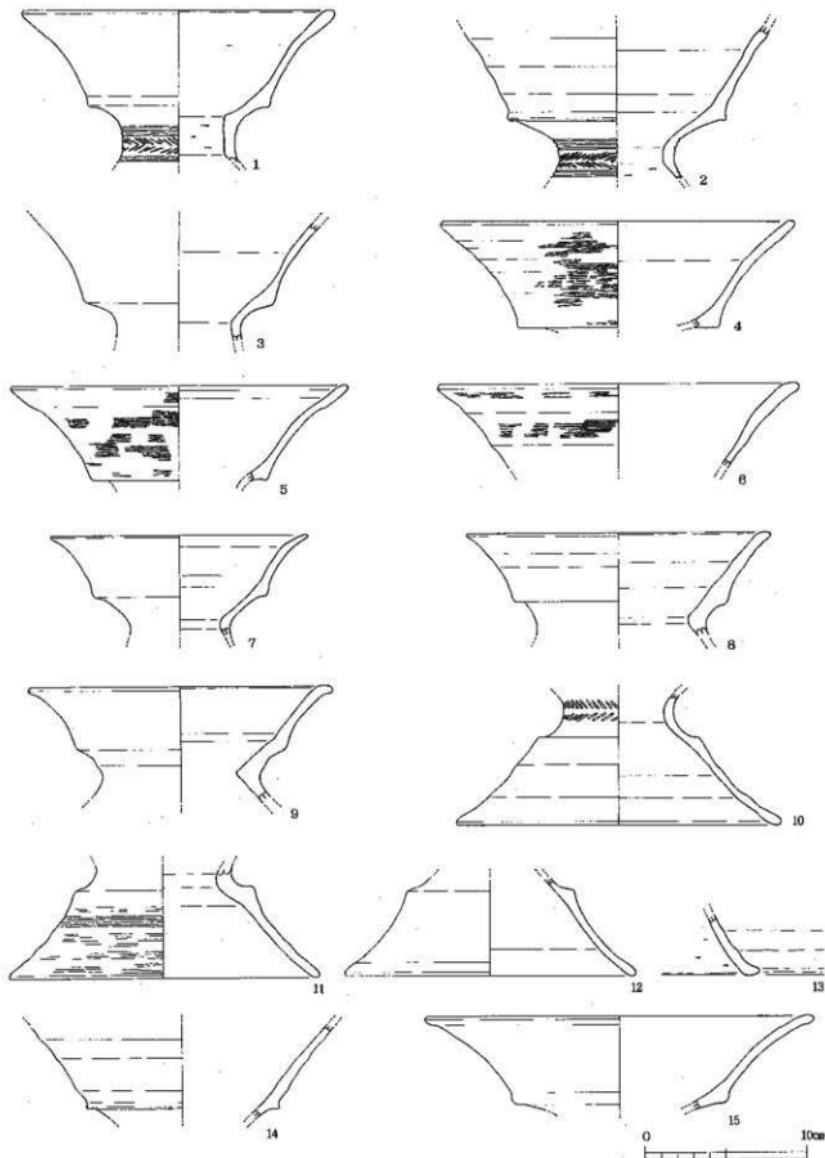


図35 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(2)(1:3)

して脚部に向う器形である。35-8は他のものよりも器壁が厚い。35-9は筒部が「く」字に強く屈曲する。35-10~13は脚部の破片である。35-10は筒部から脚部にかけての破片で脚径19.8cmを測る。筒部外面には羽状文が施してある。35-11は脚径19cmを測る。筒部はほとんど残っていないが、ほとんど筒部のないタイプと考えられる。脚外面上には平行沈線文が施してある。35-12は脚部片で筒部までは残っていない。脚径17.8cmを測り、全体的に磨滅が激しい。35-13は脚部片で、脚端部が強く引き出しているものである。外面には平行沈線文ではなく、内面にはケズリが施してある。35-14は磨滅が激しく、上下の判定が難しいものである。器形は筒部から直線的に開くものである。35-15は器受部の破片で口径約24cmを測るもので、35-1~9よりは口縁部が大きく外反して開き口径が大きいもので、やや新しいタイプのものである。全面に磨滅が激しい。

36-1~10は図35よりはやや小型の鼓形器台である。36-1は器受部と脚部の破片で、接合しないが胎上から同一個体と判断した。大きさは口径約15cm、器高約10cm程度と考えられる。全体に磨滅が激しく、文様、調整は不明である。色調は橙色をなし、胎土には3mm程度の白色粒を多く含む。36-2は器受部の破片で口縁端部を欠いている。筒部はほとんどなく「C」字状に屈曲する。全体的に磨滅が著しい。36-3は筒部の破片で、筒部径7.6cmを測る。筒部は短く、外面には無軸の羽状文が施してある。全体的に磨滅が著しい。36-4~10は筒部から脚部の破片で、脚端部を欠いている。36-

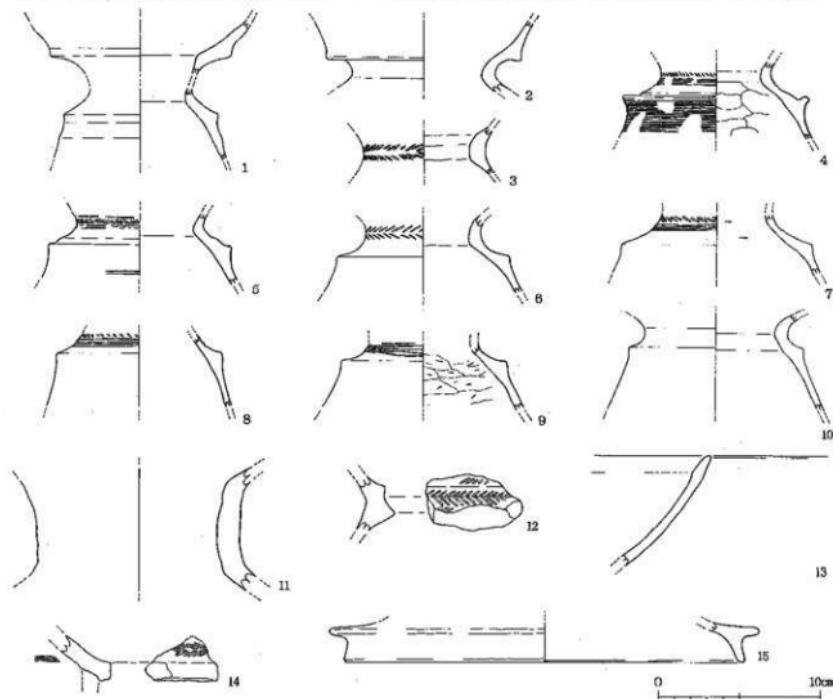


図36 2号墓E 4・F 4グリッド出土遺物(3)(1:3)

4は筒部に刻目（羽状文の下段か）とその下に平行沈線文が、脚部外面にも平行沈線文が施してある。筒部と脚部の境の突出が他のものよりも大きい。色調は黄褐色をなし在地土器の色調とは異なる。36-5も36-4と似た色調・胎土・文様をしていて、同じタイプと考えられる。36-6は短い筒部があり、筒部外面に貝殻復縁による羽状文が施してある。全体的に磨滅が著しい。36-7・8は、筒部に貝殻復縁による羽状文の下段（上段は欠いている）とその下に平行沈線文が施してある。磨滅が激しい。36-9は筒部に平行沈線文が施してあり、脚部外面には平行沈線文ではなくナデが施してある。36-10は筒部がほとんどなく「C」字状に屈曲する。脚部外面には平行沈線文ではなく、ナデが施してある。

#### 特異な土器

36-11～15是在地土器の器形とは異なるものである。36-11は壺の頭部と考えられ、長さ約5cmの直立する頸部である。頸部径12.4cmを測り、器壁が1.4cmと厚い。色調はにぶい黄褐色をなし、在地土器の色調と異なる。磨滅が激しく、胎土は長石を多く含む粗いものである。

36-12は壺の胴部最大径付近の破片で、三角形の2条の突帯が巡らしてある。突帯間に羽状文が施してあり、もう1条上に突帯があったと考えられる。この土器は色調・胎土は在地土器と同じであることから、吉備の特殊壺を模倣して在地の人が作った模倣土器と考えられる。

36-13は高杯の坏部である。湾状の坏部で、内外面とも丁寧なナデが施してある。色調はにぶい黄橙色で、胎土も精製された丁寧な作りである。在地の器形とは異なるため、北陸系の高杯の模倣土器と考えられる。

36-14・15は器台の脚部の破片で、器形は吉備型の器台を模倣した土器である。36-14は脚部で、下垂した部分は剥がれている。外面には羽状文が、内面にはハケメが施してある。色調は橙色をなす。36-15は在地土器の胎土と同じである。全体に磨滅が激しい。

#### 吉備の特殊壺

図37～図40は吉備の特殊壺である。37-1は頸部から底部までの破片で口縁部を欠く。残存高29.8cm、胴部最大径28.8cmを測る完形に近い土器である。頸部は「ハ」字状に開きながら胴部にむかい、胴部はタマネギ形で、底部はくびれず立ち上がる半底をなす。胴部最大径付近には3条の突帯が巡っている。頸部外面には胴部の境までらせん状に21条の沈線文が施してあり、その下に右上がりの列点文が施してある。一番上の突帯の上には沈線文が巡っている。突帯は方形をなし、突帯の上面にも沈線文が施してある。一番下の3番目の突帯は、胴部下半とつながって明確な段をなさない。全体に磨滅が激しいが外面には丹が塗られ、内面にはケズリが施してある。色調は、にぶい黄褐色をなし胎土は吉備のものである。37-2は4片からなるが同一個体と考え復元図を作成した。口径約26cm、器高約38.8cm、胴部最大径約32cmを測る。口縁部以外は、37-1と同じ器形をなす。頸部から強く屈曲し逆「ハ」字状に開き、直立する複合口縁をなす。口縁端部は面をなし外方につまみ出され、1次口縁と2次口縁の接合部は大きく突出している。2次口縁部外面には9条の沈線文を施した後、上下2段にわたり向きを変えた鉛歯文が施してある。頸部はタテハケメをした後に21条の沈線文を施したことがわかる。上段の突帯の上には3条の沈線文、その上に列点文が施してある。突帯間に鉛歯文と山形文状の文様が施してある。外面と口縁部内面には丹塗りが施してあり、色調はにぶい褐色をなす。頸部内面～底部にかけてケズリが施してある。今回出土した壺は37-1・2のような器形がほとんどで、

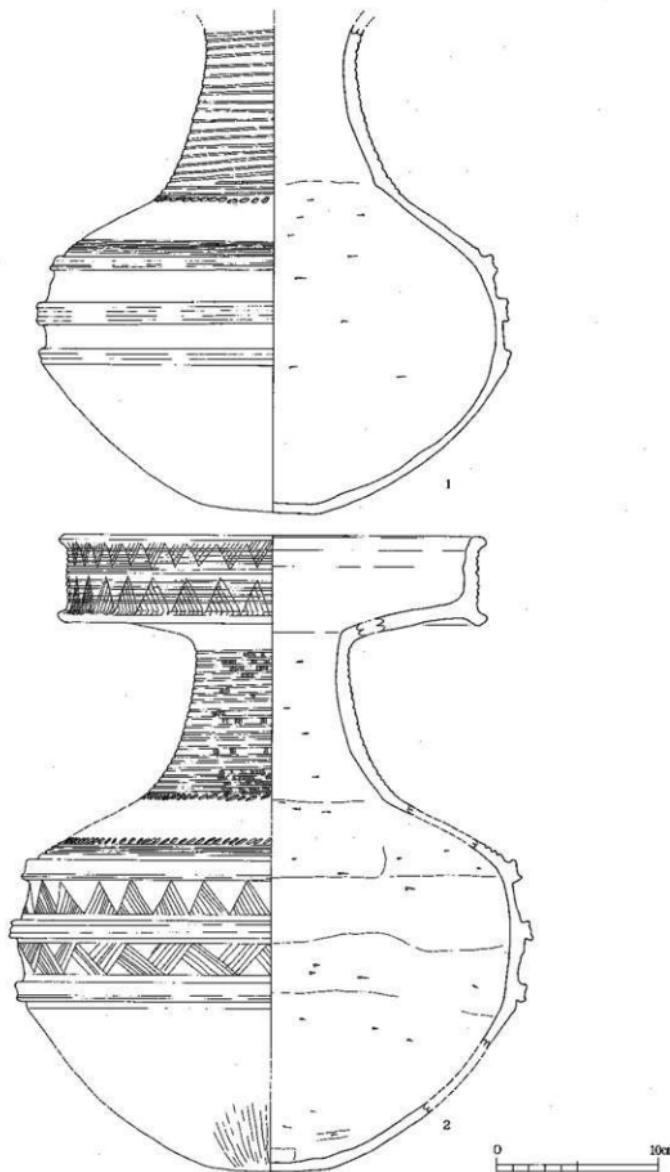


図37 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(4)(1:3)

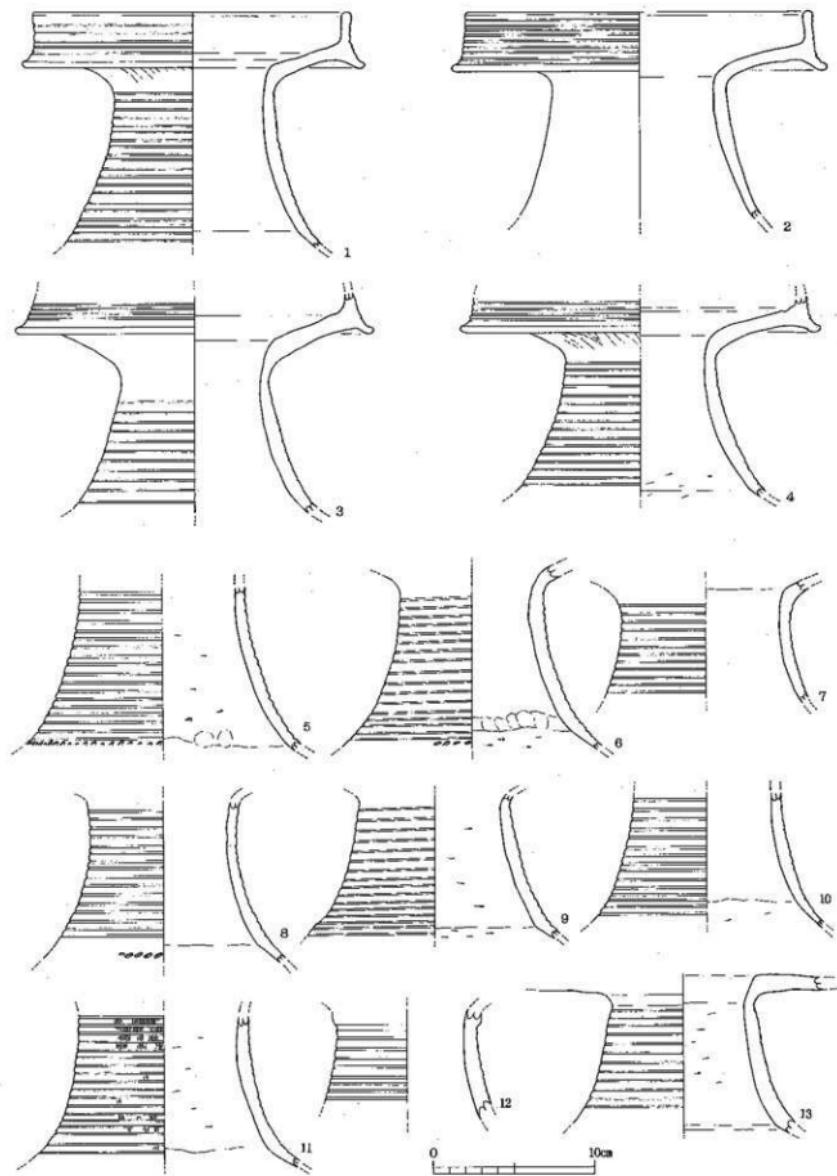


図38 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(5)(1:3)

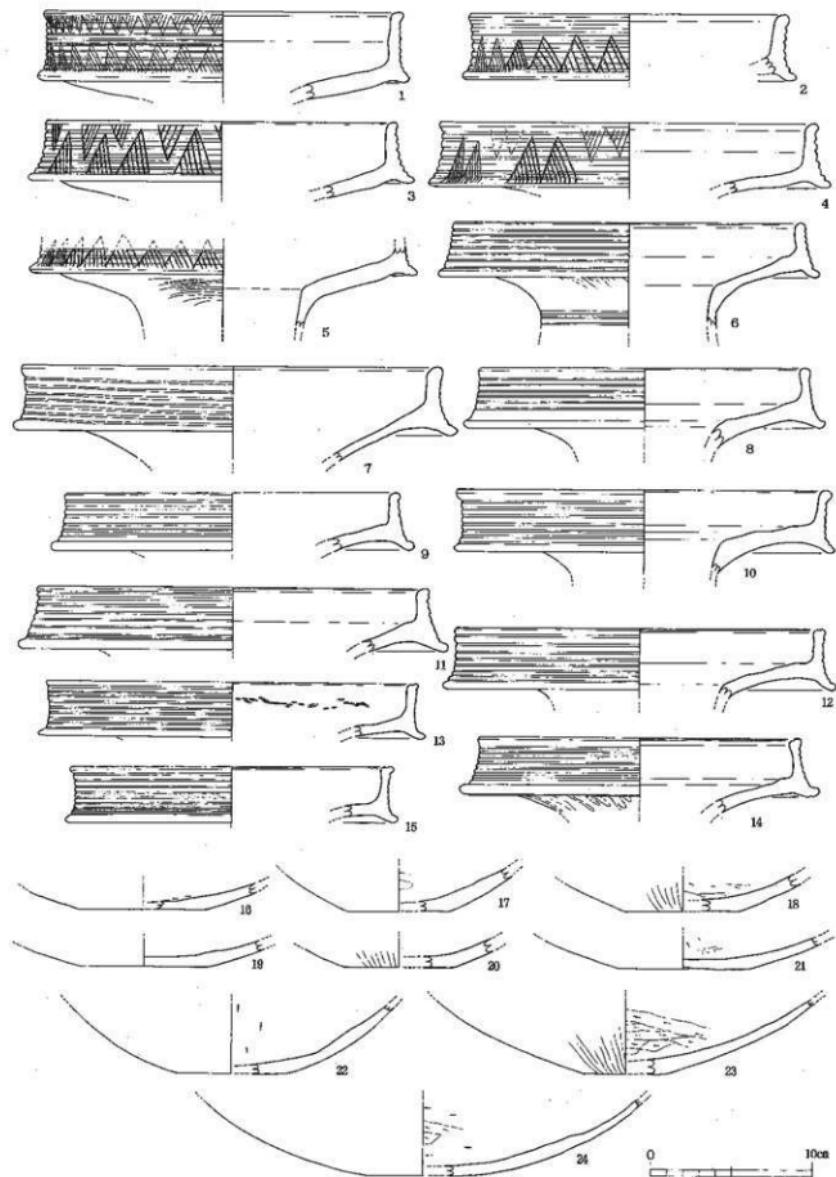


図39 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(6)(1:3)

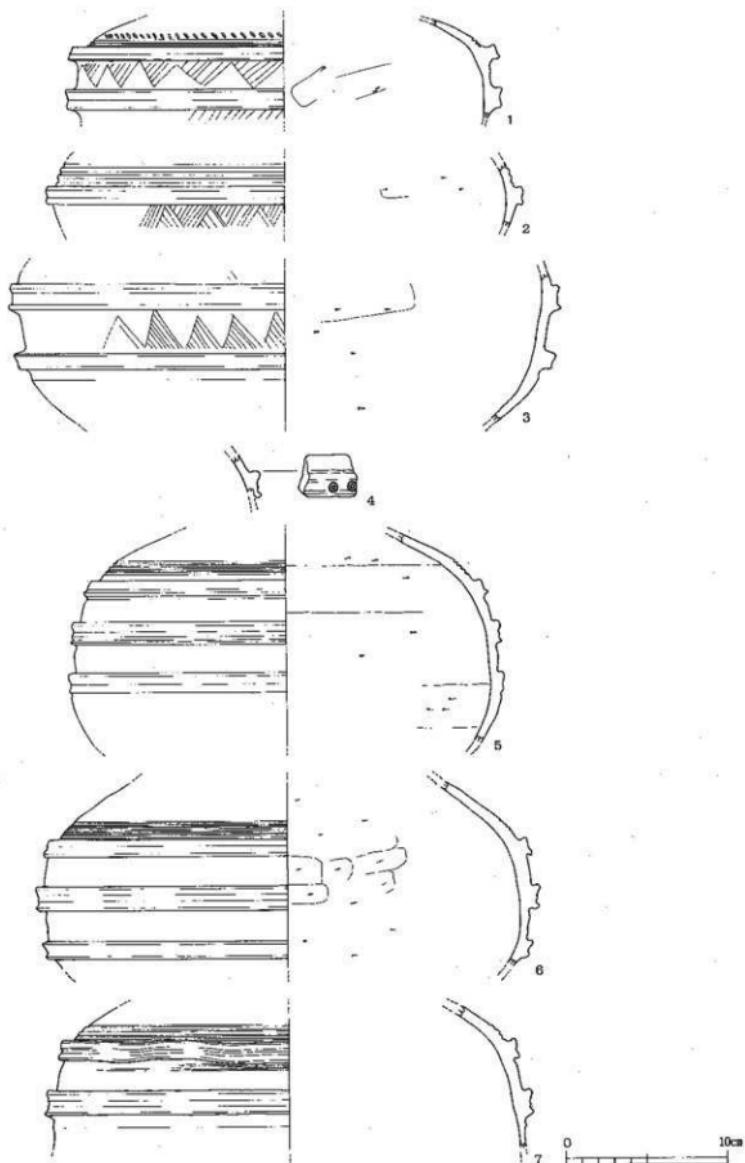


図40 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(7)(1:3)

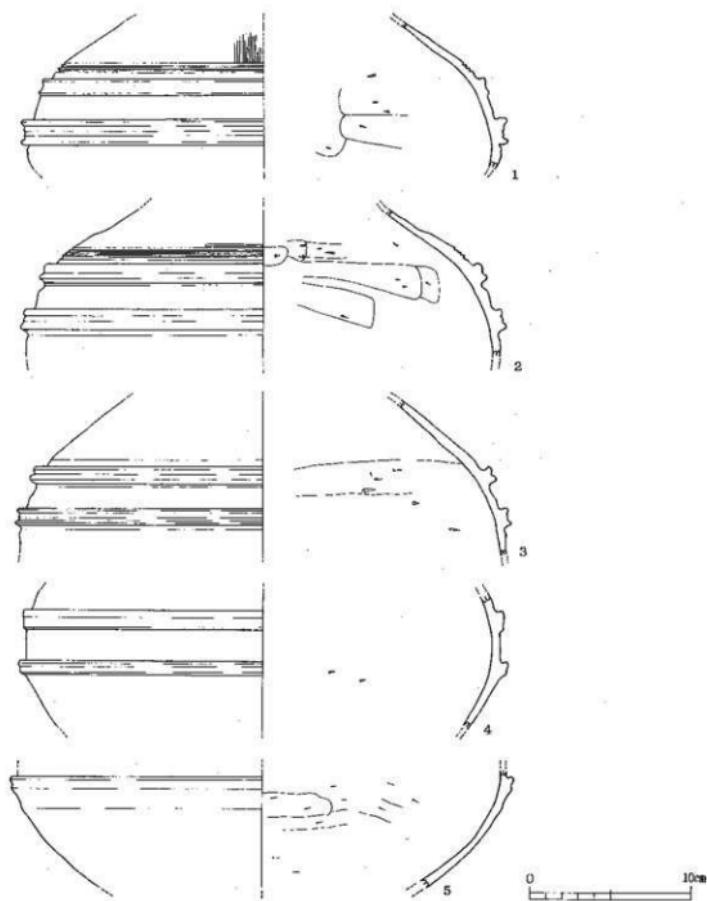


図41 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(8)(1:3)

鋸歯文などの文様を施すものと、施していないものがあり、前者は少なく後者が多いようである。

38-1～4は口縁部から頸部の破片で、口径は20cm前後のものである。いずれも磨滅が激しい。38-2は磨滅が激しいため沈線文が残っていない。

38-5～13は頸部片である。頸部最小径は9cm～10cm程度で、長さも10cm程度でほぼ同じ大きさである。全面に磨滅が激しく、外面の平行沈線文の正確な本数の確認は難しい。38-13は口縁部が頸部から垂平に開くものである。焼成不良のため外面の剥離が激しい。

39-1～15は口縁部片である。吉備型器台の口縁と器形がほぼ同じであるため、器形から壺の口縁

と判断することはできないが、頸部との接合部の長径が10cm前後になるため壺の口縁と判断した。口径は19cm～26cm程度のもので、22cm前後のものが多い。39-1～5は口縁部外面に鋸歯文が施してあるもので、鋸歯文のパターンは39-1～4の4種類である。39-6～15は口縁部外面に文様ではなく沈線文のみが施してある。39-6～10は口縁端部を丸くおさめ、39-11～15は口縁端部上面が面をなし、沈線を1条施してあるものがある。39-13は口縁内面に調整時の爪のような跡が残る。

39-16～24は底部片で、底径が5～7cmを測る。器形は平底でくびれず立ちあがる。39-24は丸底に近いものである。確實に底部穿孔が施してあるといえるものは無い。全体に磨滅が激しく、外面はミガキ、内面はケズリが施してある。

図40～図41は胴部の破片である。胴部最大径は26cm～34cm程度のものがあり、30cm程度のものがほとんどである。突帯は3条施してあるものがほとんどである。器形はタマネギ形をなすものがほとんどで、40-1だけは一番上の突帯から強く屈曲し頸部に向う。突帯間に鋸歯文が施してあるが、その種類は37-2と40-1～3の4パターンある。また、40-4は2番目の突帯と考えられるもので、突帯の上面に沈線文を施した後に竹管文が施してある。特殊壺・特殊器台に竹管文が施してある例は西谷4号墓にあるだけの珍しい文様で、特別に出雲の被葬者のために吉備で作った土器という説がある。今回西谷2号墓から出土したこの土器も特注で作った可能性が考えられる。40-5～図41は突帯間に文様が施していないものである。

#### 吉備の器台

図42～45は吉備の器台で、西谷2号墓からは吉備の特殊器台は出土していない。42-1は筒部から脚部にかけての一部を欠く2片からなり、接合はしないが同一個体と判断し復元図を作成した。口径28.8cm、復元高29.6cm、筒部最少径15.4cmを測る。筒部は口縁部との接合部がすばまる「ハ」字状をなし、口縁部は逆「ハ」状に開き、複合口縁をなす。脚部は「ハ」字状に大きく開き、直立部をもつ。直立部の接合部には突帯が巡る。口縁部外面には10条の沈線文が、筒部には沈線文と列点文の文様帶が3段あり、文様帶間には方形透かしが2段4方向にある。脚部突部の上には沈線文、その上に列点文が施してある。外面と口縁部内面には丹が塗られており、口縁部外面にはミガキ、内面の筒部～脚部にはケズリが施してある。色調は褐色をなす。胎土は吉備のものである。42-2は口縁部と筒部が接合していないが、同一個体と判断して図面を作成した。器形は42-1とほぼ同じである。口径25.4cm、器高28cm、筒部最少径約15cmを測る。胎土に8mm程度の大きな長石を含む。43-1は口縁部と筒部と脚部の3片からなるもので、接合はしないが同一個体と判断し復元図を作成した。口径30.4cm、復元高約36.2cm、筒部最少径約13cmを測る。42-1・2と器形はほぼ同じであるが、それよりは高さがあり、筒部はやや細い。口縁部外面に沈線文を施した後に鋸歯文が上下に向かい合うように施してあり、脚部の沈線文の上方にも鋸歯文が施してある。西谷2号墓出土の吉備の器台は42-1・2と43-1のようなタイプがほとんどである。

43-2と3は筒部の破片で、43-2は筒部最少径が約13cmで43-1とほぼ同じ器形であるため、43-1の復元に参考とした。今回出土した器台の筒部最少径は13cm～15cm程度である。

43-4～図44は脚部の破片である。脚部最大径は32.2cm～43.2cm程度で、34～35cm程度のものが多い。全体的に磨滅が激しい。43-4は脚部の沈線文の上方に鋸歯文が施してあり、器壁も8mmと厚い。

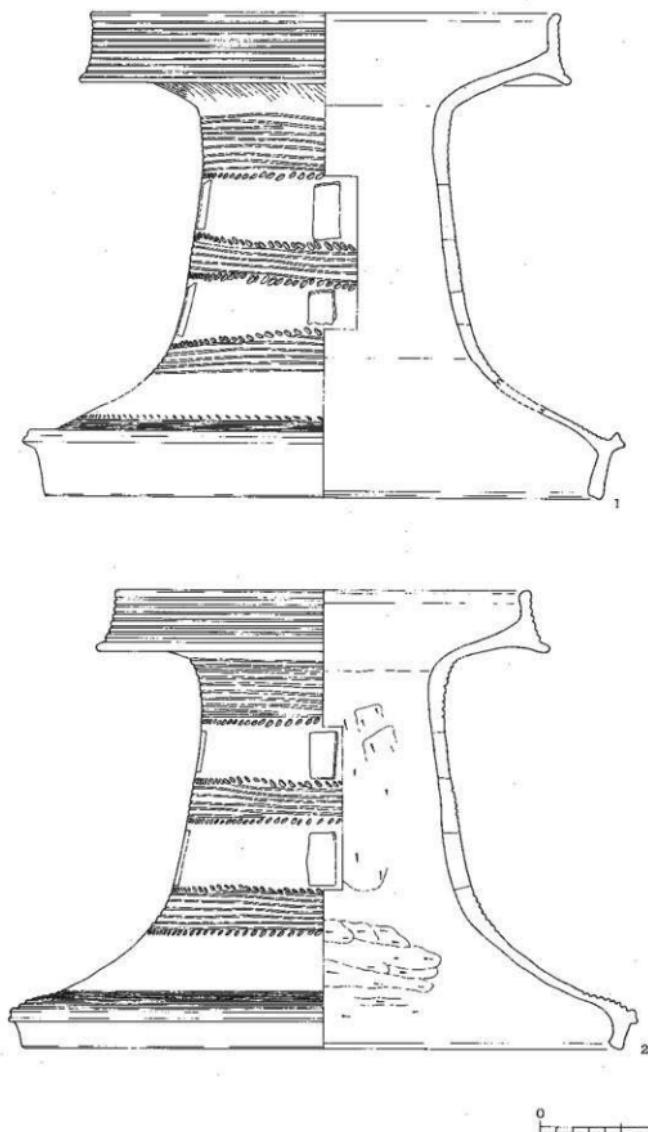


図42 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(9)(1:3)

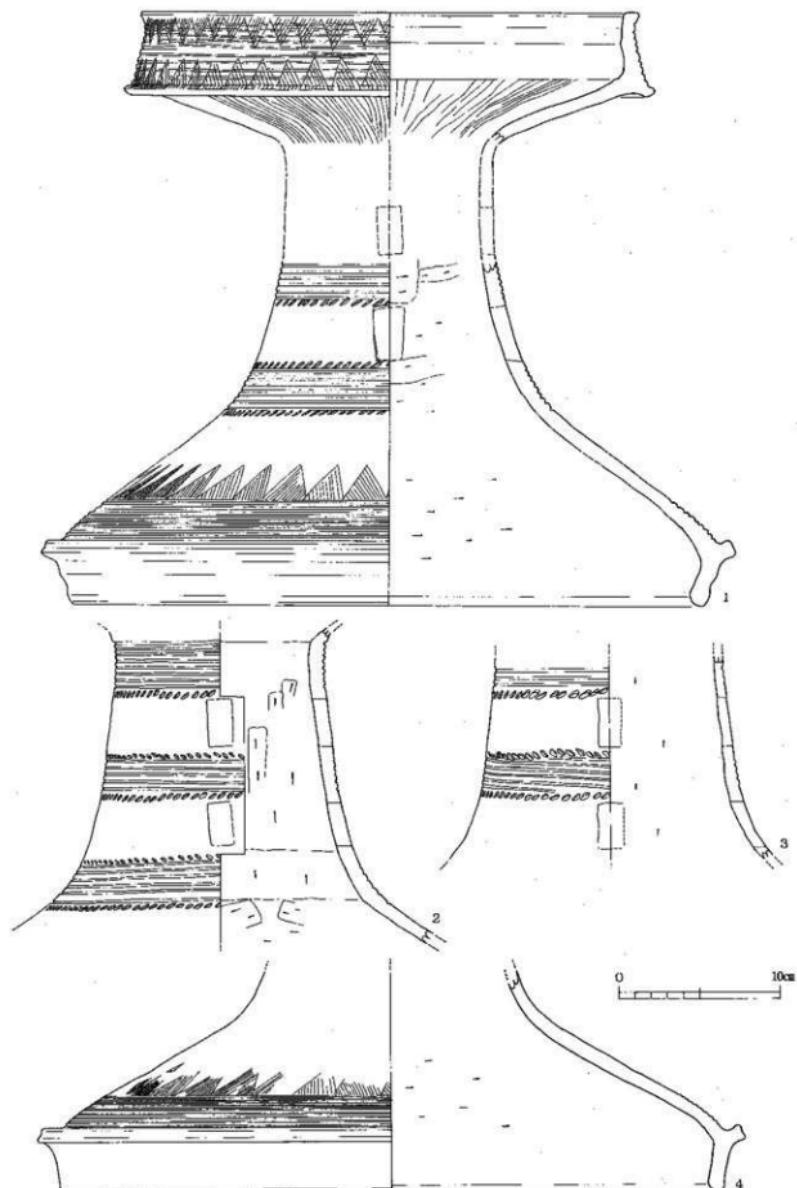


図43 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(10)(1:3)

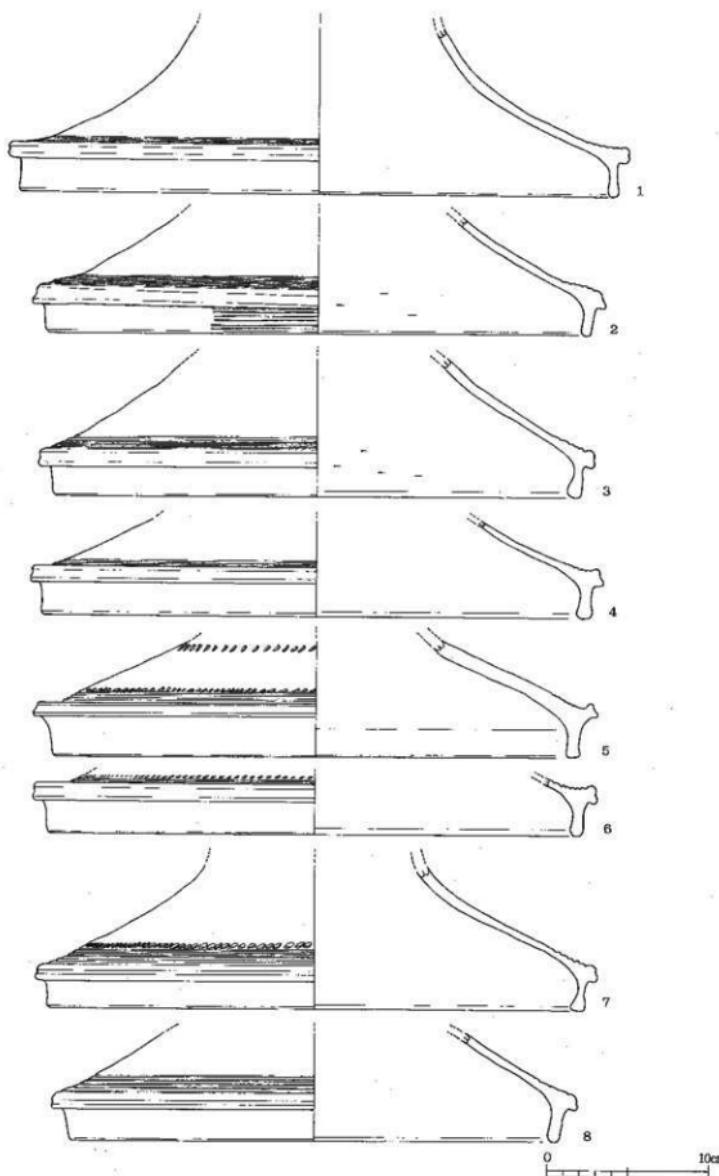


図44 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(11)(1:3)

43-1と似たタイプである。44-2は直立部外面にも沈線文が巡っている。

図45は器台の口縁部の可能性があるものである。器形からは特殊壺の口縁との区別は難しいが、口径が25cm以上で筒部との接合部の径が12cm以上のものをあげている。口径は25cm~30.4cm程度のものである。口縁部外面には沈線文が施してあり、鋸歯文が施してあるのは43-1のみである。45-5は2次口縁部が他の口縁部より5.8cmと長く、筒部から1次口縁が垂平に開く他の口縁とは変った器形をなす。

#### E 4・F 4 グリッド出土土器のまとめ

E 4・F 4 グリッド出土土器はすべて攪乱土からの出土であるが、西谷2号墓の中心埋葬主体に伴う遺物と推定できる。土器としては、在地土器、吉備の特殊壺と器台、吉備の特殊壺と器台を模倣した在地の土器が主なものである。在地土器の時期は、草田3期から4期のもので、弥生時代後期後葉~終末期の古段階にかけての時期と考えられる。吉備の土器は立坂型と考えられ、吉備からの搬入品である。ただ、特殊壺の突端につけられた竹管文がどのような意味で施してあるのかはとても重要なことであり、他の搬入品とは異なる扱いが必要である。

墳丘墓から出土した土器の点数は重要であるが、攪乱土出土であるため、また、接合できない破片の数も多く正確な点数を報告することは難しい。また、別々に報告しているが、同一個体である可能性もある。そこで、およその数字をあげ、それ以上は確実にあるということにしたい。ここにあげた数字は1998年調査分も含む。

壺・・・10点 鼓形器台・・・15点 低脚壺・・・13点 高壺・・・2点

模倣土器・・・5点

吉備特殊壺・・・15点 吉備の器台・・・13点

以上のような、点数をあげることができる。おおまかにまとめると在地土器（高壺以外）も吉備の土器もそれぞれ15点は確実にあると考えられ、合わせると、在地土器が45点+2点（高壺）、模倣土器5点、吉備の土器が30点で総数82点は確実にある。まだまだ、破片が多くあるので総数で100点近くはあると推定できる。

#### ガラス鉢

46-1~4はガラス鉢である。F 4 グリッドの土器が集中して出土する付近から出土していて、西谷2号墓の中心埋葬主体に伴う遺物と考えられる。また、出土時には朱が付着していたものもあり、棺内にあたったと考えられる。46-1~3は内径5.7cmを測る。風化が激しく白色化しているが、破面はエメラルドグリーンをしている。材質はバリウムを含まない鉛ガラスである。破面観察から気泡が多く残っていて雑な作りであることがわかる。詳細は分析編で報告する。46-1は全体の1/8を欠いている。断面形が「D」形をなすもので厚さは9mmで厚い。46-2は1/3を欠いている。46-1と同じく断面「D」形をなし、接合痕がある。46-3は1/2を欠いている。46-1・2よりは厚さが薄く7mm~3mm程度であり、厚さが一定ではなく、断面形態も曖昧な形である。46-4はガラス鉢の1/8程度の破片で、断面形態が「D」形をしていない曖昧な形態である。したがって、46-3と同一の可能性が考えられるが、接合しないため別の個体の可能性もある。

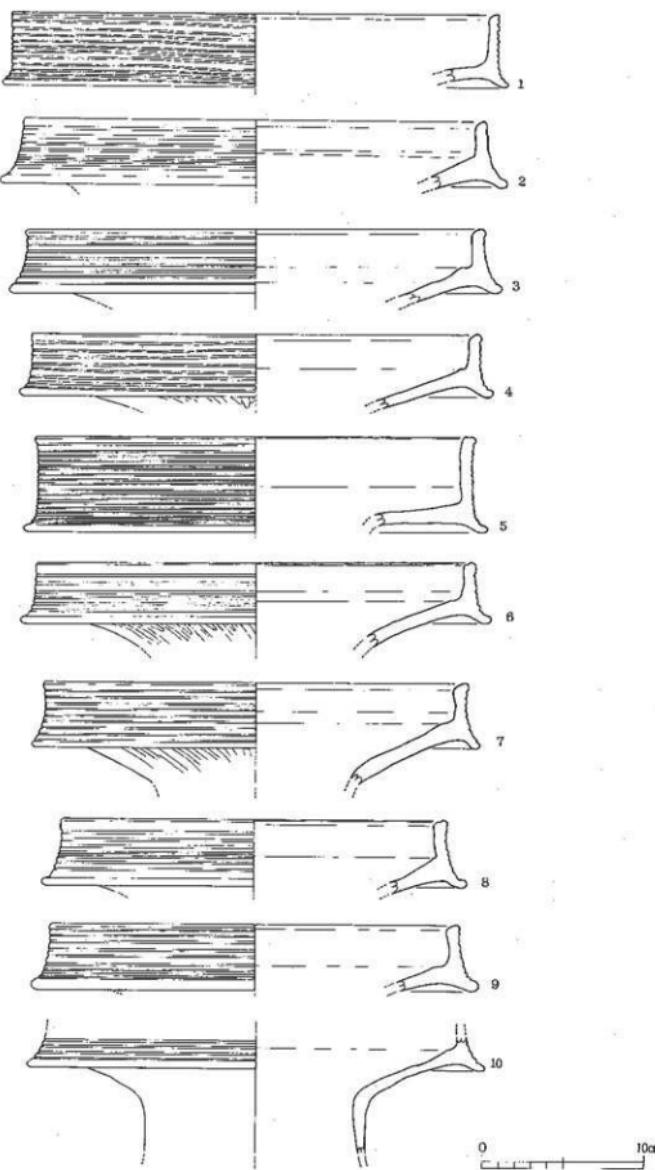


図45 2号墓E4・F4グリッド出土遺物(12)(1:3)

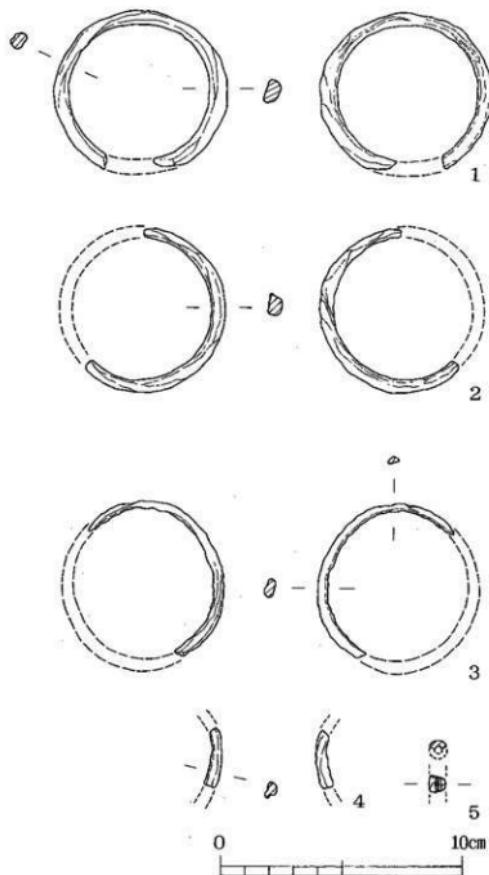


図46 2号墓E4・F4グリッド出土ガラス釧・管玉(13)(1:2)

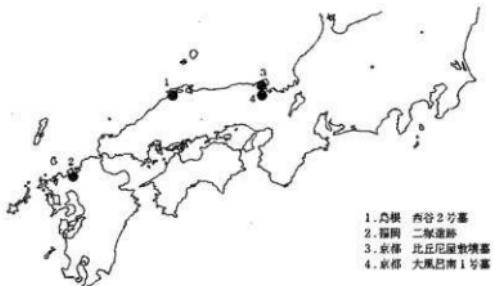


図47 日本におけるガラス釧出土地

ガラス釧は日本で西谷2号墓の他に3遺跡で出土していて、いずれも弥生時代後期後半頃のものと考えられている(図47)。京都府比丘尼屋敷墳墓出土のガラス釧と福岡県二塚遺跡出土のガラス釧は西谷2号墓と同じエメラルドグリーンをしていて、分析の結果、二塚遺跡出土品と西谷2号墓ガラス釧はほぼ同じ材質であることがわかった。

このガラス釧は中国あるいはベトナムなどの大陸で製作されたもので北部九州を経由して入手したと推定できよう。雑なつくりであるが、細く大きなガラスであることから、かなり高い技術で造られている。

接合痕があることから巻き付けて製作したと考えられる。

#### ガラス管玉

4-5はガラス管玉の破片で、残存長7mm、復元幅9mm、厚さ3mm、孔径3mmを測る。かなり崩壊しており半裁した状況で出土している。他にも粒状に碎けた破片も出土しているが、実測可能なものはこれ1点のみである。ガラス釧と同じく土器が集中して出土する付近から出土していて、西谷2号墓の中心埋葬主体に伴う遺物と考えられ、また、孔の表面に朱が付着していることから、棺内にあったと推定できる。

材質は中国で造られたソーダ石灰ガラスで、類例として西谷3号墓の管玉、福岡県平原1号墓の連玉があり、弥生時代としてはとても珍しい。

## 朱

朱は土器が集中して出土する付近から出土していく、西谷2号墓の中心埋葬主体（第2主体）の棺底に置かれたものと考えられる。朱は散在した状況で出土したため、周りの土と一緒に取り上げ室内で選別した。出土量はおよそ3kg（土も含む）である。この選別の際にガラス管玉の小片を発見した。朱は中国産の水銀朱と考えられる。

## G1・3グリッド出土及び表採土器

図48-1と2はG3グリッドの残丘崖面精査時に出土したもので、第1主体付近の盛土から出土していく、第1主体に伴う遺物と考えられる。48-1は複合口縁をなす壺の口縁部で口径約15cmを測る。48-2は鼓形器台の器受部片で、口縁端部を欠いている。口縁外面に列点文状の文様を施す、在地の鼓形器台としては珍しい施文である。48-3は残丘部の墳頂から表採した低脚壺の接合部の破片である。48-4～11はG1とG3グリッドから出土したもので、搅乱土及び流上から出土し、元位置を留めていないものである。48-4は壺の口縁部片で口径約29cmを測る大型品である。48-5は低脚壺、48-6は鼓形器台の脚部である。48-7は壺の頸部あるいは器台の筒部の破片で、外面に三角形突帯が巡っている在地土器にはみられない特徴を持つ。他地域の模倣土器の可能性が高い。48-8は器台の脚部片で直立部をもつ。胎土は在地のもので吉備の器台を模倣した土器である。48-9～11は壺の胴部最大径部分の破片で、外面に2条あるいは3条の突帯が巡り、その上面に羽状文が施してある。内面は、ハケメが施してあり、在地の器面調整の手法とは異なる。胎土は在地ものである。48-12は出雲考古学研究会が残丘部の崖面より表採したもので、既に報告されている。壺の口縁部片で、口縁外面中央に1条の突帯が巡り、その上面に羽状文が施してある。在地土器としては珍しく、48-9～11のような胴部の上に、48-12の口縁がつく壺と想定している。この土器は吉備の特殊壺の器形を模倣し、在地土器によく使われる文様である羽状文を施し、内面調整は西部瀬戸内あるいは北部九州で

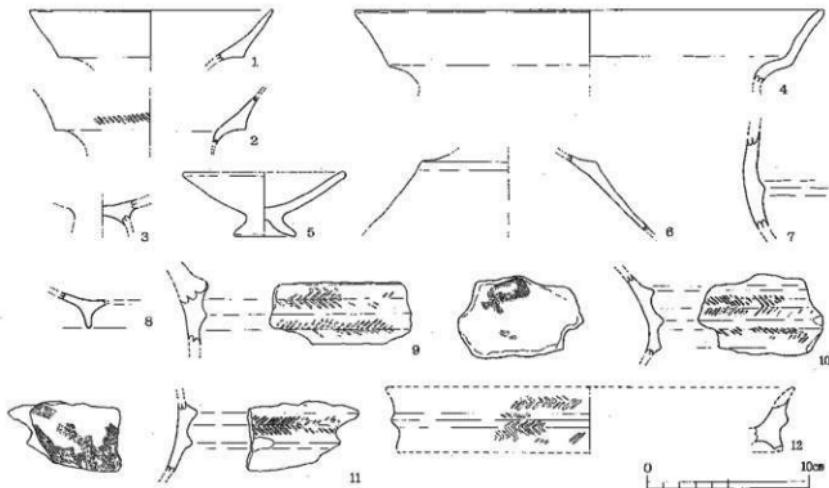


図48 2号墓G1・3グリッド出土及び表採土器（1:3）

みられるハケメが施してあり、各地の土器の特徴を折衷させて作った、祭祀用の土器と考えられる。このような土器は西谷3号墓第4主体からも出土している。G1・3グリッド出土土器は第1主体部の近くで出土しているため、第1主体に伴う土器の可能性が高い。

## 7. 西谷2号墓の調査成果

西谷2号墓は四隅突出型墳丘墓で、南北36m×東西24m、高さ3.5m、突出部を含めると約50mの大型の墳丘墓で、時期は弥生時代後期後葉～終末期古段階と考えられる。墳丘は地山を削り出した後に、部分的に盛土をして、墳丘表面に石を並べている。配石構造は斜面に貼石を行い、墳裾は2段の敷石・立石が墳丘全体を巡る。墳丘築造過程の中で、埋葬施設の造作がいつ行われたかということが問題になる。墳丘の配石が行われる前か、配石終了後かという問題となるが、今回の調査ではそれを解明する情報を得ることはできなかった。

西谷2号墓は採土により墳丘の3/4が破壊されている状況である。そのため、墳丘の短軸にはほぼ平行に崖面ができていて、墳丘の断面観察ができる状況である。その崖面を精査し断面観察を行った結果、大型の埋葬施設を確認し、これを第1主体とした。第1主体は崖断面上で掘り込み面の長さ4.3m、底面の長さ2.8mを測る大型の2段掘り墓壙である。底面には砂利が敷かれ朱も確認できた。既に詳述したように、墓壙内に据えられていたのが木棺なのか木棺を納めた木槨なのかは確証が得られなかつたが、いずれにしてもかなり大型のものであることは確かである。第1主体は西谷2号墓の端の部分にあることから周辺埋葬と考えられるので、既に破壊されている中心主体は第1主体と同じかそれ以上の規模を持つと考えられる。

中央トレンチでは、攪乱された土の中からではあるが多数の土器のほかガラス製品や朱塊が検出された。本来、このあたりのどこかに第1主体とは別の埋葬施設、すなわち第2主体があったものと推定されるが、これらが出土した位置及びガラス釧という希少性の高い遺物の存在から考えて、この第2主体こそ2号墓の中心主体だったと考えてよいであろう。遺物は攪乱土や流土から出土したものがほとんどである。これらは、それほど遠くに移動しているとは考えにくいため、出土位置から、中心主体（第2主体）に伴うものか第1主体に伴うものを判断して掲載した。中心主体に伴うものは、土器、鉛ガラスの釧、ソーダ石灰ガラスの管玉、朱である。土器は100点近くが伴うと考えられ、在地の土器に加え、吉備の特殊壺や器台も多く搬入している。また、吉備の模倣土器も出土している。ガラス釧、ガラス管玉、朱は舶来品と考えられる。

西谷2号墓は墳丘の3/4が破壊されているが、多くの情報を得ることができた。興味深いのは、西谷2号墓と西谷3号墓の組成が良く似ていることである。それは西谷3号墓も、2段の敷石・立石構造を備え、吉備の土器を含む大量の土器を出土し、副葬品には鉛ガラスの小玉類、ソーダ石灰ガラスの管玉などが多数含まれていた<sup>(1)</sup>。

墳形がかなりわかってきたため、西谷3号墓や他の四隅突出型墳丘墓を参考に西谷2号墓の復元図を作成した（図49）。突出部の長さは西谷4号墓の南東突出部を参考にしている。やや狭い墳頂平坦面であるが、墳形はかなり整ったものである。

(1) 三浦清・渡辺貞幸「山陰地方における弥生墳丘墓出土の玉材について—西谷3号墓出土品を中心に—」『鳥根考古学会誌』5、1988

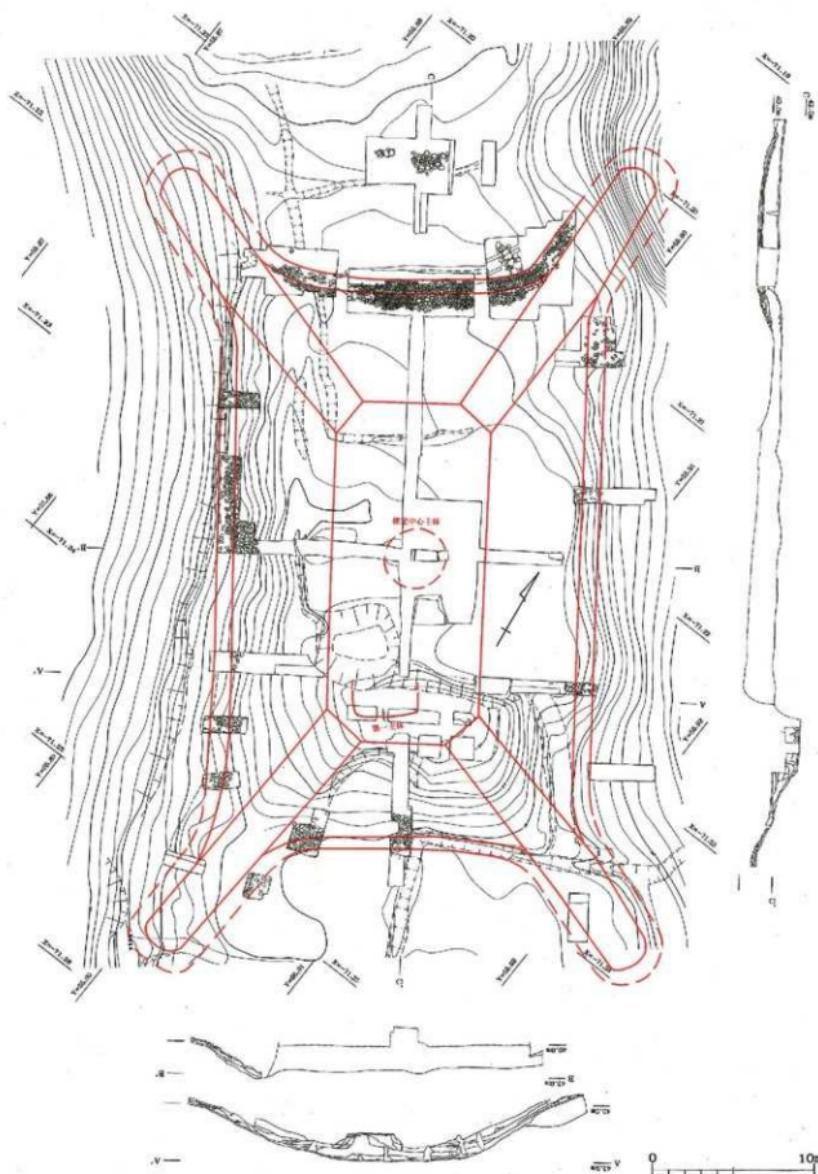


図49 2号墓復元図 (1:300)

## 第5節 西谷17号墓の調査

### 1. 墳丘の現状（図50）

西谷17号墓は西谷と兎谷に挟まれた尾根の標高42m付近に立地し、北東には西谷3号墓、南東には西谷4号墓が尾根沿いに隣接している。

墳丘の南側は採土のためほぼ垂直に削平されていて、断面には地山である山廻疊層が露出している。墳墓とする根拠は、墳頂と考えられる平坦面があることと北東側に高低差約2mの斜面があることである。墳形は円墳とは考えにくいため、方墳の可能性が高い。

### 2. 過去の調査

西谷17号墓の発見は、島根大学考古学研究室の西谷3号墓の発掘調査時で、3号墓の測量図に併せて報告が行われ、「墳丘墓の一部である可能性をもつ」と指摘されている。

1998年の出雲市教育委員会が南側の崖面の土層観察を行っている。観察の結果、墳丘には盛土がなく、すぐに地山が検出され、墳頂部も既に削平された可能性が高いと報告されている。墳丘の東側と考えられる部分から、土壙1基を検出している。土壙埋土には弥生時代後葉～終末にかけての土器が出土している。

### 3. 今回の調査

今回は残丘にトレンチを入れ、埋葬施設の確認及び墳端の確認を目的に掘削を行った。トレンチは幅40cmのものを2ヶ所設定し調査を行った。

#### 1 トレンチ

1トレンチは墳頂から北東端にかけて掘削した。墳頂部は表土を剥ぐとすぐに地山（山廻疊層）を検出し、埋葬施設を確認することはできなかった。このことから、トレンチを拡張していないが、埋葬施設は既に削平されて残っていないことが追認された。

斜面には流土が約30cmと厚く堆積していることからも、墳丘はより高くあったと推定できる。北東端と考えられる部分には④層の流土が堆積していて、墳端をL字状にカットして作り出したと考えられる。墳端の標高は41.5m、残存墳頂が43.8mのため墳丘の高さは2.3m以上であることがわかる。そこで、問題となるのは以前の調査で墳端とした部分の土壙との関係である。土壙は標高42.9mから掘り込まれていて、1トレンチの墳端との標高差が1.4mもある。わずか5mの距離でしかも同じ辺と考えられる墳端の標高が大きく変っていることがわかる。墳端のレベルをそろえてない墳墓も多くあるが、同じ辺であることと円墳の可能性が低いことなどから、土壙がある部分が墳裾ではない可能性が高い。そうすると、土壙の性格や土壙が17号墓に伴うものかなどが問題となる。現状のデータでの分析は難しく、さらなる追加調査が必要である。

#### 2 トレンチ

2トレンチは北西斜面から墳端にかけて掘削した。調査の結果、表土を剥ぐとすぐに地山を検出した。北西斜面は削平されていることがわかり、墳端も不明である。

以上のように、西谷17号墓は不明な点が多い。可能性として一辺15m以上の方形墳になることも考えられるし、墓でない可能性もあげられる。現状では、これらの断定は難しく、今後の課題としたい。

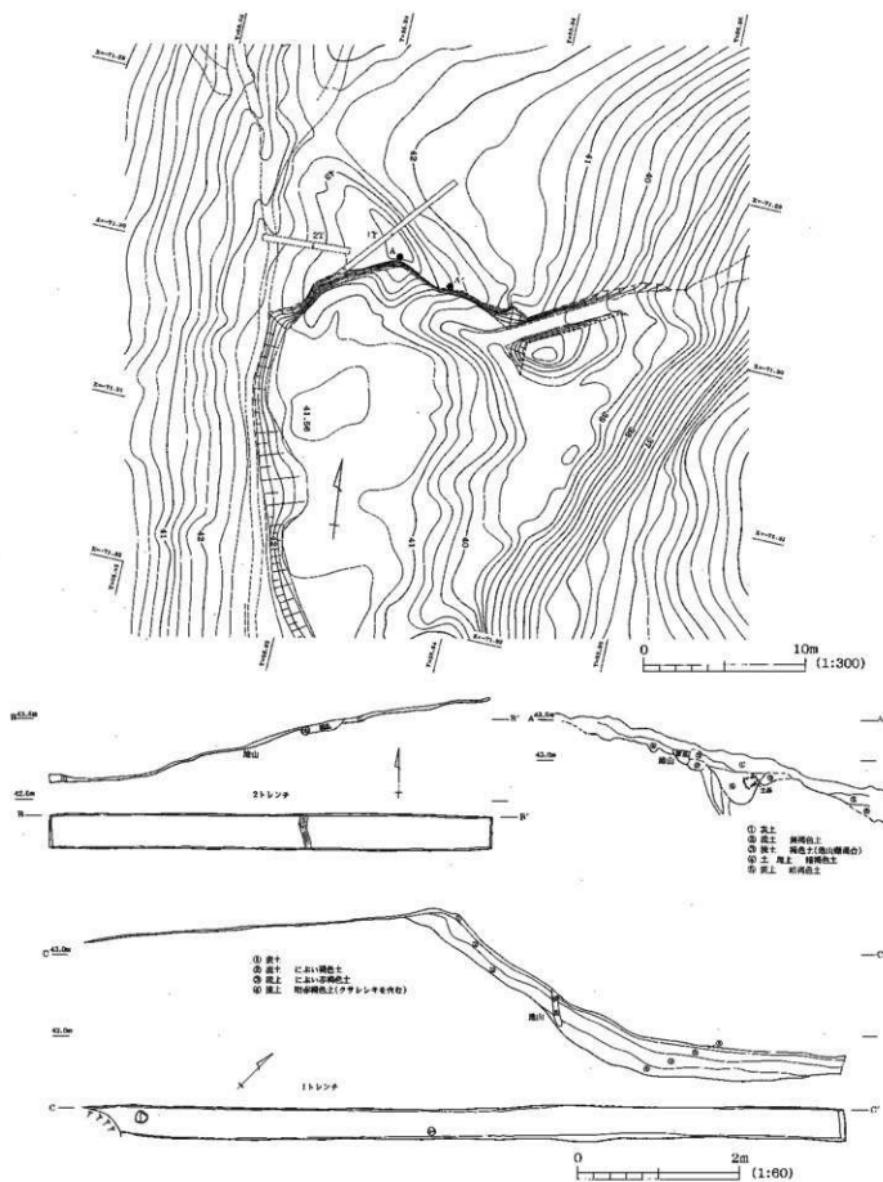


図50 17号墓

## 第6節 西谷4号墓の調査

### 1. 墳丘の現状

西谷4号墓は西谷3号墓と同じ丘陵上に位置し、標高約43mに立地する大型の四隅突出型墳丘墓である。南側には西谷5号墓が隣接している。3号墓との間には東から谷が入り込んでおり、この部分に「観音坂」と呼ばれる小道があり、この観音坂により4号墓の北西突出部が切斷されている。また、北東突出部の上面も削平されているが突出部の形状がよくわかる。南北、南東の突出部は現地形からはその形状はわからない。

戦後しばらく墳頂部は畑として使用されていた。その後、山林となり、現在は史跡公園のために伐採が行われ、園路や案内板が整備されている。

### 2. 過去の調査

西谷4号墓の発見は、1953年に畠の開墾中に多量の土器が出土し、この土器を池田満雄氏が「下米原西谷丘陵遺跡出土土器」と紹介した。この時点では墳墓として把握されていない。その後、この採集した土器の中に吉備の特殊壺、特殊器台があることがわかり、西谷丘陵への関心が高まった。その後、1977年に出雲考古学研究会が

西谷4号墓の測量を行い、四隅突出型墳丘墓と判明した。さらに、1983年に島根大学考古学研究室が墳丘の詳細測量を行っている。

1998年には出雲市教育委員会が2ヶ所のトレンチ調査を行っている。調査の結果、南北約27m×東西約34m、高さ3.5m、突出部を含めると40m以上の四隅突出型墳丘墓であることがわかった。また、配石構造が1段の敷石・立石が巡っていることや、南端のトレンチでは丘陵を切断し墳形を整形していることもわかっている。

### 3. トレンチ配置（図51）

トレンチは墳形を確認する目的で地形に合わせて設定し、21ヶ所の掘削を行った。墳形がいびつであるため多くのトレンチが必要であった。トレンチは1m幅を基本とし、必要な場合に拡張した。

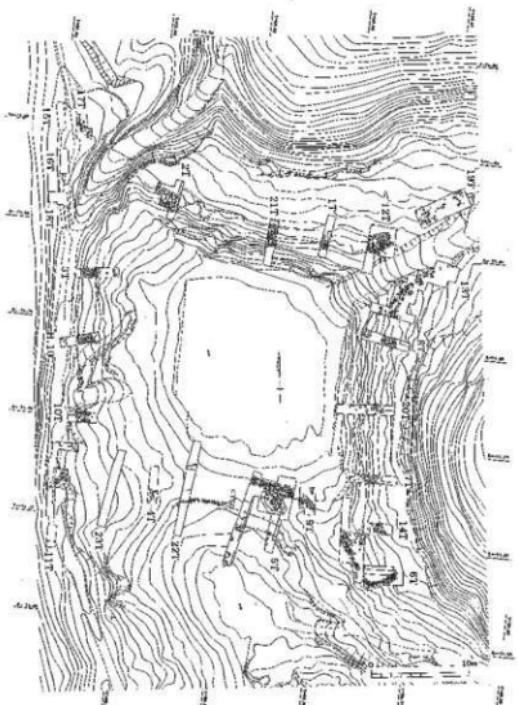


図51 4号墓トレンチ配置図 (1:500)

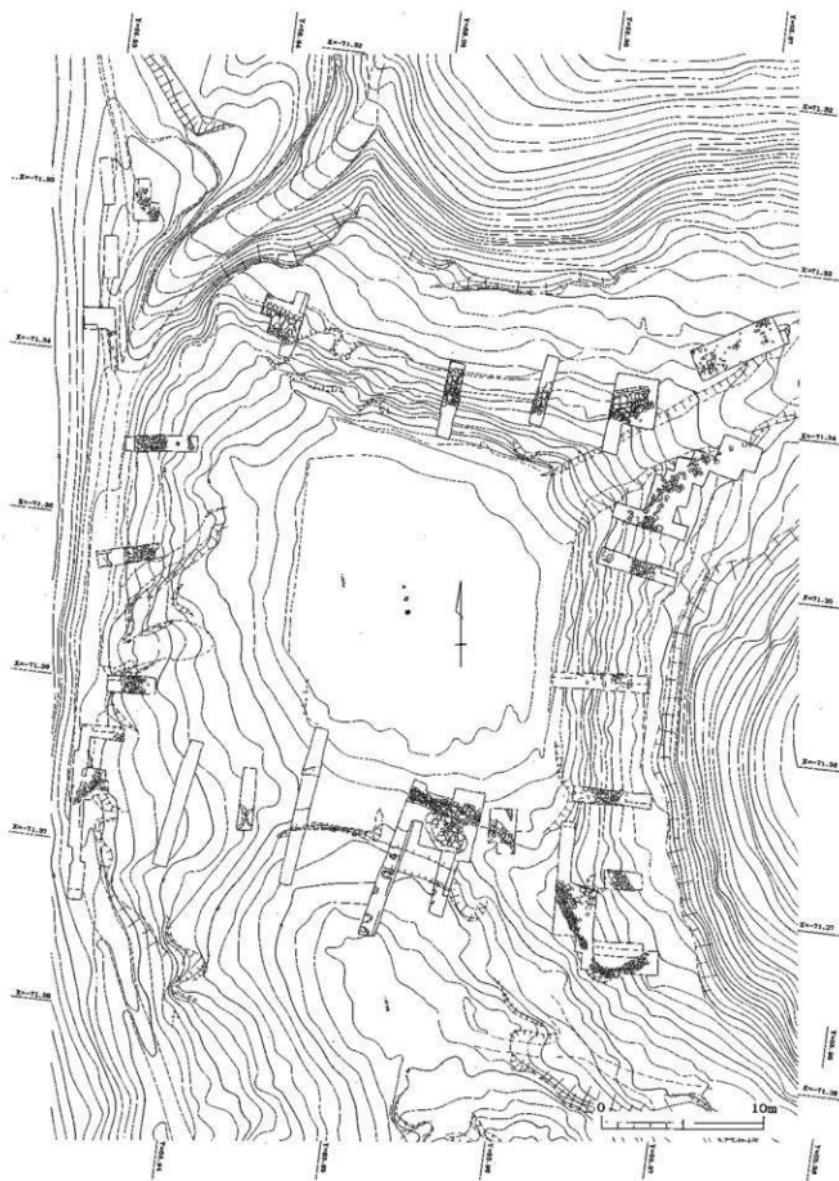


図52 4号墓調査後測量図 (1:300)

#### 4. 各トレンチの調査

##### 6トレンチ・14トレンチ（図53・54）

6トレンチ及び14トレンチは南西突出部の確認のために掘削した。現地形からは突出部が存在しているとは考えにくい状況であったが、調査の結果、突出部の上面は残っていないが、敷石・立石部分が良好に残存していて突出部の先端や幅などがわかった。

突出部の全面を発掘していないため、断定はできないが敷石・立石が途切れることなく突出部を囲んでいると考えられる。突出部長（墳頂から）14m、幅約5m、敷石の幅50cmを測る。特に興味深い点は、墳壠のレベルを揃えていないことである。4号墓の南端のレベルが45.5m、東端は43.5mで2mの標高差があり、それを南東突出部で調整しているよう、南東突出部先端では90cmの比高差がある。これは、地形に合わせて墳丘を築造しているためと考えられる。また、地形に合わせて築造しているが、突出部の築造には約1m程度の盛土をしていることもわかる。突出部上面の構造は明確ではないが、それほど高くはないと考えられる。

大型の四隅突出型墳丘墓の突出部はほとんどが崩壊している中で、西谷4号墓の南東突出部の先端が確認できたことや敷石・立石が突出部を囲んでいることなどは大変重要な発見であった。

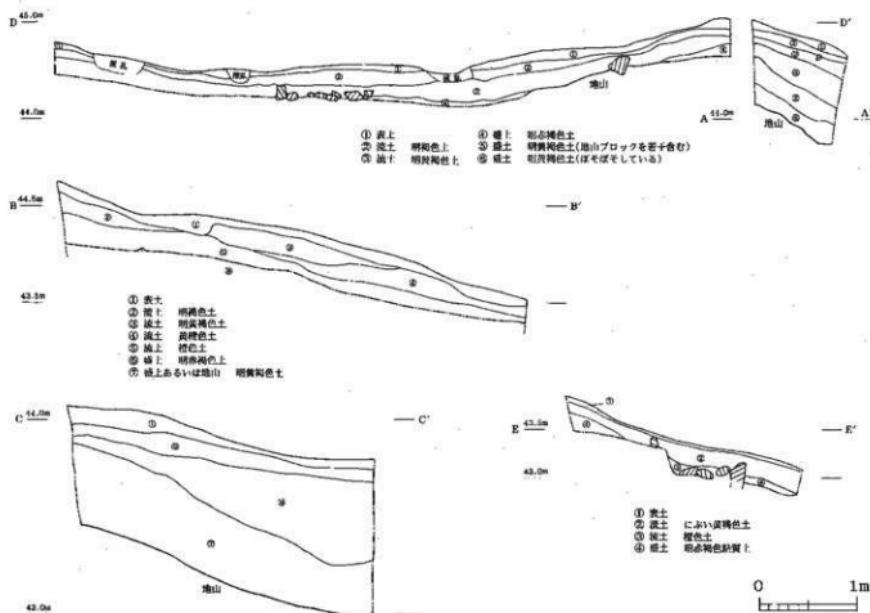


図53 4号墓6・14トレンチ土層図 (1:50)

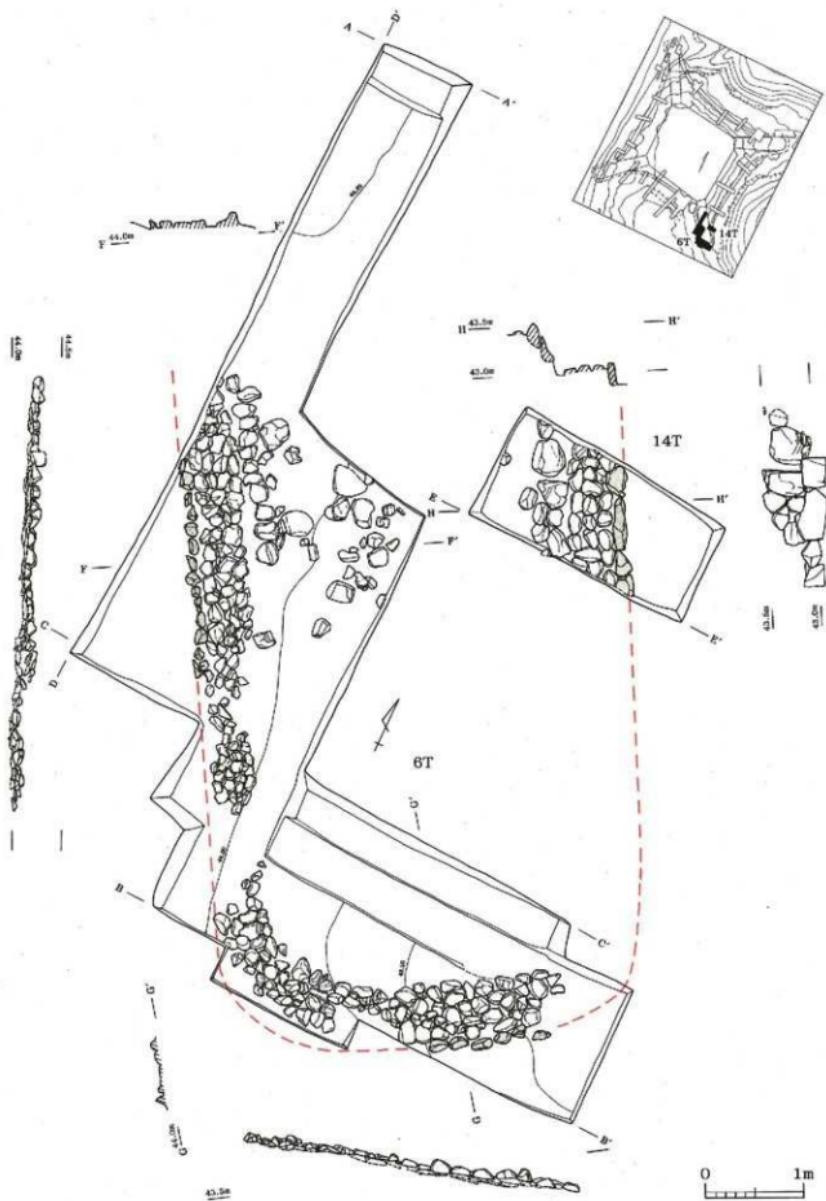


図54 4号墓6・14トレンチ (1:50)

## 7 ブレンチ (図55)

7 ブレンチは4号墓の東端で南東突出部よりの部分を確認する目的で掘削した。配石構造は、貼石と1段の敷石を確認した。立石は崩壊し検出できなかったが、敷石の残存幅が約60cm程度あり、敷石としては十分な幅があるのでこの外側に立石があったと考えられる。

墳丘の築造方法は、約1mの盛土を行った跡に配石を施していることがわかり、大型の四隅突出型墳丘墓を築造するため、尾根ぎりぎりに墳丘を築造し足りない部分を盛土で築造したと考えられる。

## 20 ブレンチ (図56)

20 ブレンチは、4号墓の東端のほぼ中心部分を確認する目的で掘削した。配石はかなり崩壊していく点々と石が残存している状況であったが、敷石・立石を確認することができた。敷石の幅約50cmで、

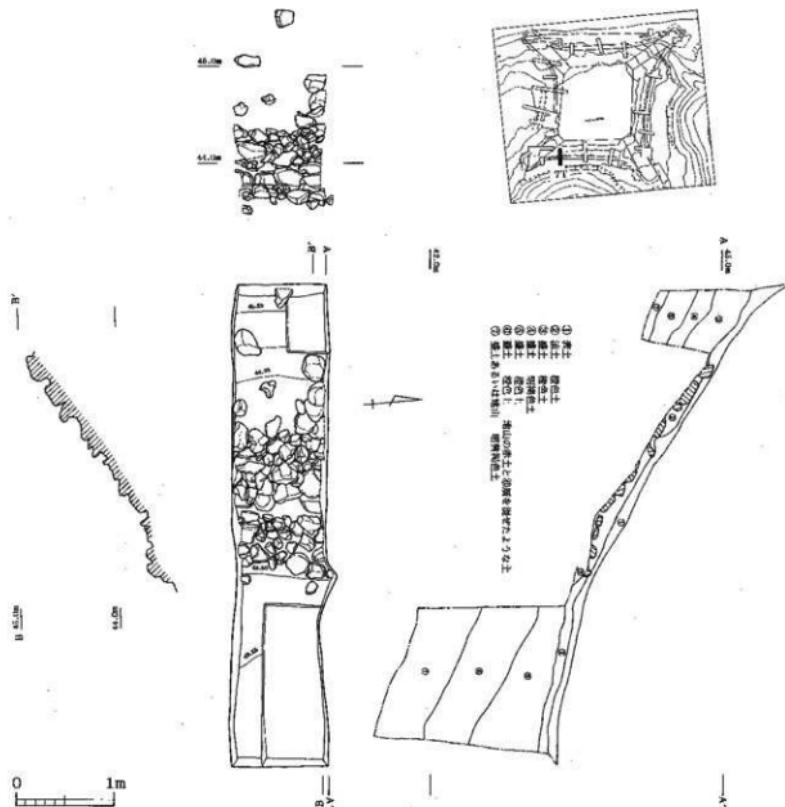


図55 4号墓7トレンチ (1:50)

標高43.5m付近に立石が残っていて、ここが墳端となる。

墳丘の築造方法は、7トレンチと同じく盛土で墳丘を築造した後に、配石を行っていることがわかる。このことから、旧地形を復元すると4号墓の東側の谷（図4参照）が、7トレンチから南東突出部にかけて現地形より深く入り込んでいたと考えられる。

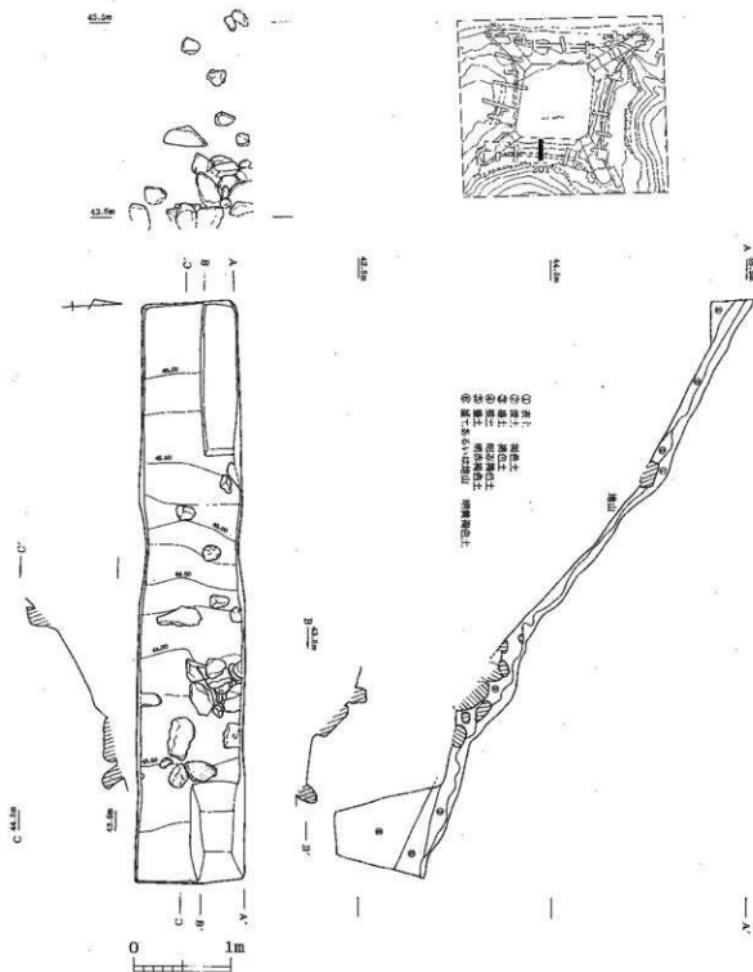


図56 4号墓20トレンチ (1:50)

## 8トレンチ(図57)

8トレンチは4号墓の東端で北東突出部よりの部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石の下部と1段の敷石・立石を確認した。貼石は20cm程度の河原石が積んであり、横方向に目地が通っている。敷石の幅は約70cmで、南の20トレンチから南東突出部の敷石の幅よりは10~20cm程度広くなっている。

墳丘の築造方法は、10cm程度の盛土で墳丘を築造した後、配石を行っている。6・7・20トレンチのように多くの盛土は使用されていない。

## 13トレンチ(図58)

13トレンチは東端から北東突出部に向う部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、配石はかなり崩壊していることがわかったが、部分的に貼石、敷石、立石が残存していて北東突出部の東端側の墳端形状がある程度確認できた。突出部上面と先端については崩壊していた。

墳丘の築造方法は地山を削り出した後に配石を行っている。

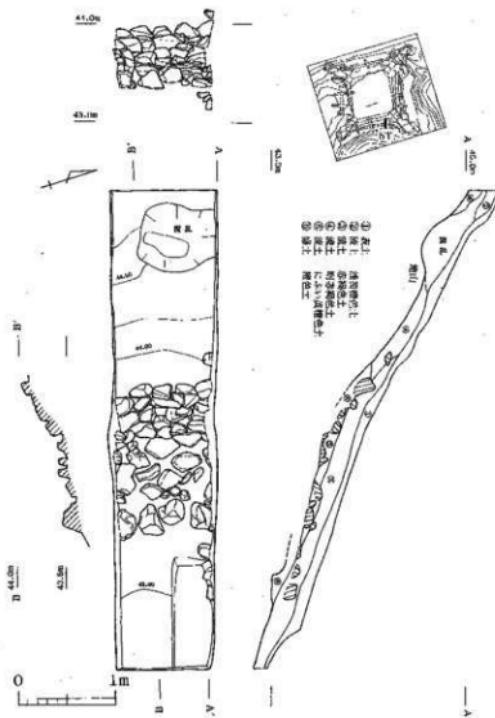


図57 4号墓8トレンチ(1:50)

## 19トレンチ (図59)

19トレンチは北東突出部の北端側を確認する目的で掘削した。調査の結果、配石は崩壊していて、点々と石を検出したが残存している石を確認することはできなかった。しかし、15トレンチからのつながりから19トレンチ内に突出部の先端と墳端があることは容易に想像できる。

## 12トレンチ (図60)

12トレンチは北端から北東突出部へ曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石と敷石を確認した。貼石には大小様々な河原石が使用されている。敷石にはやや大きな石が使用され、幅約90cmと東端や南端に比べて広い。敷石の外側の立石はなくなっていたが、溝が敷石に沿って掘り込まれていて、この溝の中に立石が並べてあったと考えられる。4号墓の立石の立て方は2種類あり、溝の中に立てるものと、立石が倒れないように立石の外側に土を置き、支えるものがある。

墳丘の築造方法は、地山を削り出して墳形を整えた後で配石している。

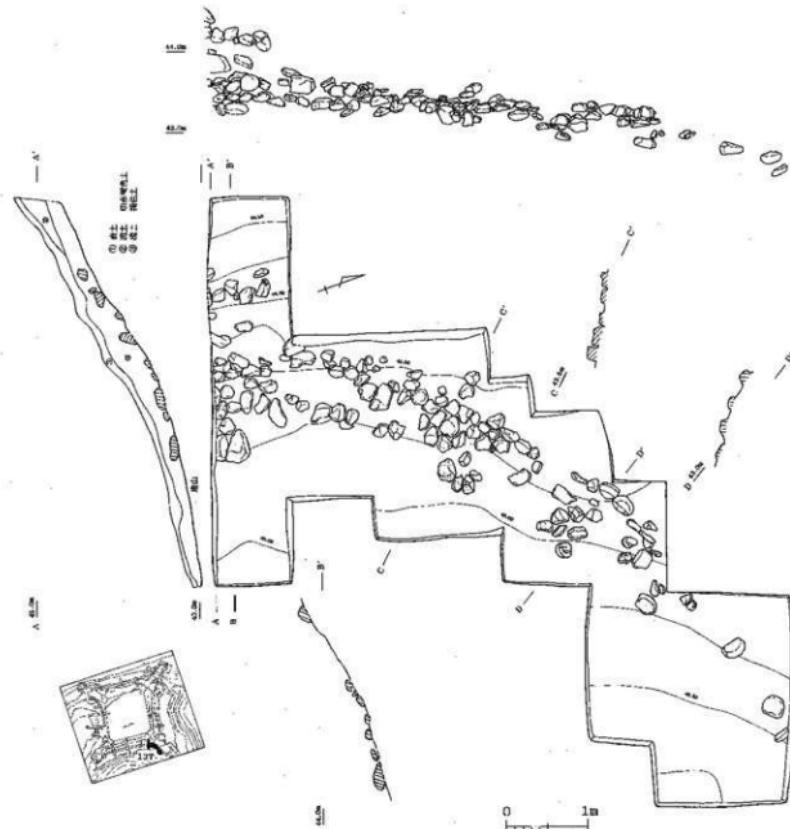


図58 4号墓13トレンチ (1:60)

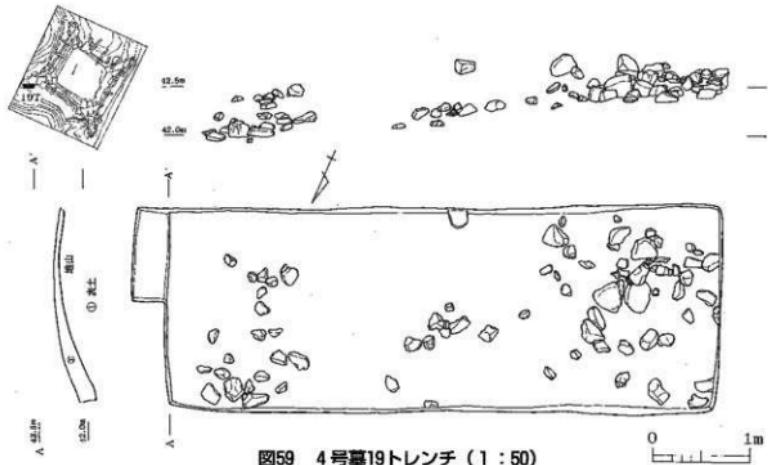


図59 4号墓19トレンチ (1 : 50)

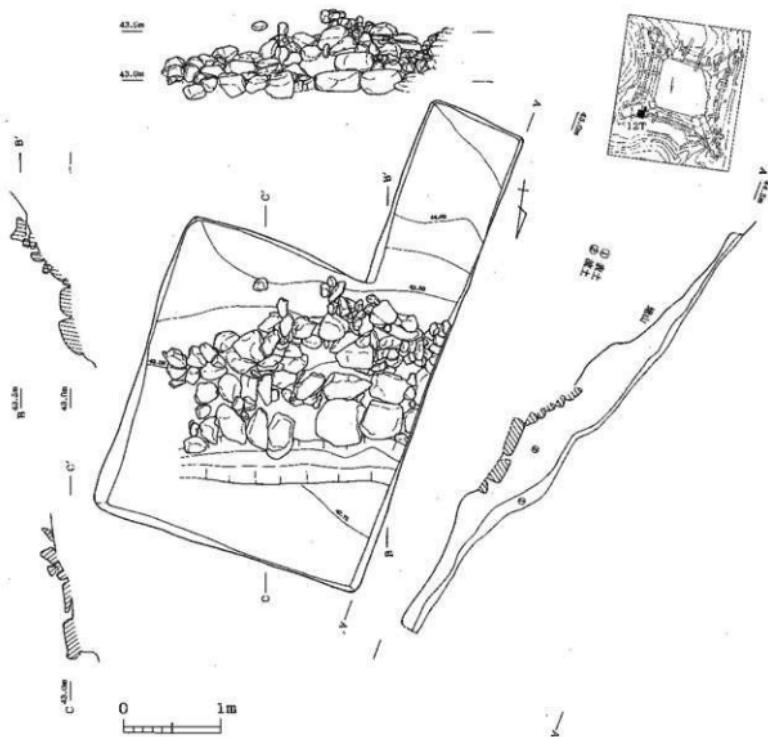


図60 4号墓12トレンチ (1 : 50)

## 1トレンチ（図61）

1トレンチは北端の北東突出部よりの部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石、1段の敷石・立石を確認した。敷石の幅は90cmと広い。

墳丘の築造方法は、地山を削り出して墳形を整えた後で配石している。

敷石上面の流土から土器片が出土していて、もともと墳頂にあったものと考えられる。

## 21トレンチ（図62）

21トレンチは、北端のほぼ中央に位置する部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石、1段の敷石・立石を確認した。敷石の幅は90cmと広い。

墳端から墳頂の標高差が3.4m以上あり、4辺の中では一番高低差があり高い墳丘を意識して築造していると考えられる。

墳丘の築造方法は、地山を削り出して墳形を整えた後で、10cm程度の盛土をしてから配石している。流土から土器片が出土していて、もともと墳頂にあったものと考えられる。

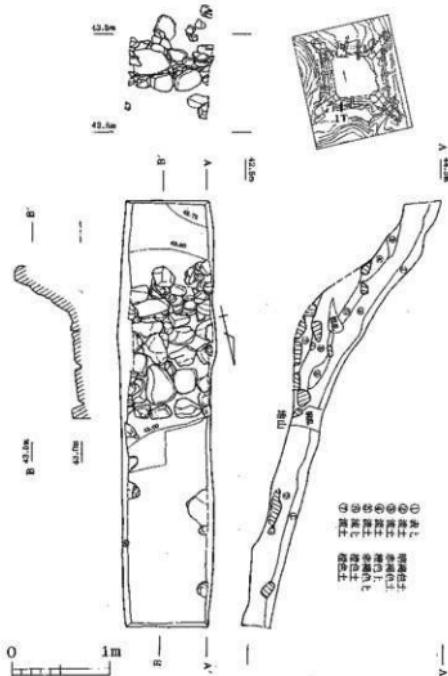


図61 4号墓1トレンチ (1:50)

## 2 トレンチ (図63)

2 トレンチは北端の北西突出部よりの部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石と1段の敷石・立石を確認した。敷石は50cmを超えるほど大きな石が使用され、幅は約1mで4号墓の中で一番広く、南端の狭い敷石の3倍はある。立石の外側には立石が倒れないようにするための盛土と考えられる土層⑦を確認した。

墳丘の築造方法は、地山を削り出して墳形を整えた後で配石している。北端の形状は、直線的ではなく弓なり状をなしていて、2 トレンチ部分は弓なりの延長で突出部に向かって緩やかに曲がっている場所であることがわかった。

敷石上面の流土から土器片が出土していて、もともと墳頂にあったものが転落したと考えられる。

12・1・21・2 トレンチのある北辺は、墳丘が高く、また、敷石や立石に50cm程度の大きな石が使用されていることなどから、4号墓の中でも莊嚴に見える辺(面)である。東側の西谷あるいは3号墓方面から見て北辺は4号墓の表側と考えられる。東辺も北辺に次ぐ高さがあることから北辺と東辺は特に重視して造られ、そこにある北東突出部はかなり重要な意味を持つ突出部であったであろう。

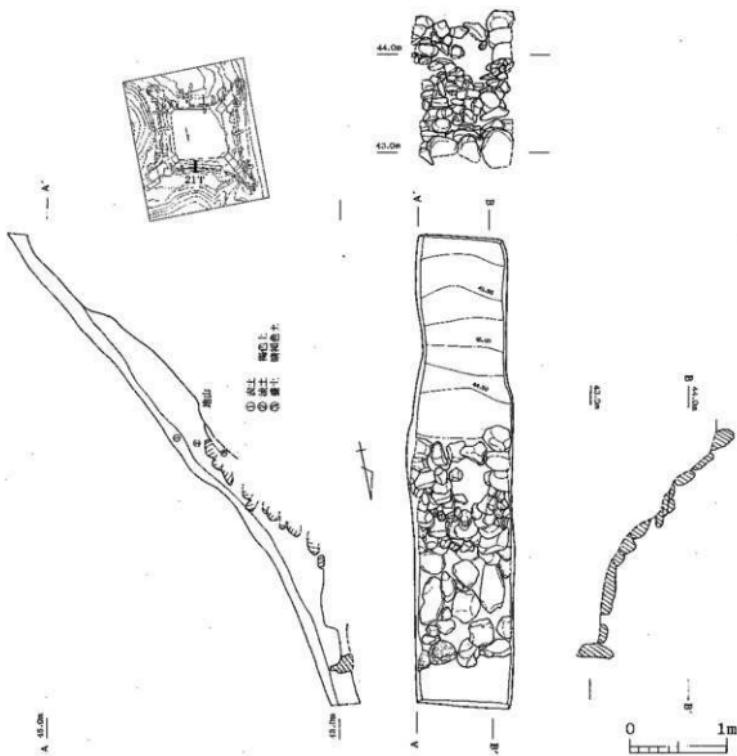


図62 4号墓21トレンチ (1:50)

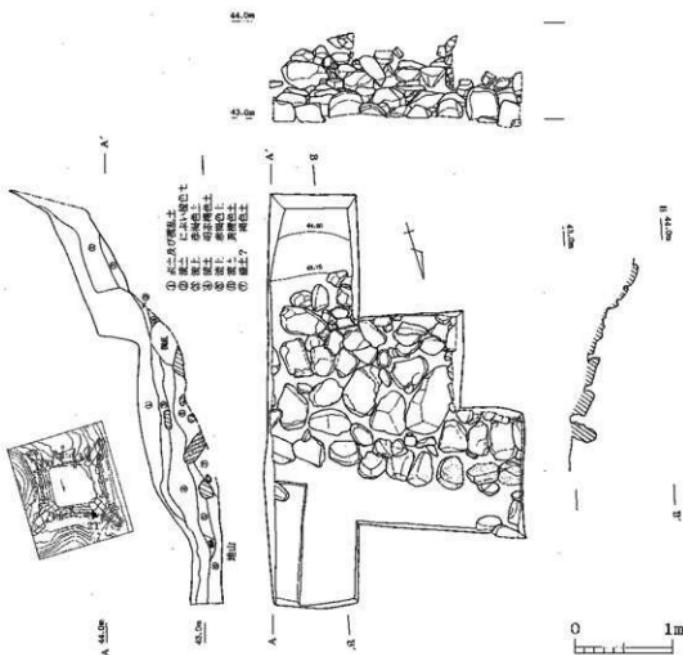


図63 4号墓2トレンチ (1:50)

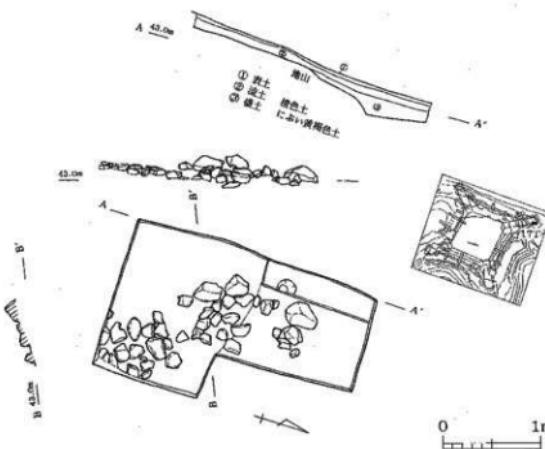


図64 4号墓17トレンチ (1:50)

## 17トレンチ（図64）

17トレンチは北西突出部の北端側で突出部の先端近くの部分を確認する目的で掘削した。北東突出部は観音坂で破壊されて、墳丘側と突出部先端部分に分断されている状況で現況では突出部先端の形状は不明であった。調査の結果、貼石の根石と敷石を確認した。立石は確認できなかったが、敷石の外側に立石があると考えられ、およそその墳端は推定できる状況である。敷石には20cm程度の河原石が使用され、北端の大きな敷石とは異なる。

## 15トレンチ・16トレンチ・18トレンチ（図65）

15トレンチは北西突出部の先端、16トレンチ及び18トレンチは北西突出部の西端側を確認する目的で掘削した。調査の結果、いずれのトレンチも配石が崩壊していて突出部に関連する情報を得ることはできなかった。また、18トレンチは詳細な復元図を作成した時点で、明らかに墳丘外に設定していることがわかった。

## 3トレンチ（図66）

3トレンチは西端の北西突出部より部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石、1段の敷石・立石を確認した。敷石は20~30cm程度のもので幅約50~60cmを測る。

墳丘の築造方法は、地山を削り出して墳形を整えた後で10cm程度の盛土をしてから配石している。土層観察から立石の下層部分に、墳丘築造前の性格不明な落ち込みを確認している。4号墓に伴うものかは不明である。

## 10トレンチ（図67）

10トレンチは西端の南西突出部より部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石、1段の敷石・立石を確認した。興味深い点は、敷石と貼石の傾斜が変わっていない点で、石の大きさのみで貼石と敷石を表現していることである。敷石は幅約60cmで約10cmの河原石を使用し、貼石は20cm程度の河原石を使用している。敷石と貼石の傾斜を変えないということは墳丘整形の粗さであり、10トレンチ付近の築造にはあまり力を入れていないと推定できよう。

墳丘の築造方法は、地山を削り出して墳形を整えた後で10cm程度の盛土をしてから配石している。

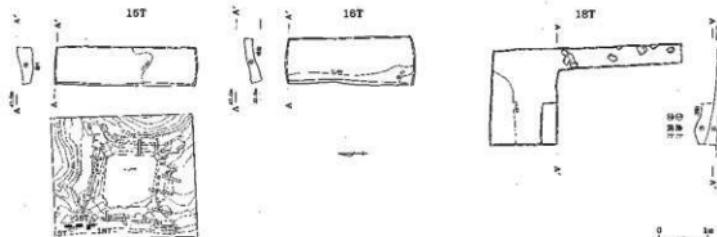


図65 4号墓15・16・18トレンチ（1:100）

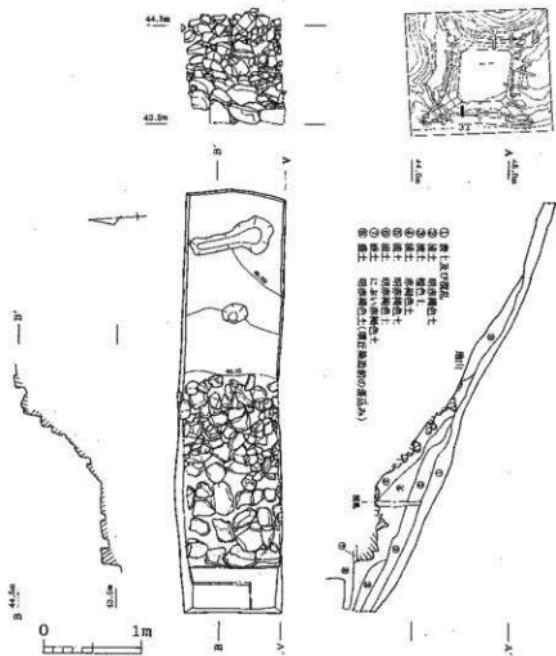


図66 4号墓3トレンチ (1:50)

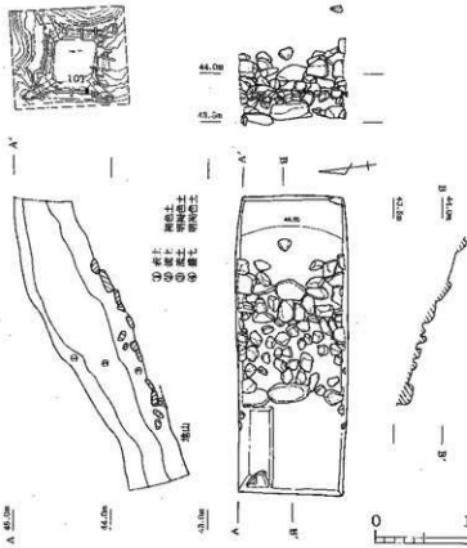


図67 4号墓10トレンチ (1:50)

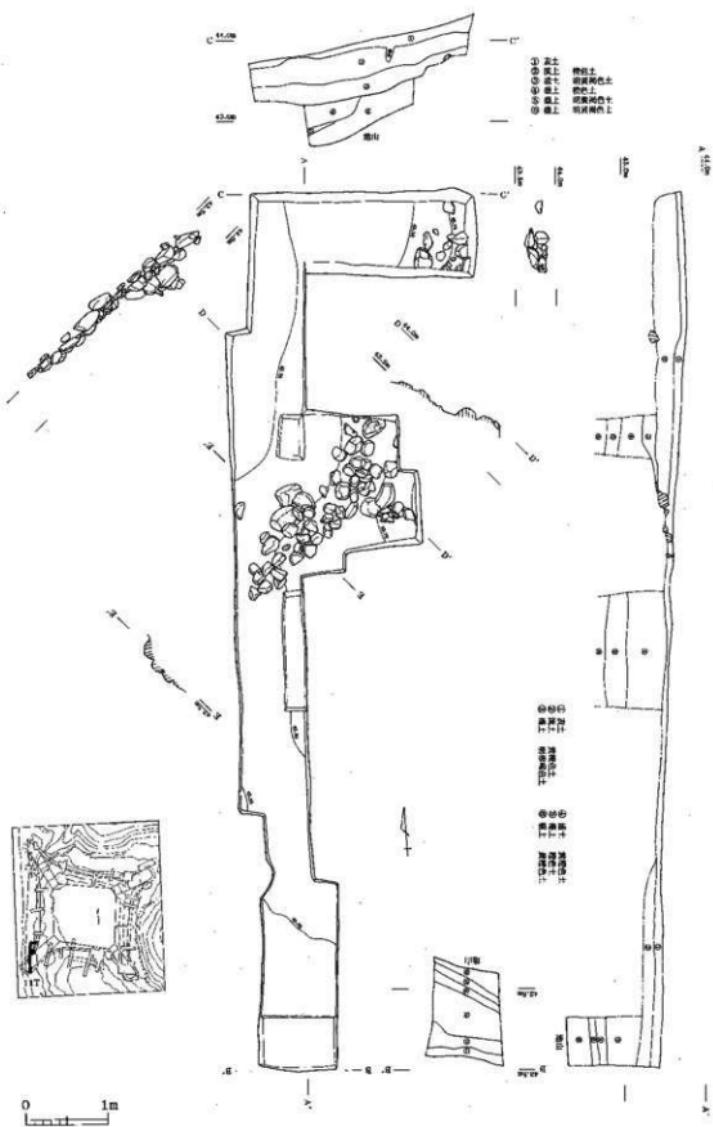


図68 4号墓11トレンチ (1 : 60)

## 11トレンチ (図68)

11トレンチは南西突出部を確認する目的で掘削した。調査の結果、西端から南西突出部へ曲がる部分の貼石と1段の敷石・立石を確認した。敷石の幅は約60cm程度である。10トレンチと同じく敷石と貼石の傾斜変換は大きくない。

土層観察から、南西突出部は南東突出部と同じく1m程度の盛土で築造されていることがわかった。まとめると、南西突出部と南東突出部は盛土により築造し、北東突出部と北西突出部の基盤は地山を削り出して築造していると考えられる。

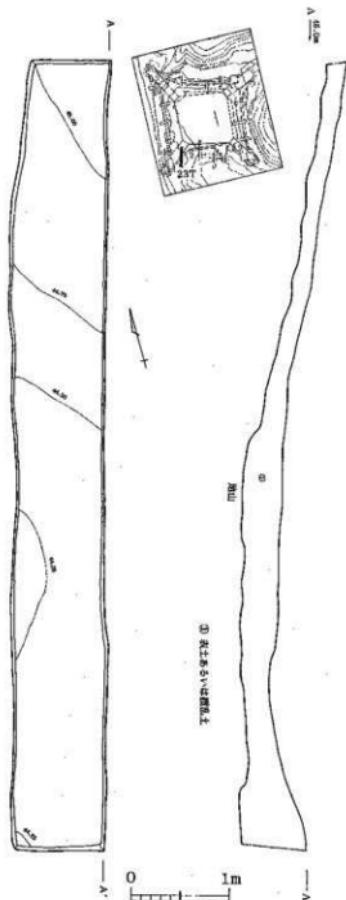
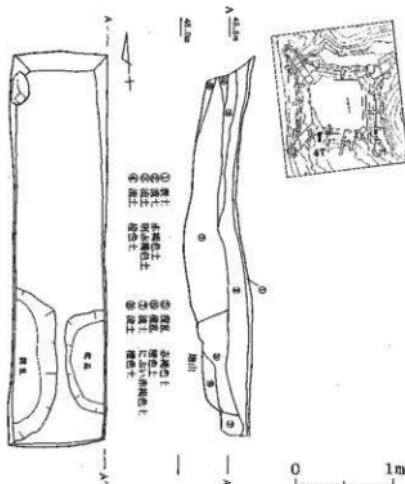


図68 4号墓11トレンチ (1:50)

## 23トレンチ・4トレンチ (図69・図70)

23トレンチ及び4トレンチは南端から南西突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。南西突出部付近の現況は、削平されていることが想像でき、突出部が存在するような状況は地表観察では確認できない。

調査の結果、やはり搅乱されていて配石及び埴丘も崩壊した状況であった。4号墓に関連する情報はこれらのトレンチからは得ることができなかつた。

図69 4号墓23トレンチ (1:50)  
図70 4号墓4トレンチ (1:50)

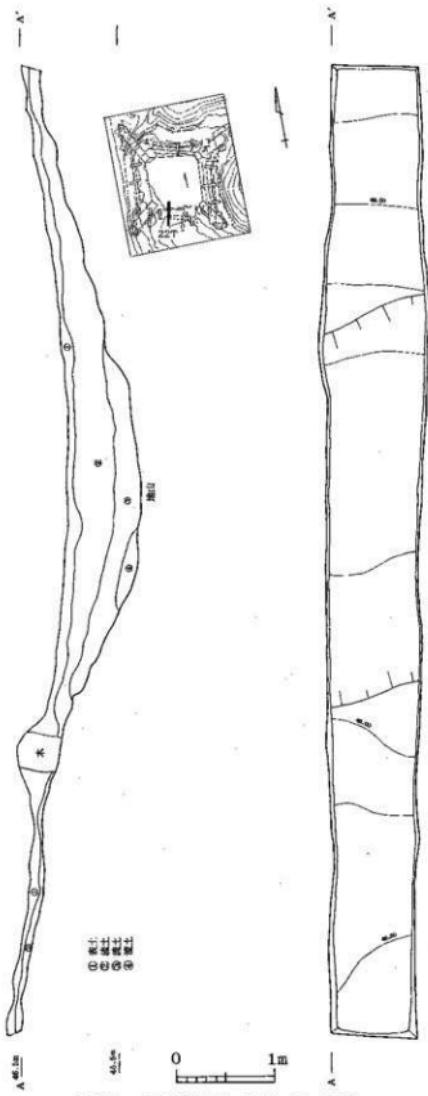


図71 4号墓22トレンチ (1:50)

## 22トレンチ (図71)

22トレンチは南端の西よりの部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、配石は残存していないかった。しかし、東西に走る溝状の落ち込みを確認した。この溝は幅約4mで、4号墓の南端を造るために丘陵をカットしたものと考えられる。この溝の北側部分が4号墓の南端で配石が行われていたと推定できる。

この溝の底から土器(75-14)が出土している。この土器は、山口県西部からの搬入品で、時期は弥生時代終末期の古段階頃のものである。問題となるのは、4号墓の埋葬施設に伴うものかということである。配石が残存していないため、詳細な出自の推測は難しいが、可能性として墳頂にあつた土器の転入、あるいは別の遺構に伴っていたなどの2案が考えられる。いずれにしても、4号墓に関連する遺物であることは間違いないであろう。

## 5トレンチ・9トレンチ (図72・73)

5・9トレンチは4号墓の南端から南東突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査中に1998年に調査したSトレンチの墳端と5トレンチの墳端が図面上で繋がらないことがわかり、5トレンチを拡張してSトレンチと合体させ正確な図面を作成した。

調査の結果、貼石と1段の敷石・立石を確認した。敷石の幅は30cm程度で4号墓の中で一番狭い。立石の標高は約45.5mで、墳端のレベルとしては4号墓の中で一番高い。4号墓で一番低い標高は北端の21トレンチで約42.8mを測り、標高差が2.7mもあり墳端のレベルを揃える意識が無いことが



図72 4号墓5・9トレンチ (1:50)

わかる。南端の標高が高いため、墳頂までの斜面は約1m程度である。墳端の標高が高い理由は、東西方向に幅4m～5m、深さ約1mの溝を掘削して4号墓の南端を造り出しているため、これ以上深く掘削することはかなりの労働力を必要としたからで、4号墓の南側はそれほど重要視されていなかつたと考えられる。

### 5 トレンチ集石遺構（図74）

5トレンチの立石を破壊して、地山を掘り込んだ性格不明の土坑を検出した。土坑は長軸3.1m、短軸1.9mの平行四辺形状をなす。土坑の中には4号墓の配石には使用されていない60cm程度の大きな河原石を中心にしてあった。石は2段積んでおり、東側の一一番下の石を移動させ掘り込みの有無を確認したが掘り込みは無く、埋葬施設の可能性は低い。しかし、石をすべて取り上げて確認していないので埋葬施設ではないと断定はできない。

興味深い点は、集石遺構内に石が配置していない場所があり、そこから土器が出土していることがある。土器は山口県瀬戸内海沿岸地域の土器を模倣したもので、22トレンチから出土した75-14などを参考に出雲でつくったもので、弥生時代終末期の古段階頃のものと考えられる。

この集石遺構は4号墓の立石を破壊して造られていることと、4号墓の配石と同じ流土で埋まってることから、4号墓築造後の近い時期に築造された4号墓に関係する遺構であると考えられる。

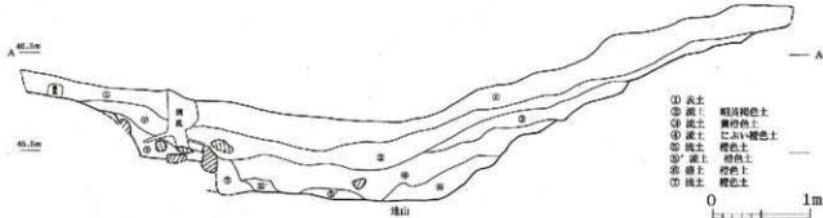


図73 4号墓5トレンチ土層図 (1:50)



図74 4号墓集石遺構 (1:50)

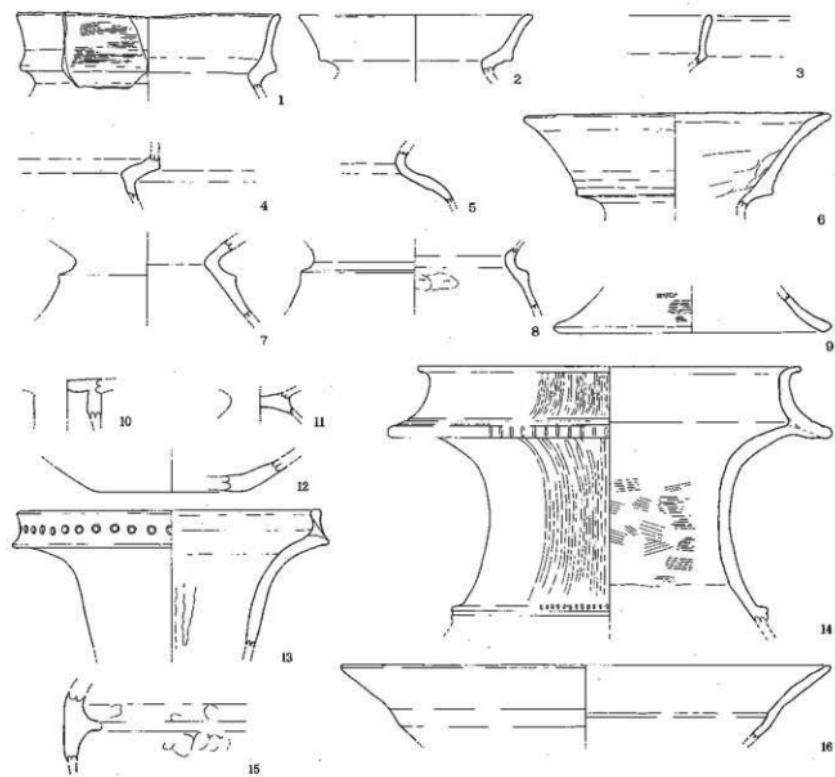


图75 4号墓出土土器 (1:3)

### 5. 出土土器 (図75・76)

75-1～16は今回の調査で出土した土器で、すべて流土からの出土であり元位置を留めたものは無い。75-17～22は1953年に畠の開墾中に出土したもので、池田満雄氏から近年出雲市へ寄贈していたもので、既に報告されているが再実測して報告する。

75-1～5は壺あるいは壺の破片である。75-1は複合口縁をなす口縁部で、口縁部外面に浅い擬凹線文が施してある。75-2と3も複合口縁をなす口縁部片であるが口縁部外面にはナデが施してある。75-4は複合口縁をなすものであるが、2次口縁を欠いている胴部上半にかけての破片である。75-5は胴部上半で強く脇が張る器形をなす。75-6～9は鼓形器台の破片である。75-6は器受部で、外面にはナデが施してある。75-7と8は筒部から脚部にかけての破片で、筒部は短く、外面にはナデが施してある。75-9は脚部片で、薄い擬凹線が施してある。75-10は高壺の接合部の破片で、円盤充填方で外面に刺突痕がある。75-11は低脚壺の接合部の破片である。75-12は、吉備の特殊壺の底部片でくびれず立ち上がる平底をなす。75-13は複合口縁壺の口縁部から頸部にかけての破片で、逆「ハ」字状に聞く頸部に、短い直立した2次口縁部がつく。2次口縁部の外面には竹管文が巡っている。頸部内面には絞り痕がある。この土器は西部瀬戸内あるいは北部九州系の上器を模倣して出雲の胎土で作られた特異な土器である。75-14は山口県西部の複合口縁壺の搬入品で口縁部から頸部に

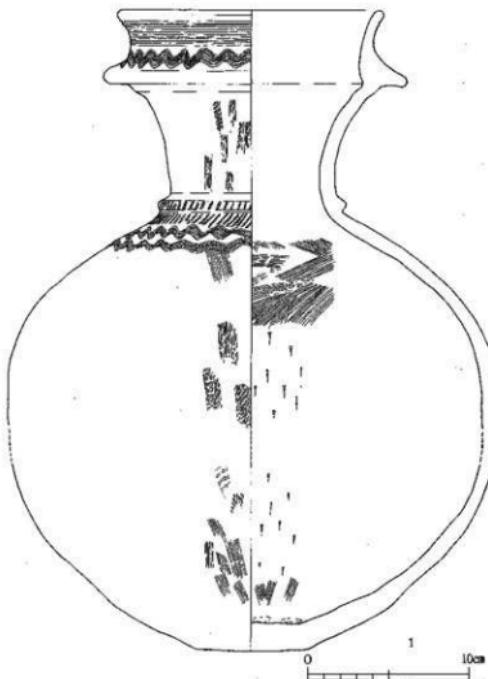


図76 4号墓集石造構出土土器 (1:3)

かけての破片である。口径は23.4cmを測り、2次口縁部は大きく反り返っている。外面にはミガキ、内面にはハケメが施してある。75-15は筒状のものに突帯が巡っていて在地土器としては器種が不明である。75-16は在地の高壺の口縁部片と考えられ、内面に段がある。75-17～20は鼓形器台の破片で、一般的なものより器壁がかなり厚い特異なものである。75-21は注口土器などにつく把手の破片と考えられる。75-22は低脚壺の脚部の破片で脚径が9cmと大きく聞く。

図75は4号墓に伴う土器で時期は草田3～4期のものと考えられる。

図76は集石造構から出土した複合口縁壺で、山口県瀬戸内沿岸地域の模倣土器である。頸部と胴部の境には貝殻復縁による列点文が施してあり、出雲の特徴がみられる。

## 6. 西谷4号墓の調査成果

西谷4号墓は四隅突出型墳丘墓で、南北約27m×東西約34m、高さ3.5m、突出部を含めると40m以上の大形の墳丘墓で、終末期古段階の墳墓である（図77）。築造方法は、地山を削り出し、10cm程度の盛土をしてから配石を行っている。尾根いっぽいを利用して墳丘を築造しているため地形が足りない部分が生じていて、その部分は地山を削り出した後に1m程度の盛土をして墳丘を整形している。また、南端を造り出すために、南北方向に伸びている尾根を東西方向にカットして、幅4m、深さ1m程度の溝を掘り、墳丘を整形している。そのため南端の標高は他の3面より高く、墳頂との標高差は約1m程度である。対面の北端との標高差は約2.7mもあり墳丘築造時には墳端のレベルをそろえる意識が無いことがわかる。配石は貼石と1段の敷石・立石を確認している。貼石は貼っている部分と積んでいる部分があり統一されていない。敷石は幅が30cmと狭い部分と幅が1mと広い部分があり統一されていない。以上のことをまとめると、西谷4号墓は平面形が歪んでいて、墳端の標高がそろっていない、また、敷石の幅が統一されていないなど墳丘築造が他の2号墓や3号墓と比較して雑な印象をうける。雑に築造してあるため特に丁寧に作った部分が目立ってきていて、北辺側は墳端から墳頂までの比高差が約3.4mもあり高い墳丘であることを意識している。また、敷石に使用される石が50cmを越える大きな石で、敷石の幅も1m程度あり迫力を感じる配石である。北辺に次ぎ丁寧さが感じられるのは東辺で、北辺と東辺は4号墓の中でも重視して築造されていて、4号墓の表側と考えられ、そこにある北東突出部、北西突出部は特に重要な意味を持つ突出部と考えられる。

調査成果の中で特に重要なことは南東突出部の先端を確認したことである。大型の四隅突出型墳丘墓の突出部はほとんどが崩壊していて残存していない中で、先端部の敷石・立石を確認したのである。方丘部と同様に敷石・立石が突出部を巡ることがわかり、また、他の大型の四隅突出型墳丘墓の突出部の長さや形態の参考になる良好な資料となった。

出土遺物は、表探及び流土出土の土器ばかりで元位置を留めたものは無い。在地土器は弥生終末期古段階（草田3～4期）と考えられるが、主体部の調査を踏まえなければ4号墓の時期の確定は難しい。搬入品としては、以前から知られている吉備の特殊壺、特殊器台、山口県西部の壺が出土している。吉備の特殊壺、特殊器台は立板式のものである。特に山口県西部の土器（75-14）は重要で、他地域との併行関係を考えることができる貴重な資料である。断定は難しいが、瀬戸内の終末期古段階や北部九州の西新町式古段階が出雲の草田4期と時期的には併行することが考えられる。

4号墓に関連する遺構として、集石遺構を検出した。性格不明であるが4号墓より新しい遺構である。興味深い点は集石遺構内から山口県西部の壺を模倣した在地土器が出土したことである。

以上のように、西谷4号墓は弥生終末期古段階の大型の四隅突出型墳丘墓で、吉備の特殊壺・特殊器台、山口県瀬戸内沿岸地域の土器が出土する。埋葬施設の調査をしていないが、西谷3号墓、2号墓と同じくらいの被葬者が埋葬されていると考えられる。ただ、配石構造が1段の敷石・立石であることが2号墓、3号墓とは異なる点である。

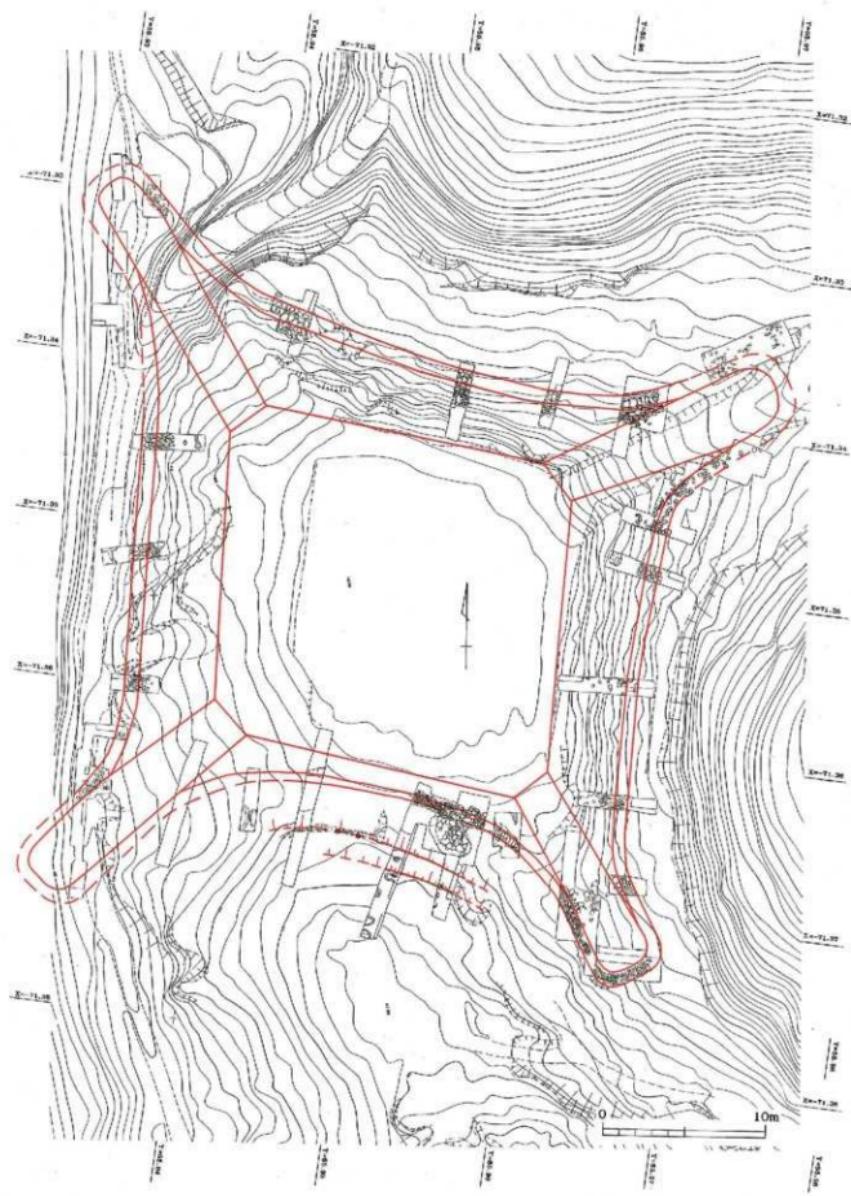


図77 4号墓復元図 (1 : 300)

## 第7節 西谷6号墓の調査

### 1. 墳丘の現状

西谷6号墓は、西谷3号墓や4号墓のある丘陵の最も南の標高約50mに位置する四隅突出型墳丘墓である。墳墓の西から南は破壊され崖面になっていて、南側崖面下には尾根を切って農道が走っている。北側及び東側は畑として使用され、地形が乱れているようである。

### 2. 過去の調査

西谷6号墓は、1972年に出雲考古学研究会により発見され、同年に測量されている。墳丘の隅が突出しているかは不明であったが、人頭大の自然石が散乱していることなどから規模が17mの四隅突出型方形墓として報告されている。また、南側の崖面表面観察が行われ、4基の土壙を確認し、第1土壙から器台と高坏が出土している。

その後、出雲市教育委員会が詳細な測量を行い、1998年に規模確認のために北端と北東突出部の2ヶ所にトレンチを設定し掘削をしている。調査の結果、配石はほとんど残存していなかったが、立石の抜き取り痕や溝を確認したことから1段の敷石・立石が墳丘を巡っていたと考えられている。そして、6号墓は東西17m、南北8m以上、高さ2mの小型の四隅突出型墳丘墓と考えられている。1972年の測量図と1997年の測量図を比較すると、墳丘の西側が新たに大きく崩壊していることがわかり、東西の規模が17mであるという根拠は、現状では確認出来ない状況になっている。

### 3. 崖面の調査

今回の調査は、崖面を精査し6号墓の断面観察を目的とした。調査の結果、図80の土層図を作成し、そして、東西からみた投影図の図78を作成した。投影図は推定で作成したものであるが、実際の埋葬施設とは大きくかけ離れたものではないと考えている。断面確認の結果、2基の埋葬施設を確認し、西から第1主体、第2主体と呼んでいて、投影図は埋葬施設の短軸を表すものと考えられる。

墳丘の築造方法は地山を削り出した後に、約1mの盛土をして整形が行われている。埋葬施設は④層上面から掘り込まれているように観察できるが、③層が搅乱状態で、掘り込みが確認できない可能性もある。

#### i、第1主体

第1主体は、崖面のちょうど、角の部分にある。図78の投影図から④層上面で幅約2m、深さ約1.3mの2段掘りの土壙であることがわかる。投影図では2段掘りの部分が、西より東側が広くなっている。第1主体の軸は東西ラインから若干ずれないと考えられる。墓壙を掘った後、底面を垂平に整えるために10cm弱の盛土を部分的にしている。その上に5cm程度の⑤層の砂砾を墓壙の短軸の底全面に敷いてある。その上に推定幅50cmの木棺を置いて、その左右に木棺の高さ推定で30cm程度の高さまで裏込め土を施している。そして、特に興味深いことは、一気に埋めずに、木棺の上面以外の部分に厚さ約2~3cmの砂を敷いていることである。この時点で、アクセントがあり丁寧な埋葬であることがわかる。その後墓壙を埋めているようである。

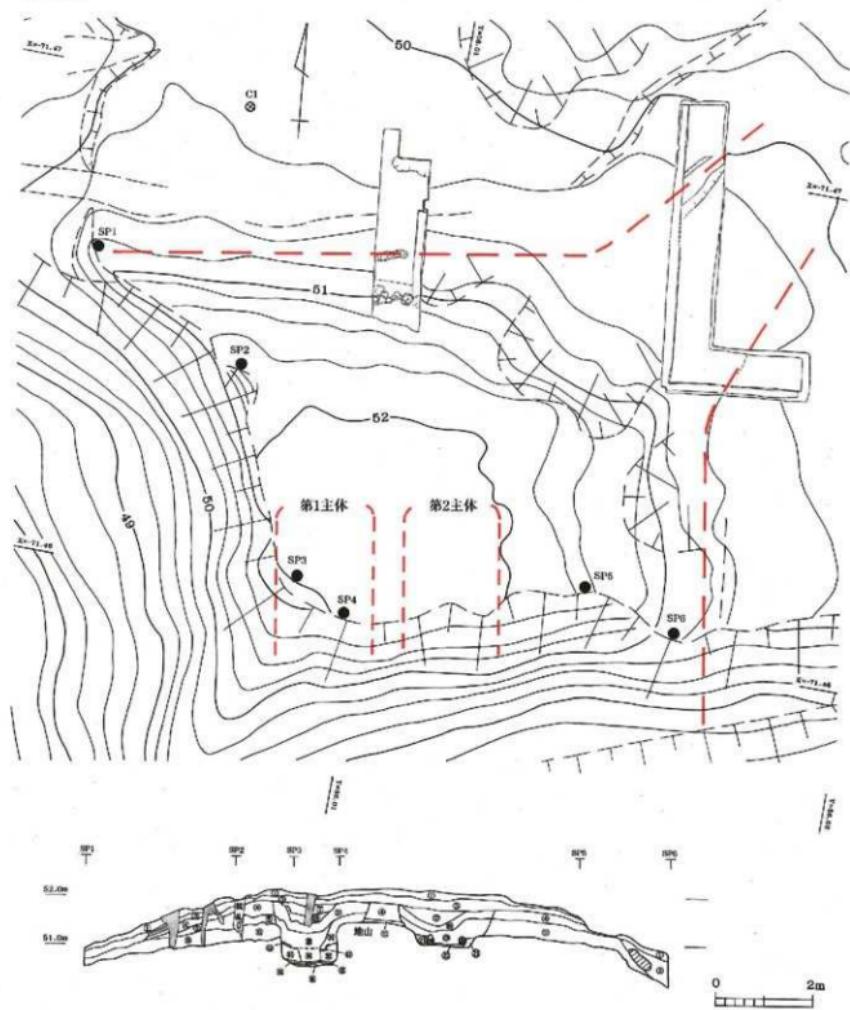


図78 6号墓投影図 (1:100)

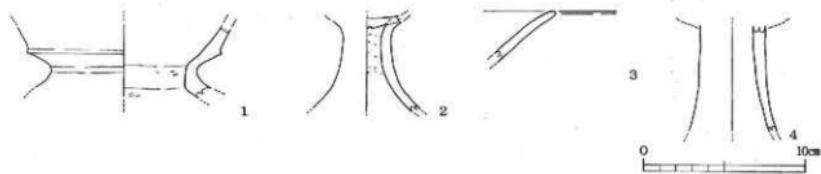


図79 6号墓出土土器 (1:3)

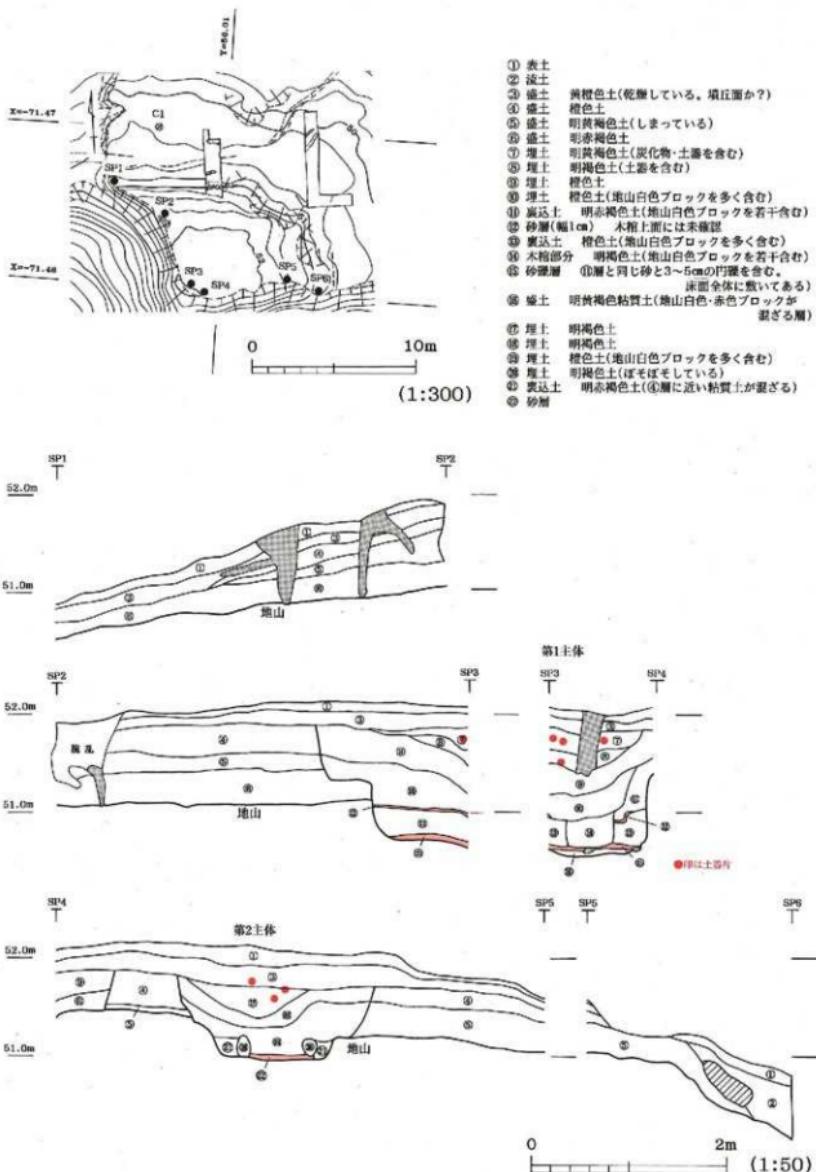


図80 6号墓崖面土層図

崖面精査中に、第1主体に供獻され片付けられたと考えられる土器が、壙内に落ち込んだ状況で出土している。実測可能なものは2点で図79-1・2を図示した。79-1は鼓形器台の筒部の破片で、筒部は短い。79-2は高坏の接合部から脚部にかけての破片で、円盤充填法で作られていて外面には2つの刺突痕がある。いずれも草田5期頃と考えられるが、小さい破片で断定は難しい。

#### ii、第2主体

第2主体は第1主体の約60cm東に離れた場所に掘り込まれている。図79から④層上面で幅約2m、深さ約0.8mの2段掘り状の土壙であることがわかる。土壙の底には、木棺の幅と推定できる幅約70cm、厚さ5cm程度の②層の砂が敷いてあり、この上に木棺を置いたと考えられる。木棺の左右には②層の軟らかくほそほそした土があり、何らかの埋葬に伴う施設があったと考えられる。類似した土層として、棺櫛二重構造である西谷3号墓第1主体の短軸の土層があげられる。しかし、6号墓の第2主体は規模が小さいため棺櫛二重構造とは考えにくいか、可能性の一つとして考えられる。

崖面精査中に、第2主体に供獻され片付けられたと考えられる土器が、壙内に落ち込んだ状況で図79-3・4が出土している。79-3は鼓形器台の受部の破片である。79-4は高坏の脚部の破片である。いずれも草田5期頃と考えられるが、小さい破片で断定は難しい。

### 5. 西谷6号墓の調査成果

西谷6号墓は東西17m、南北8m以上、高さ2mを測る四隅突出型墳丘墓で、突出部を含めると20m程度の小型の墳丘墓である。配石構造は、1段の敷石・立石と推定している。時期は弥生終末期の新段階墳（草田5期）と考えられるが、小破片ばかりであるので確定は難しい。

崖面を精査した結果、2基の埋葬施設を確認した。2基は短軸を東西、長軸を南北にむけた土壙と考えられる。第1主体は2段掘りの土壙で、木棺の下に砂礫を敷き、裏込め土を入れた後も木棺上面以外に砂を敷く丁寧な埋葬方法である。第2主体も2段掘りで、木棺の下に砂を敷く構造である。第1主体と第2主体を比較する、土壙の幅は同じであるが土壙の深さは第1主体が約50cm程度も深い。また、埋葬方法も第1主体が丁寧であると考えられる。以上のことから、西谷6号墓の中心埋葬は第1主体と考えられる。そして、東西が約17mの墳丘と考えられるので第1主体が墳丘の中心に位置する可能性が高い。

## 第8節 西谷9号墓の調査

### 1. 墳丘の現状（図83）

西谷9号墓は西谷3号墓や4号墓のある丘陵から西谷を挟んで北東方向に約300mのところの標高25mに位置する。西谷墳墓群の四隅突出型墳丘墓は、西谷の西側に集中しているが、9号墓のみが西谷の東側に位置する。9号墓の西側には18号墓、19号墓、20号墓が南北に並んでいる。

丘陵の東側と南東側は人家や土砂崩れにより崩壊し、北東側は斐伊川堤防工事のための土採りで大きく削られている。1962年以降には墳頂に三谷神社が鎮座し、社務所が建っている。その建設の際に土器が出土しているらしいが、詳細は不明である。2003年に丘陵の北東側が新たに土砂崩れのため崩壊したため、緊急に保存修理工事を実施している。

### 2. 過去の調査

西谷9号墓の発見は、1980年に出雲考古学研究会の樋野真司氏が発見し、墳丘測量をして四隅突出型方形墓として報告している。土器も表採されたらしいが実測図が無く現在行方不明で詳細は不明である。その後、1985年に島根大学考古学研究室が詳細測量を行っている。墳丘規模は東西42m、南北35m、高さ4.5mの大形の墳丘墓である。2000年に出雲市教育委員会が刊行した西谷墳墓群報告書で、9号墓の表採上器を報告している。土器は高杯、鼓形器台、低脚杯が出土していて草田5期頃で弥生時代終末期と考えられるが、小片のため正確な時期を確定することは難しい。

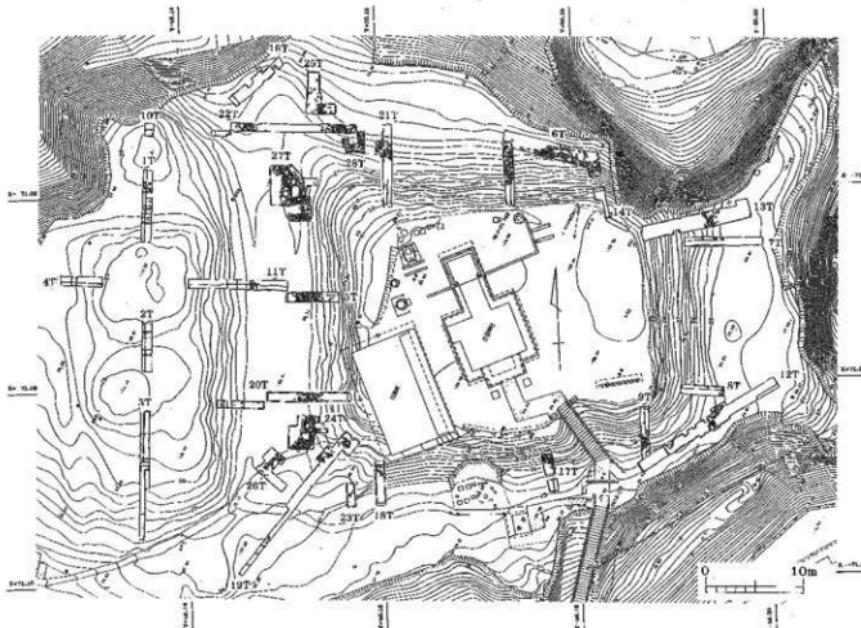


図81 9・18・19・20号墓トレーンチ配図図 (1:500)

### 3. トレンチの設定（図81）

西谷9号墓の発掘調査は今回が初めてである。2003年から2004年に範囲各調査と保存修理に伴う調査を実施した。トレンチは墳形を確認する目的で地形に合わせて設定し、21ヶ所の掘削を行った。トレンチ幅は1mを基準としたが、必要な場合拡張している。

### 4. 配石構造（図82）

調査の結果、配石構造が他の四隅突出型墳丘墓とは異なることがわかった。それは、方丘部の墳端の配石構造が3段の敷石・立石で構成されていることでその幅約1.5m～2mの広さをもつ。3段構造であるが平坦に石が並んでいて西谷3号墓のような階段状にはなっていない。重要な点は四隅突出型墳丘墓の中で3段構造の配石をもつ墳丘墓は他にはないことがある。最近の研究では大型の四隅突出型墳丘墓に2段の配石が採用され、小型の四隅突出型墳丘墓には2段の配石は採用されないことがわかっていて、配石構造の差に階層差があると指摘されている。このことから、段数が多い9号墓は、規模の大きさも含め他の四隅突出型墳丘墓と格差を感じることができる。そして、段数が多いことにより墳丘を飾る意識が高いと考えられる。さらに興味深いことは、方丘部から突出部に曲がる部分で配石構造が3段から2段の敷石・立石に変化することである。突出部に曲がる部分では、1段目の敷石の幅が狭くなり、そして敷石は無くなっている斜面の貼石の外側に1段目の立石がある。ついで2段目の立石もなくなり突出部には2段目と3段目の敷石・立石が巡る構造になっている。つまり、方丘部から突出部に曲がる部分で1段目がなくなり突出部では2段目と3段目が巡る2段の配石構造に変化

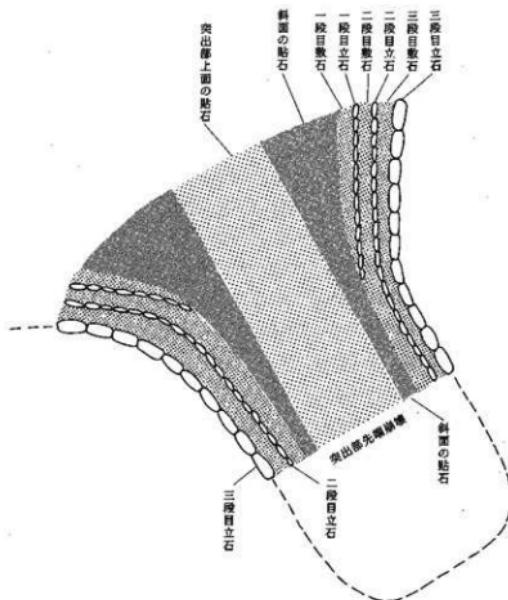


図82 9号墓突出部配石模式図

している。配石を3段から2段へ変化させる方法は上記のような方法と、1段目と2段目を墳丘全体に巡らし方丘部のみに後から3段目を付ける方法が考えられる。後者は2段の配石を行い墳丘築造後の段階でも追加して3段目を配石することが可能であるが、9号墓の場合は2段の配石を行った後に3段目を配石したとは考えにくく墳丘築造前から計画性をもって3段の配石を行ったと考えられる。9号墓のように段数が変化する四隅突出型墳丘墓は他に類例はない。

以上の墳丘配石の面からすると、西谷9号墓と他の四隅突出型墳丘墓との格差が感じられ、特別な被葬者であったと考えられる。

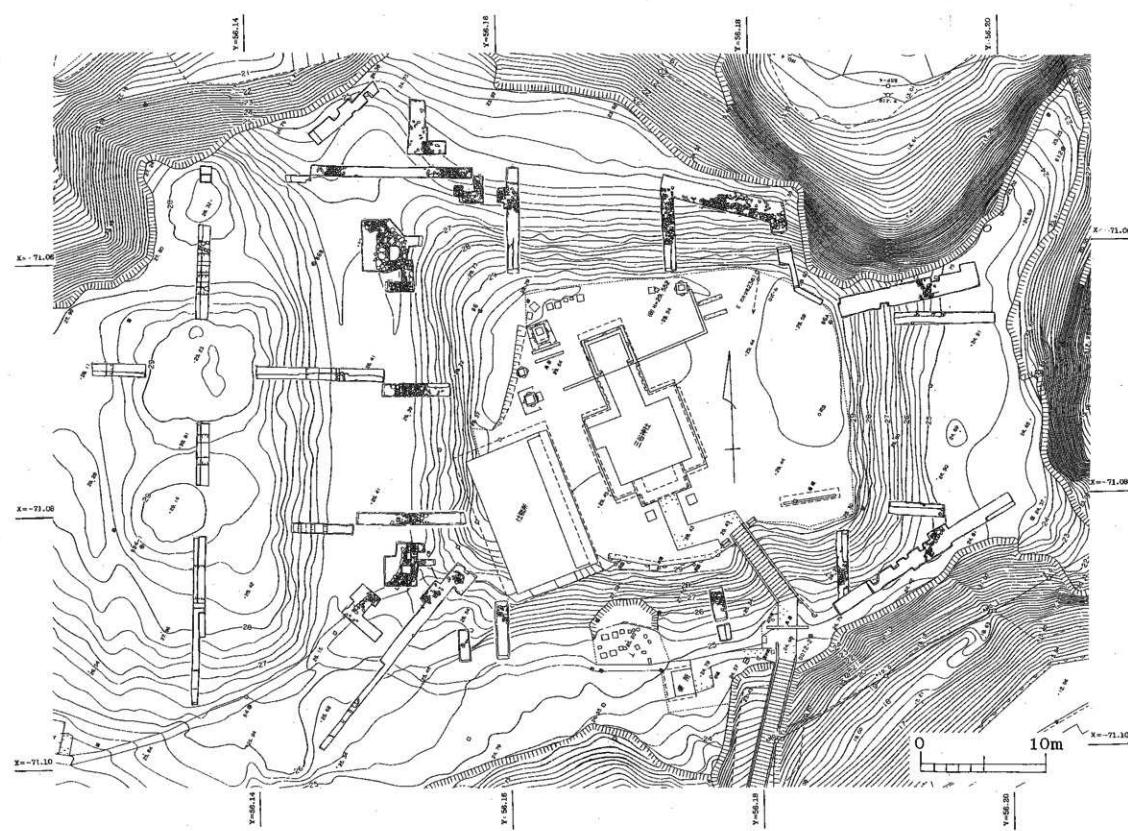


图83 9・18・19・20号墓調査後測量図 (1:300)

## 5. 各トレンチの調査

### 17トレンチ（図84）

17トレンチは9号墓の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、墳頂の配石を確認した。神社建設時に墳頂部の表土を南の斜面にかき出した土が厚く堆積している。そのため、斜面の貼石の検出は崩壊の危険があるため行っていないが残存している可能性が高い。墳丘の築造方法は地山を削り出し、10cm程度の盛土をした後に配石をしている。配石は3段目まで残っていて、南端を確認した。立石には40cm程度の大きな石が使用されている。

1層からは墳頂の埋葬施設に伴うと考えられる土器が出土している。

### 18トレンチ（図85）

18トレンチは南端から南西突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、かなり崩壊した配石を検出した。墳丘築造方法は、地山を削り出して整形し配石を行っている。

配石は、貼石・敷石・立石部分と考えられるが、かなり移動しているため石の部位の判断はできなかった。

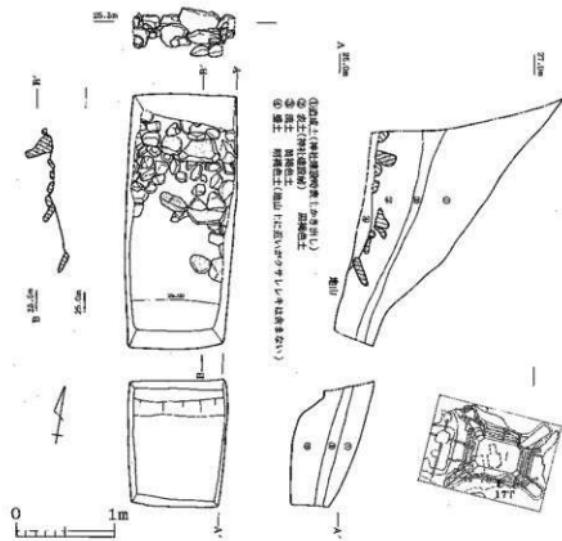


図84 9号墓17トレンチ (1 : 50)

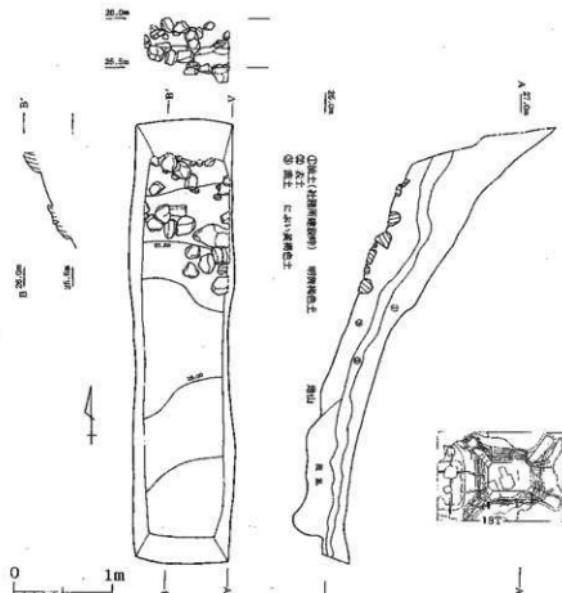


図85 9号墓18トレンチ (1 : 50)

## 9 トレンチ (図86)

9 トレンチは南端から南東突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石を確認した。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に盛土を行い、配石をしている。墳頂に近い部分には60cm程度の盛土を確認した。

貼石は、20cm～30cmの河原石で並べられている。墳端の敷石・立石部分は攪乱のため残っていなかった。

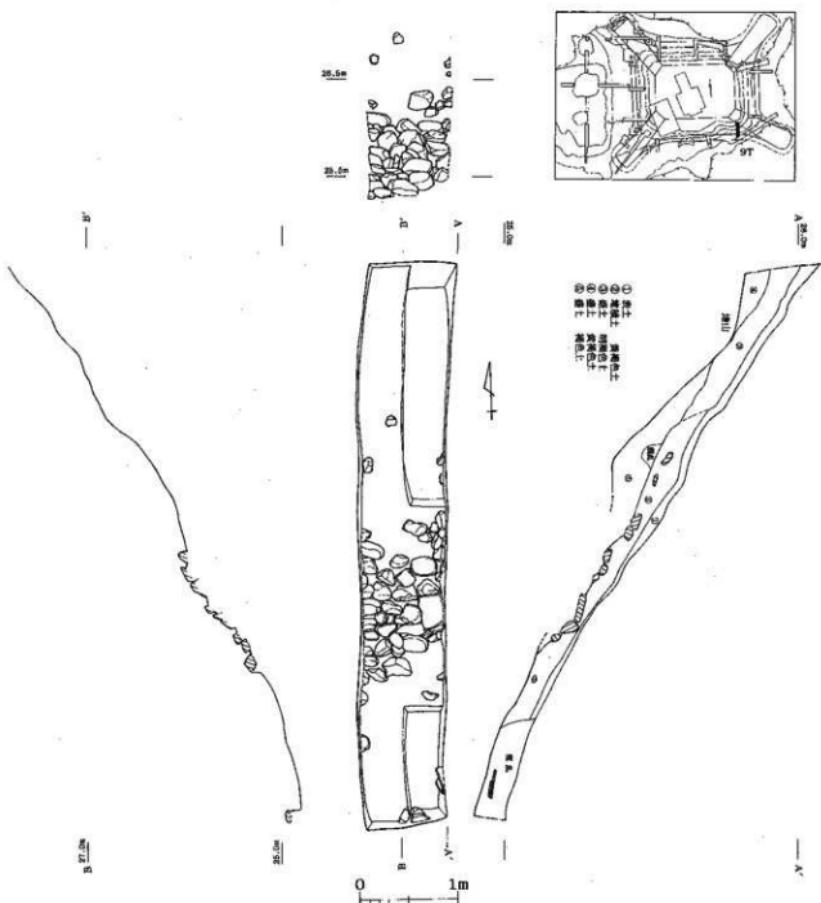


図86 9号墓9トレンチ (1:50)

## 12トレンチ (図87)

9号墓の南東突出部が大きく崩壊して10m以上の崖面になっていて、さらに墳丘が崩壊する可能性があるため、出雲市は崖面保護工事を実施している。その事前確認のため工事の影響が考えられる崖面から2mの部分を掘削した。調査の結果、突出部上面の貼石を確認した。墳丘築造方法は、地山を削り出した後、30cm程度の盛土をして整形し配石を行っている。

突出部上面の貼石の下には盛土が行われていて、旧地形は南東に向って斜面になっていたと考えられる。そして、墳端の敷石・立石は残っていないが、突出部上面の貼石が東よりに確認されていることや貼石が突出部に対し垂直に並べられていたと推定すると、突出部を築造しやすくするため、地形が平坦な東よりに突出部が築造されていると考えられる（図113）。

出土遺物は、①層及び②層から五輪塔、宝篋印塔が散乱して出土している。墳頂にあったものが廃棄されたと考えられる。

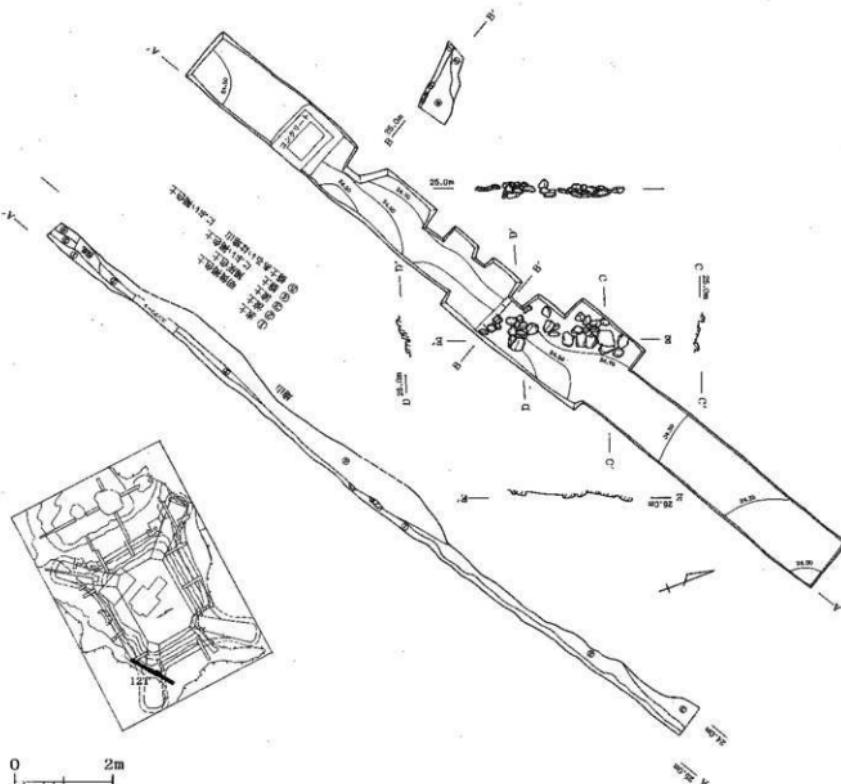


図87 9号墓12トレンチ (1 : 100)

## 8トレンチ (図88)

8トレンチは東端から南東突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石は崩壊していて配石や墳端に関連する情報を得ることはできなかった。ただ、南東突出部が東よりに築造されているため、東端から南東突出部に曲がる部分は急激に曲がっていると推定できる(図113)。

## 7トレンチ (図89)

7トレンチは東端の北東突出部よりの部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、配石はほとんど崩壊している状況であった。

## 13トレンチ (図90)

13トレンチは崖面保護工事の事前確認のため、工事の影響が考えられる崖面から2mの部分を掘削した。調査の結果、1段目と2段目の立石を確認した。3段目の立石は崩壊している。立石は北東突出部に向けて曲がりはじめている。流土から須恵器が出土した。

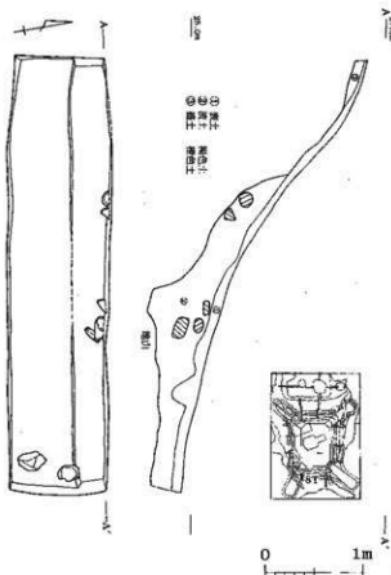


図88 9号墓8トレンチ (1:50)

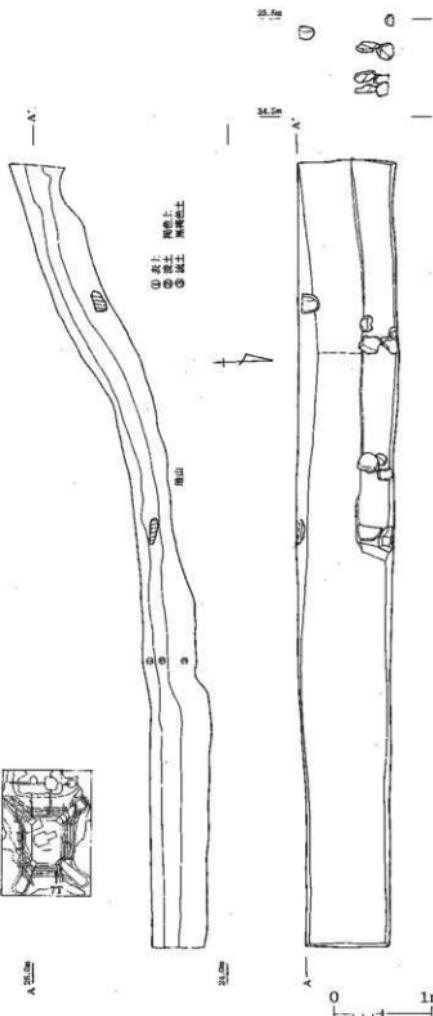


図89 9号墓7トレンチ (1:50)

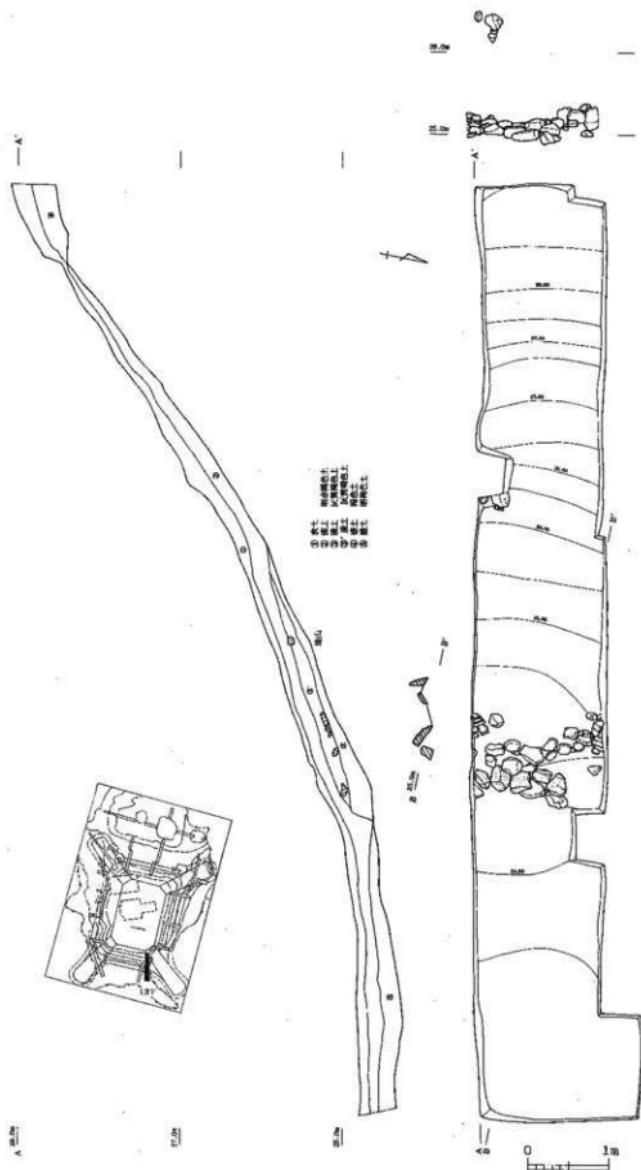


図90 9号墓13トレンチ (1 : 60)

## 6トレンチ及び14トレンチ（図91）

6トレンチは及び14トレンチは北端を確認する目的と、崖面保護工事の事前確認のため、工事の影響が考えられる崖面から2mの部分を掘削した。調査の結果、貼石、1段目と2段目の敷石・立石、3段目の敷石を確認した。3段目の立石は崩壊していたが、およその墳頂を確認できた。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に10cm程度の盛土を行い、配石をしている。墳頂に近い部分には50cm程度の盛土を確認した。

流土からは墳頂部からの転落と考えられる土器が出土している。

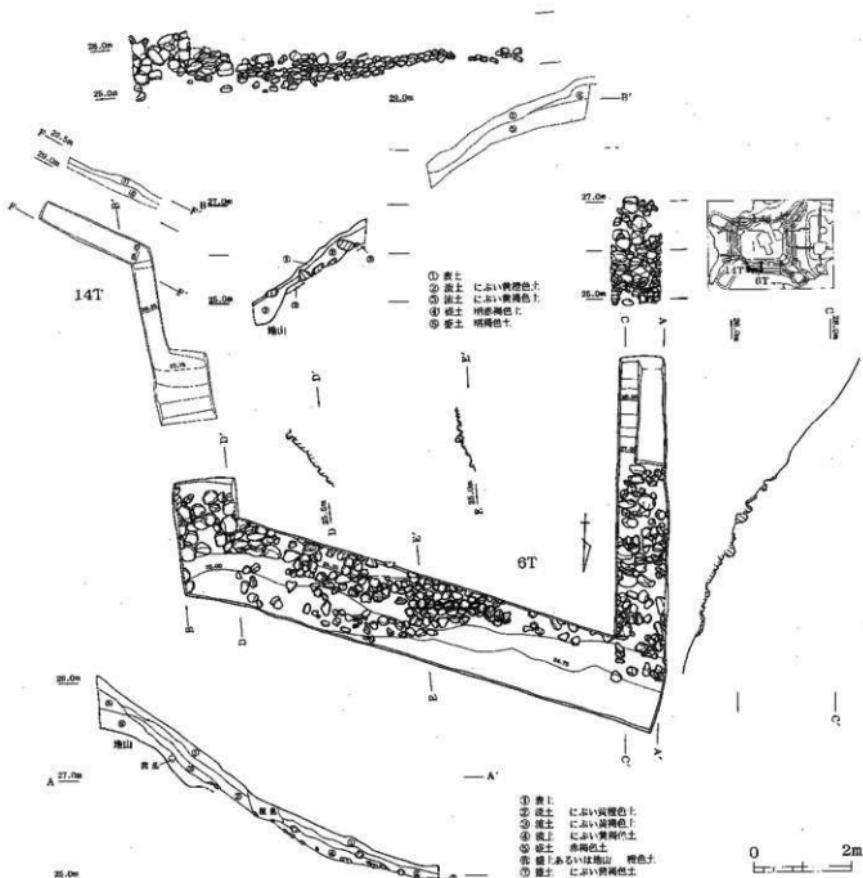


図91 9号基6・14トレンチ (1:60)

## 21トレンチ (図92)

21トレンチは北端の北西突出部よりの部分を確認する目的で掘削した。貼石、1段目と2段目の敷石・立石、3段目の敷石を確認した。3段目の立石は崩壊していたが、およその墳端を確認できた。3段の敷石・立石の幅は2mもあり広い。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に配石をしている。墳頂に近い部分には60cm程度の盛土を確認した。

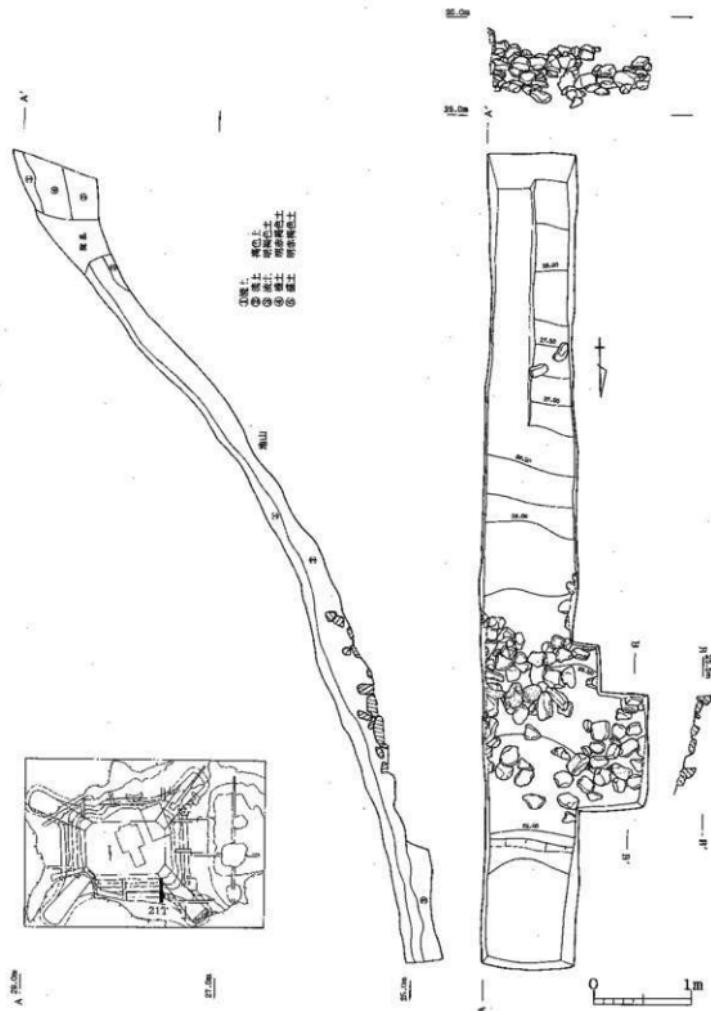


図92 9号墓21トレンチ (1:50)

## 28トレンチ（図93）

28トレンチは北端から北西突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、3段の敷石・立石から2段の敷石・立石へ変化する部分を確認した。1段目の敷石は1個確認できていたが、突出部に曲がっていくうちに敷石が無くなり、斜面の貼石と1段目の立石が接している。そして、1段目の立石も無くなり、斜面の貼石と2段目の敷石が接する状況がみられる。敷石・立石の幅は約2mと広い。

## 22トレンチ（図94）

22トレンチは北西突出部を確認するため、突出部をまたぐように掘削した。植林されているため突出部に対し垂直にトレンチを設定することはできなかった。調査の結果、北西突出部の北側の墳端と西側の墳端を確認した。どちらも2段の敷石・立石構造である。北側の3段目の立石は残っていないようであるが、西側は残っていた。斜面の貼石も確認しているが、突出部上面は削平されている。

突出部の中間部分での幅は約9mである。突出部は先端に向って徐々に広がっているため、先端の幅は約10mと推定している（図113）。

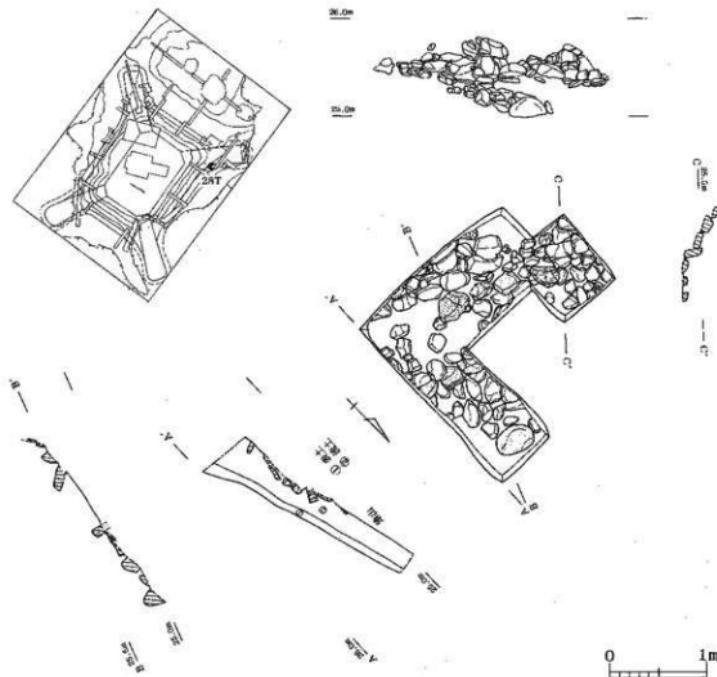


図93 9号墓28トレンチ (1:50)

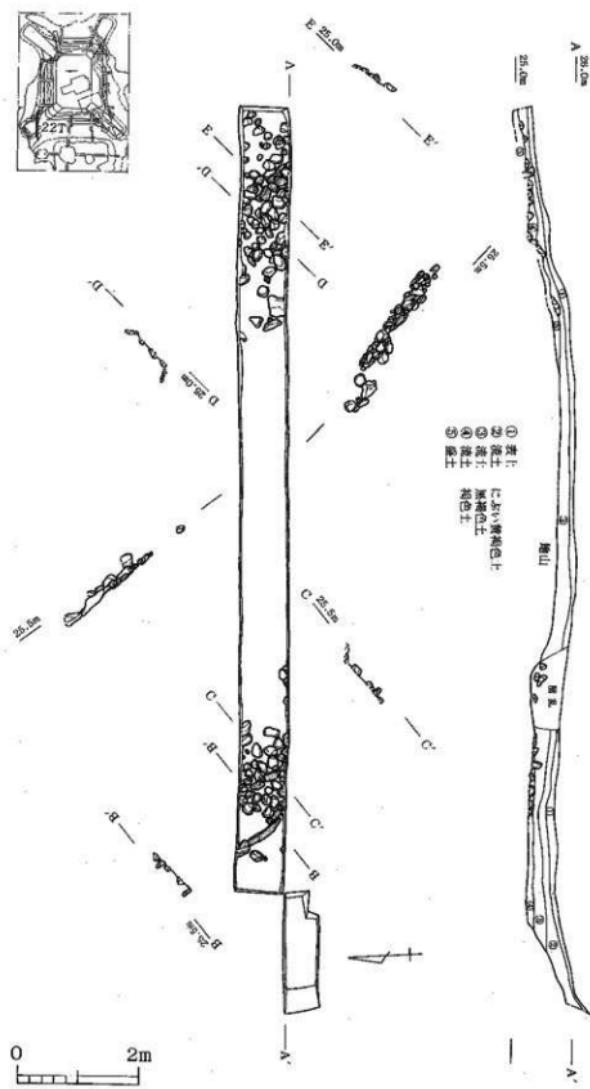


図94 9号墓22トレンチ (1 : 80)

## 25トレンチ (図95)

25トレンチは北西突出部の北側の部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、斜面の貼石とそれに接する2段目の敷石を確認した。その他は崩壊している。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に10cm程度の盛土を行い、配石をしている。

## 16トレンチ (図96)

16トレンチは北西突出部の先端を確認する目的で掘削したが、崩壊していた。

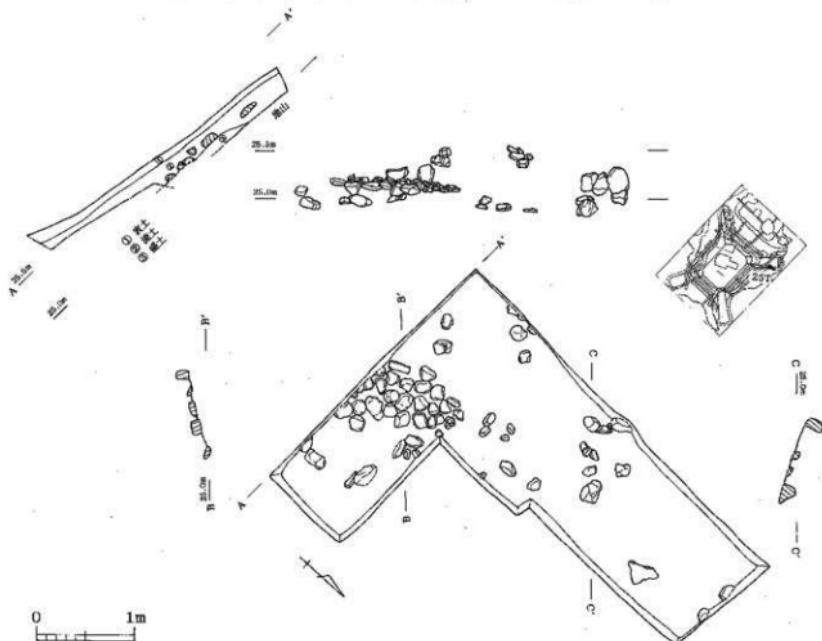


図95 9号墓25トレンチ (1:50)

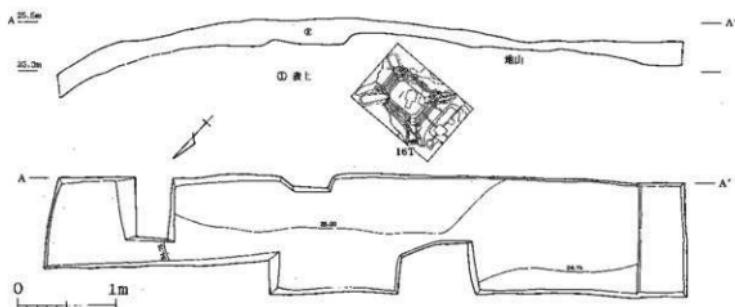


図96 9号墓16トレンチ (1:50)

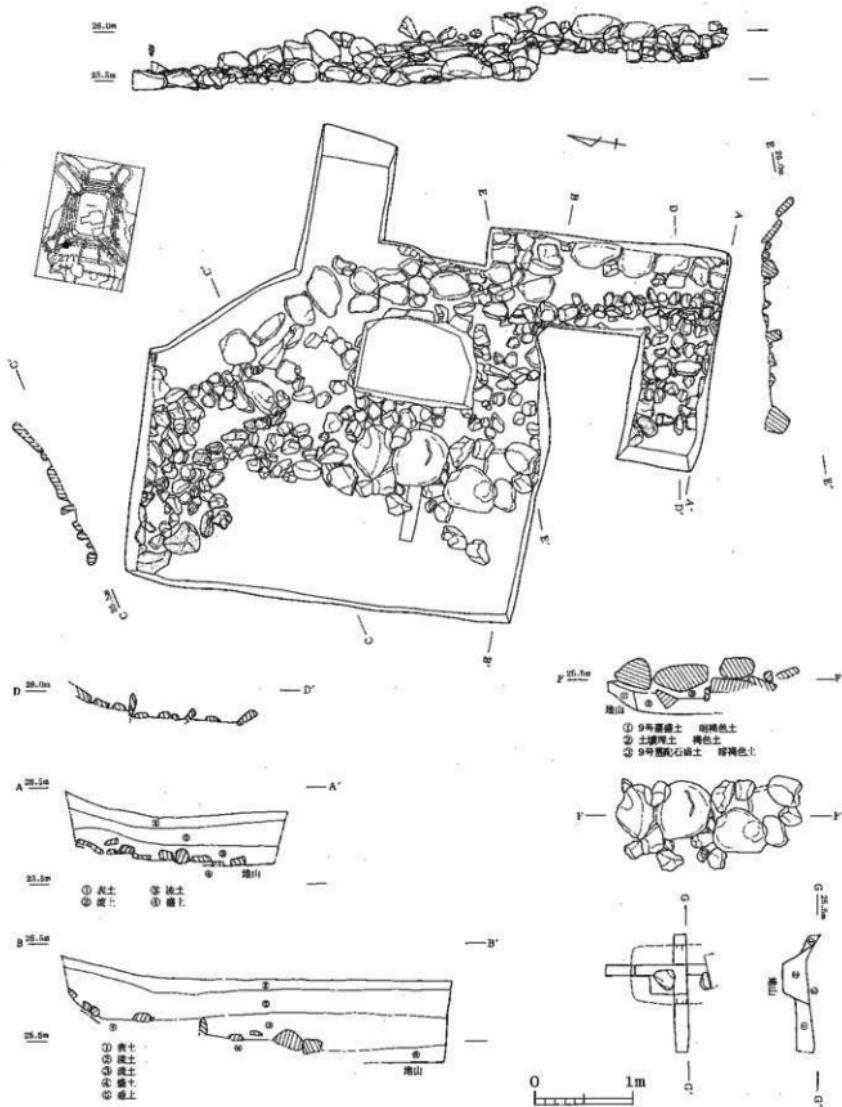


図97 9号墓27トレンチ (1:80)

## 27トレンチ (図97)

27トレンチは西端から北西突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、3段の敷石・立石から2段の敷石・立石へ変化する部分を確認した。1段目の敷石は1個確認できていたが、突出部に曲がっていくうちに敷石が無くなり、斜面の貼石と1段目の立石が接している。そして、1段目の立石も無くなり、斜面の貼石と2段目の敷石が接する状況がみられる。敷石・立石の幅は約1.5mで北辺と比べて50cm狭い。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に10cm程度の盛土を行い、配石をしている。

3段目の敷石・立石を壊して、配石墓を確認した。長軸1.9m以上、短軸0.8mを測り、50cm程度の大きな石を南北に並べ、20cm程度の石が散乱している。配石の下に深さ20cmの浅い土壌を確認した。この遺構は土壌が浅いのが気になるが、9号墓に近い時期に造られた周辺埋葬と考えられる。

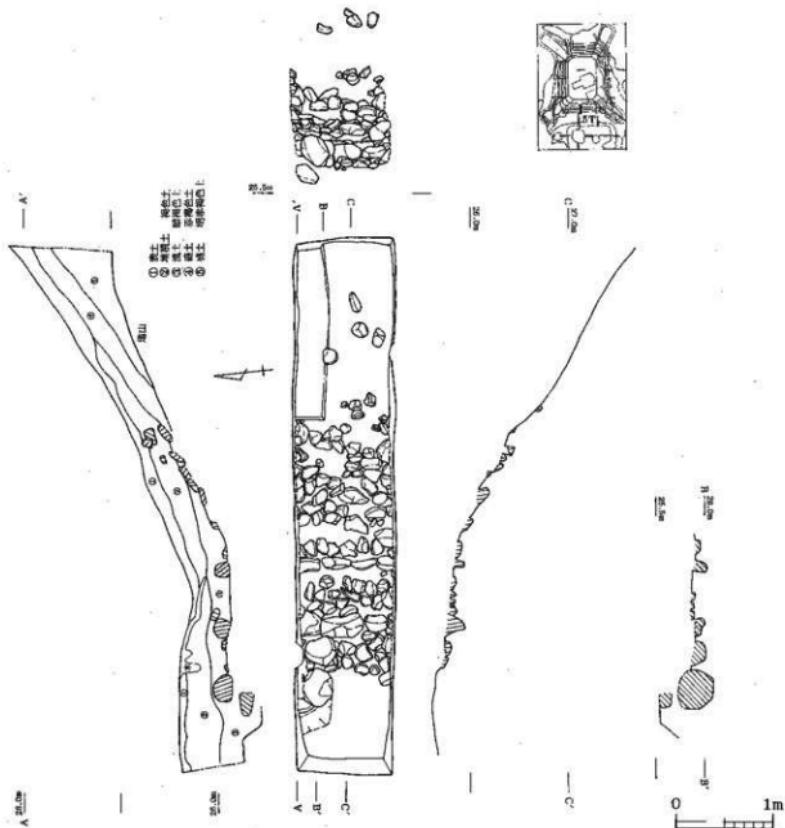


図98 9号墓5トレンチ (1:50)

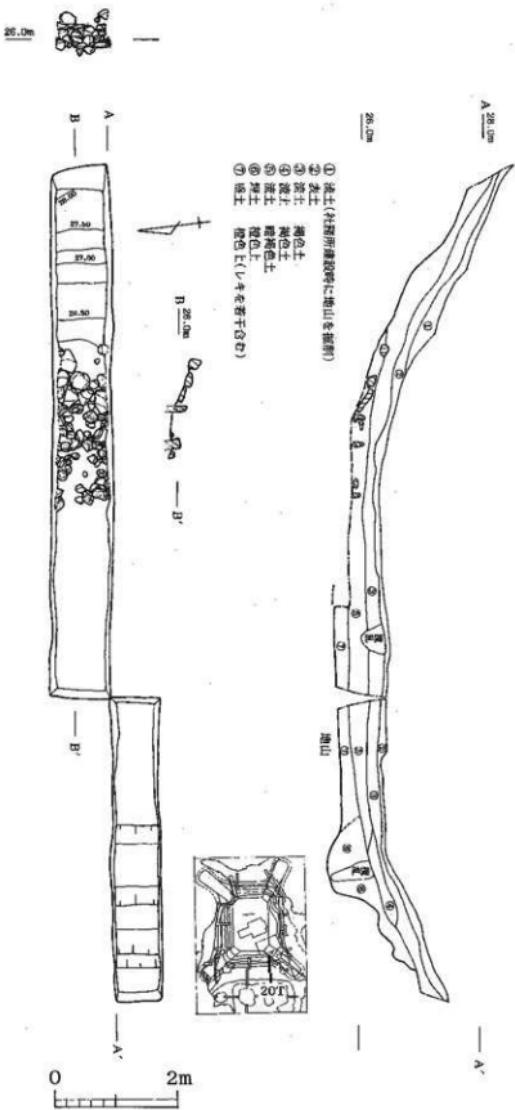


図99 9号墓20トレンチ (1:80)

## 5 トレンチ (図98)

5 トレンチは、西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、斜面の貼石、1段目と2段目の敷石・立石、3段目の敷石を確認した。3段目の立石は崩壊していたがおよその墳壙を確認した。1段目の敷石は1個で狭い。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に盛土を行い、配石をしている。墳頂近くでは80cm程度の盛土を行っている。

流土からは墳頂から転落したと考えられる土器が出土している。

3段目の敷石・立石を壊した別の遺構を確認した。27トレンチの配石墓と同じ性格の可能性があるが、植林があり拡張できなかったため詳細は不明である。

## 20 トレンチ (図99)

20 トレンチは西端の南西突出部よりの部分を確認する目的と、西側の丘陵との関係を確認する目的で掘削した。調査の結果、斜面の貼石、1段目の立石、2段目の敷石・立石、3段目の敷石を確認した。既に1段目の敷石は無くなっていて、斜面の貼石に1段目の立石が接している。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に15cm程度の盛土を行い、配石をしている。

西側の丘陵に立ち上がる部分で南北に走る溝を確認した。9号墓の墳丘面と同じ面から掘り込まれていて近い時期の遺構と考えられるが、9号との関係は不明である。

## 24トレンチ (図100)

24トレンチは西端から南西突出部に曲がる部分を確認する目的で掘削した。調査の結果、貼石、1段目の立石、2段目と3段目の敷石・立石を確認した。そして、南西突出部に向うにつれ、1段目の立石が無くなり、2段目の敷石が斜面の貼石に接している。3段から2段へ変化する部分である。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に20cm程度の盛土を行い、配石をしている。

## 19トレンチ (図101)

19トレンチは、南西突出部の上面と先端を確認する目的で掘削した。調査の結果、突出部上面の貼石を検出した。貼石はやや乱れているが突出部上面が一部であるが残存することがわかった。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に5cm程度の盛土を行い、配石をしている。突出部先端は崩壊していて確認できなかった。突出部先端付近では性格不明の土坑SX01~03の3基を確認している。

## 26トレンチ (図102)

26トレンチは南西突出部の西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、2段目の立石、3段目の敷石・立石を確認した。墳丘築造方法は地山を削り出した後に10cm程度の盛土を行い配石している。

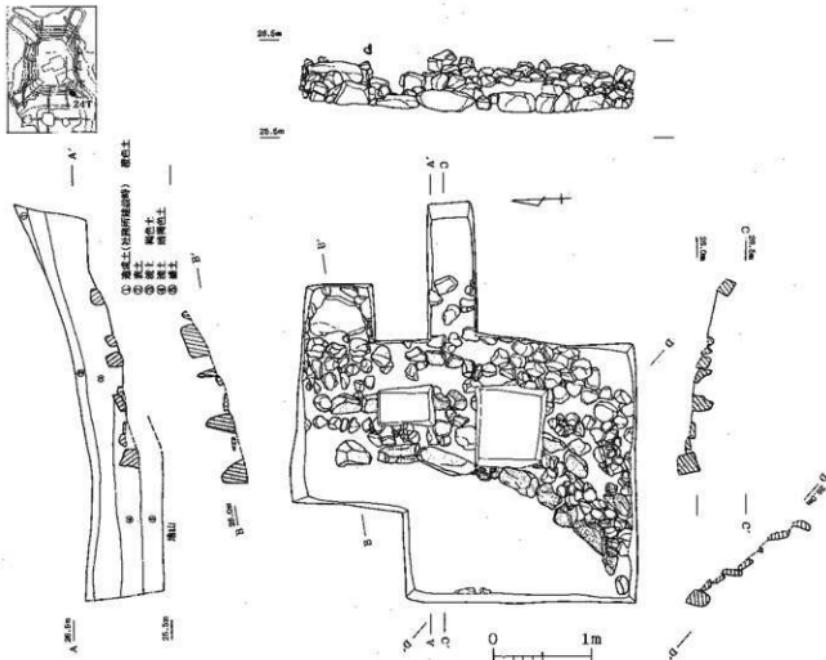


図100 9号墓24トレンチ (1:50)

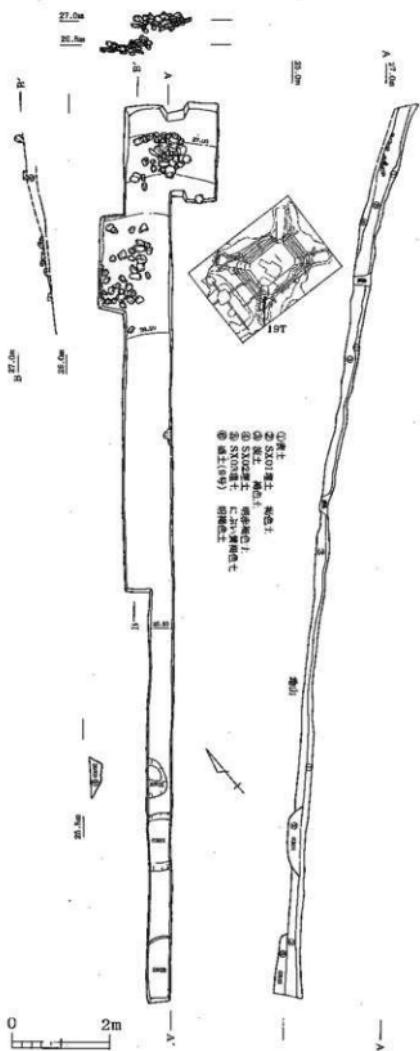


図101 9号墓19トレンチ (1:100)

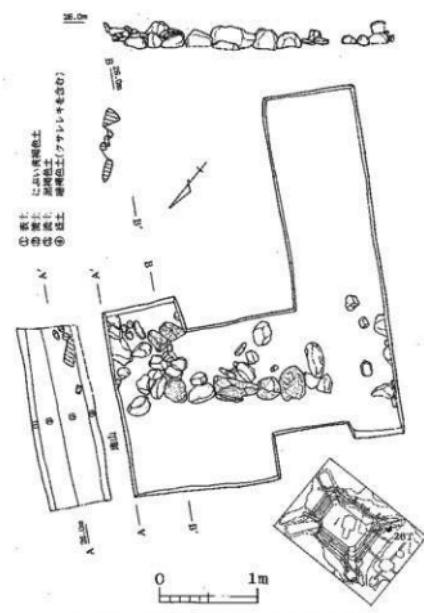


図102 9号墓26トレンチ (1:50)

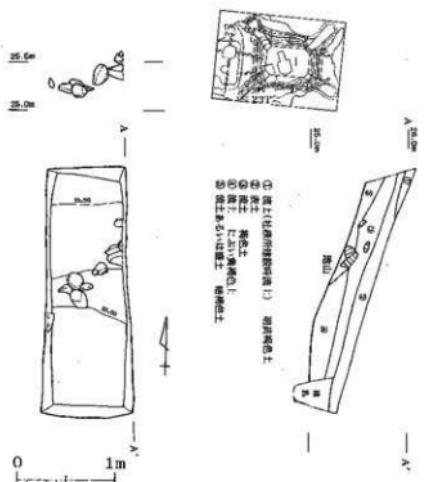


図103 9号墓23トレンチ (1:50)

### 23トレンチ（図103）

23トレンチは南西突出部の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、配石はほとんど崩壊していて詳細は不明である。

### 6. 出土遺物（図104）

図104は今回出土した遺物と表採された遺物を掲載した。いずれも元位置を留めていないもので流土および表土から出土したものである。104-1・2・4・6は15トレンチ、104-3・5は5トレンチ、104-7・8は17トレンチ、104-9は13トレンチ、104-12~21は12トレンチから出土している。

104-1と2は鼓形器台の破片である。104-1は器受部の破片である。104-2は筒部から脚部の破片で、筒部は「く」字状に屈曲する。

104-3と4は低脚壺の破片である。104-3は壺部から接合部の破片で、口径11.4cmを測る。104-4は接合部から脚部の破片で、脚端部は外方に引き出されている。脚径5.4cm、脚高1.8cmを測る。

104-5と6は高壺の破片である。104-5は円盤充填部分がはがれたもので、外面には刺突痕がある。104-6は脚部片である。

104-7は壺の底部片で、くびれ立上がり平底をなす。器壁は最大で2cmあり厚い。

104-8は器台の器受部の破片で、口径14.4cmを測る。口縁先端を欠いているが、ほとんど伸びないと考えられる。口縁部外面には擬凹線が施してある。在地の器形ではないが、作りは鼓形器台によく似ていて、胎土は在地のものである。

104-9は須恵器の底部片で、底径5.6cmを測る。底部の外面にはヘラ記号がある。

104-10と11は樋野真司氏が2005年に表採した土器である。104-10は墳頂で表採したもので、鼓形器台の器受部から筒部にかけての破片である。筒部は短く「く」字状に屈曲する。

104-11は胴部片で、1条の突帯が巡る。胎土は在地のものではなく搬入品と考えられる。小片であるため詳細は不明である。

104-1~11（104-9を除く）は西谷9号墓に伴う遺物と考えられる。時期は草田5期頃と考えられ、弥生時代終末の新段階と考えられる。土器は草田5期頃と考えられるが、今まで考えられていた時期よりはやや古い特徴を持つ土器が今回出土していることから、終末期の新段階でも古い時期であると考えられる。しかし、小片ばかりで、また、埋葬施設を調査していないので時期を確定することは難しい。

104-12~15・17・19は五輪塔である。104-12~15は空風輪である。104-17は地輪で底部に丁寧な掘り込みがある。104-19は水輪で1/2は欠損している。

104-16・20・21は宝篋印塔である。104-16は笠の下部段丘の部分で、笠はすべて欠損している。

104-20は相輪の九輪部分で先端は欠損している。104-21も相輪の九輪部分と考えられるが、磨滅が激しく九輪が確認できない。

104-18は石塔の一部と考えられるが、詳細は不明である。

以上の石塔はすべて軽石凝灰岩で、時期は戦国時代頃と考えられる。

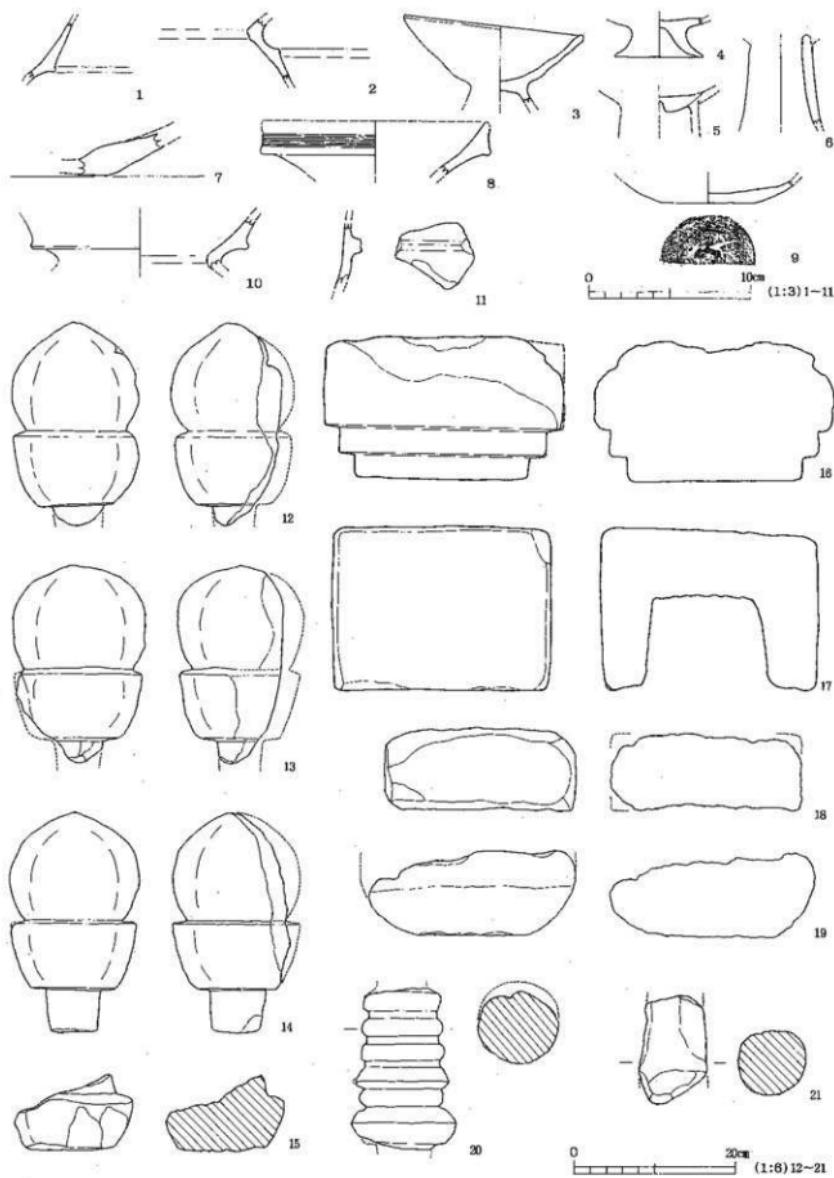


图104 9号墓出土遗物

## 7. 西谷9号墓の調査成果

西谷9号墓は南北35m、東西43m、高さ5m、突出部を含めると60m以上の大型の四隅突出型墳丘墓で、時期は弥生終末期の新段階墳である（図113）。規模は四隅突出型墳丘墓の中でも最大級である。墳丘の築造方法は、地山を削り出した後に部分的に10~20cmの盛土を行い、配石をしている。墳頂部は50cm程度の盛土を行っている。墳端の標高は25m~26mで約1mの差がある。

墳端の配石構造は、方丘部が3段で突出部が2段であることがわかった。重要な点は四隅突出型墳丘墓の中で3段構造をもつものは9号墓のみであることである。最近の研究では大型の四隅突出型墳丘墓に2段の配石が採用され、小型の四隅突出型墳丘墓には2段の配石は採用されないことがわかっていて、配石構造の差に階層差があると指摘されている<sup>(1)</sup>。このことから、段数が多い9号墓は、規模の大きさも含め他の四隅突出型墳丘墓と格差を感じができる。そして、段数が多いことでより墳丘を飾る意識が高いと考えられる。さらに興味深いことは、方丘部から突出部に曲がる部分で配石構造が3段から2段の敷石・立石に変化することである。その変化する部分を北西突出部の2ヶ所及び南西突出部の1ヶ所で確認している。他の北東・南東突出部も同じ構造をしていると考えられる。このように段数が変化する四隅突出型墳丘墓は西谷9号墓のみである。以上の墳丘配石の面からすると、西谷9号墓と他の四隅突出型墳丘墓との格差が感じられ、特別な被葬者であったと考えられる。

突出部の形態は、方丘部から突出部に曲がる部分の幅が狭く、突出部先端に向かって徐々に広がることが北西突出部の調査で推定できる。詳細すれば、突出部幅約9mから徐々に広がり突出部先端では幅約10m程度になると推定できる。

南東突出部はやや東よりに築造されていると推定した。これは、本来突出部を築造する場所が斜面であるため突出部を築造することが困難であったと考えられる。そのため、突出部を築造しやすい平坦面が東側にあることから、南東突出部を東よりに築造したと考えられる。

出土土器は、元位置を留めているものはない。在地土器は鼓形器台、高壺、低脚壺が出土していて草田5期頃と考えられる。編年上有効な壺の口縁部などが出土していないため時期の確定は難しい。

(1) 松本岩雄2003「第1節 出雲の四隅突出型墓」『吉山古墳群の研究』島根県古代文化センター

## 第9節 西谷18号墓・19号墓・20号墓の調査

### 1. 墳丘の現状

西谷18号墓・19号墓・20号墓は西谷9号墓の西側に位置し、南北に北から18号墓、19号墓、20号墓と並んでいる。西側は9号墓の墳端面から約3mの比高差の斜面があり、東側はなだらかな斜面になっている。18号墓の北側及び西側は崩壊し崖面となっている。

### 2. 過去の調査

西谷18号墓・19号墓・20号墓の発見は島根大学考古学研究室が西谷9号墓の測量を実施した頃で、報告書では北から7m四方、東西14m×南北12m、東西13m×10mほどのマウンドがあると指摘されている。後に出雲市教育委員会により墳墓名が付けられている。島根大学考古学研究室の測量以来考古学調査はなされていない。2000年には西谷9号墓と併せて国史跡となっている。

### 3. 各トレンチの調査

#### 10トレンチ (図105)

10トレンチは18号墓の北側の墳丘を確認する目的で掘削した。調査の結果、墳丘築造方法は旧表土に約50cmの盛土をして墳丘を築造していることがわかった。墳端は崩壊しているが、墳端部は不明である。

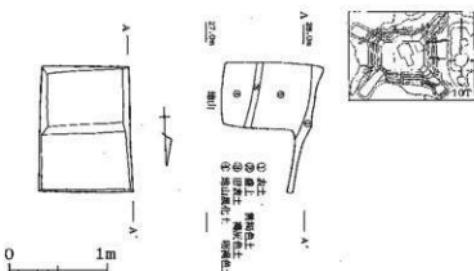


図105 18号墓10トレンチ (1 : 50)

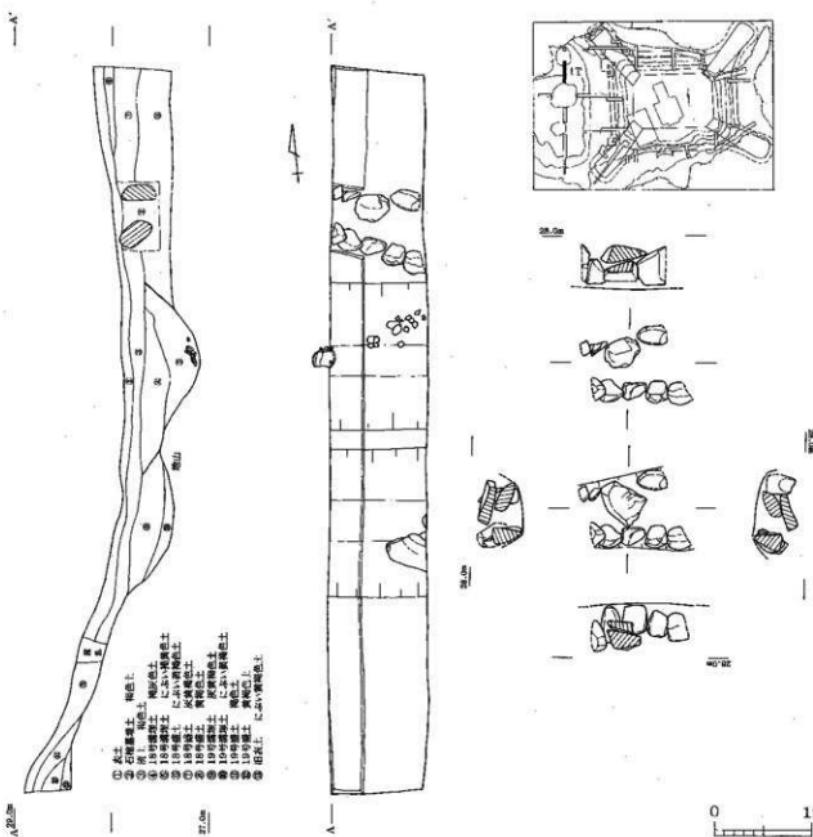


図106 18・19号墓1トレンチ (1 : 50)

## 1 トレンチ (図106)

1 トレンチは18号墓の南端と19号墓の北端を確認する目的で掘削した。調査の結果、18号墓を区画する東西にはしる溝及び19号墓を区画する東西に走る溝を確認した。これらの溝は切りあっていて、18号墓の溝が19号の溝を切っている。よって、18号墓が19号墓より新しいと考えられる。

18号墓の溝の底から土器が2点(図107)出土している。2点とも甕で、107-1は複合口縁がかなり退化したもので曖昧にその名残がある。口径約13.8cmを測る。胴部外面には粗いハケメ、内面には削りが施してある。107-2は口縁が「く」字状をなすもので、口径約18cmを測る。口縁端部は斜め上方に引き出され、内面側が面をなす。胴部外面には粗いハケメ、内面には削りが施してある。土器は小谷4式あるいは大東式と考えられ、18号墓は古墳時代前期末～中期初頭頃と考えられる。

18号墓の南側斜面で、墳丘面から掘り込まれた箱式石棺を確認した。18号墓の斜面に造られているため18号墓に関連する遺構かどうかは不明である。蓋石が1個しかなく崩壊しているのであろう。

19号墓は旧表土の上に盛土をして墳丘を築造している。

## 2 トレンチ (図108)

2 トレンチは19号の南端と20号墓の北端を確認する目的で掘削した。調査の結果、東西に走る溝を確認した。この溝がどちらの墳墓に伴うものかは不明である。ただ、どちらの墳墓の墳端もおよそこの付近にあるのは間違いないと考えられる。墳丘はどちらも削平されているようである。

## 4 トレンチ (図109)

4 トレンチは19号墓の西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、南北に走る区画溝を確認した。また、墳丘築造方法は旧表土に約25cmの盛土をして墳丘を築造していることがわかった。

## 11 トレンチ (図110・111)

11 トレンチは19号の東端を確認する目的で掘削した。調査の結果、旧表土の上に40cm程度の盛土をして墳丘を築造していることがわかった。墳端については不明である。斜面と平坦面の境に南北に走る幅2.4m、深さ1mの溝を確認した。これは前節の9号墓の20トレンチに繋がると考えられる。また、次ページで説明する3トレンチの南側の溝と規模、深さがほぼ同じで、これらの溝は同じ性格をもつと考えられる。これらの溝は20号墓、19号墓のある丘陵に沿っているため、墳墓と何らかの関係があると考えられるが詳細は不明である。9号墓の22トレンチ付近にはこの溝はない。

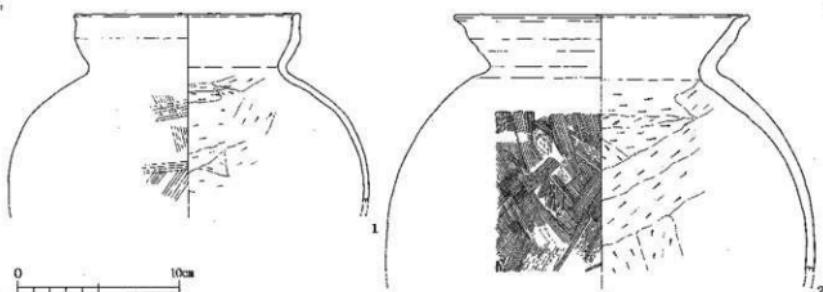


図107 18号墓出土土器 (1:3)

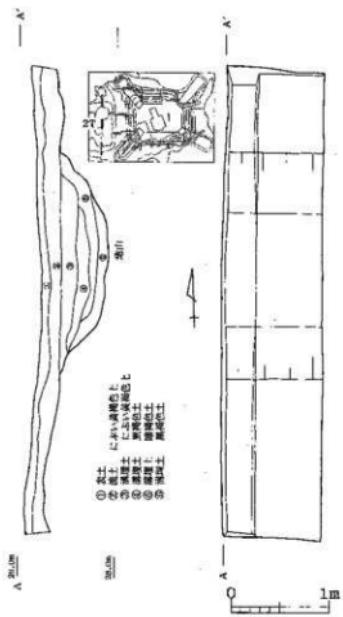


図108 19・20号墓2トレンチ (1:50)

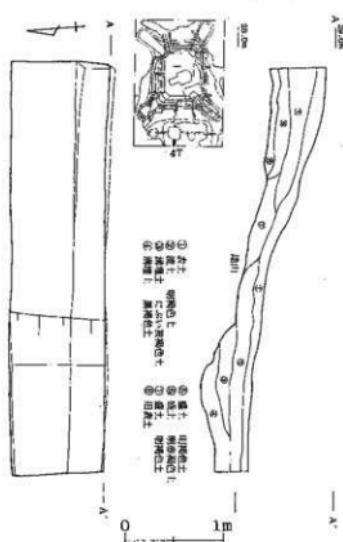


図109 19号墓4トレンチ (1:50)

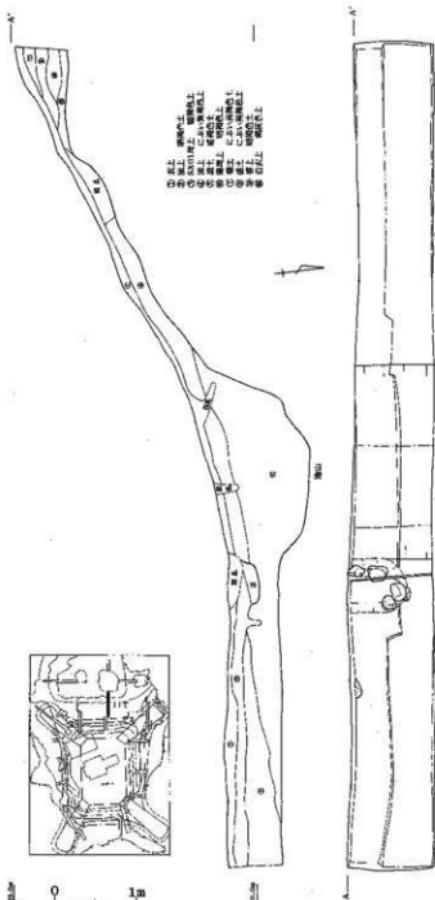


図110 9号墓11トレンチ (1:60)

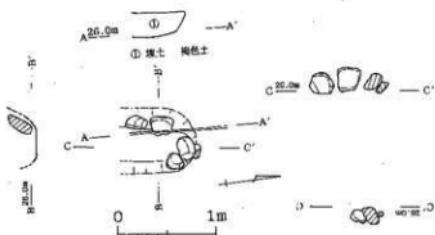


図111 11トレンチ箱式石棺 (1:50)

### 11 トレンチ箱式石棺（図111）

11トレンチの19号墓東斜面の変換点で、破壊された箱式石棺と考えられる遺構を確認した。20~30cmの小型の河原石を幅約70cm、深さ約25cmの土壙に並べられていて、蓋石はなく壊れている状況である。遺構は溝が埋まった後に掘り込まれているが、詳細な時期は不明である。

### 3 トレンチ（図111）

3トレンチは20号墓の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、北側と南側で東西に走る溝状の落ち込みを確認した。また、北側から10mにわたり旧表土の上に約40cmの盛土を確認した。北側の落ち込みはこの盛土に掘り込まれていて、20号墓を区画する溝とは考えにくい。南側の溝は旧表土から掘り込まれていて幅2.4m、深さ1mの規模で11トレンチ及び9号墓の20トレンチと同じ性格であると思われる。現状の調査では詳細な性格は不明である。

### 4、西谷18・19・20号墓の調査成果

西谷18号墓及び19号墓は旧表土の上に盛土をして整形していることがわかった。18号墓は南端を確認し、地形などから約9m、高さ約1mの方墳でと考えられる。時期は古墳時代前期末～中期初頭頃と考えられる。

19号墓は約13m四方、高さ約2mの方墳である。詳細な時期は不明であるが、溝の切り合いから18号墓より新しいと考えられる。

20号墓は、旧表土の上に盛土を行っていることを確認したが、確実に埴墓と関係する遺構を検出できなかった。

また、3箇所で確認した大型の溝の性格は不明であり、今後調査していく課題である。

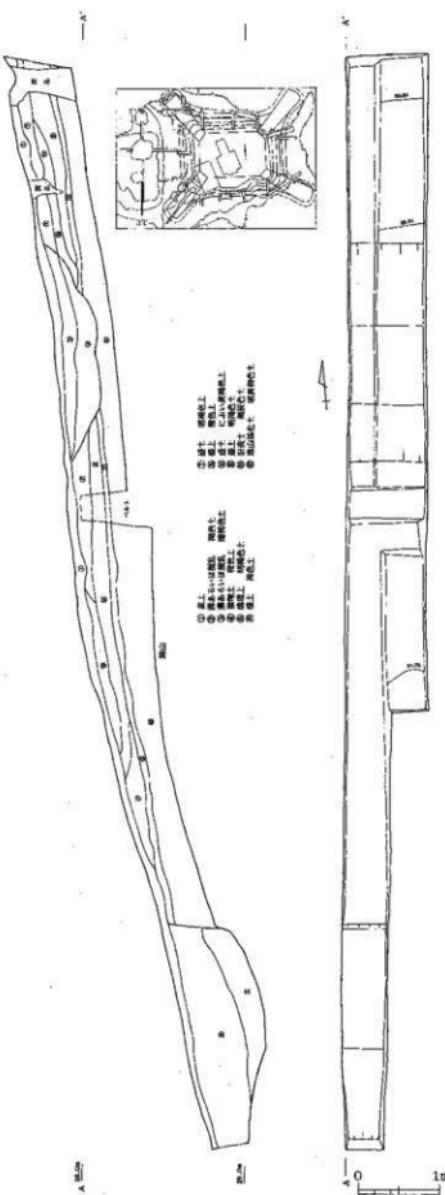


図112 20号墓3トレンチ (1:60)

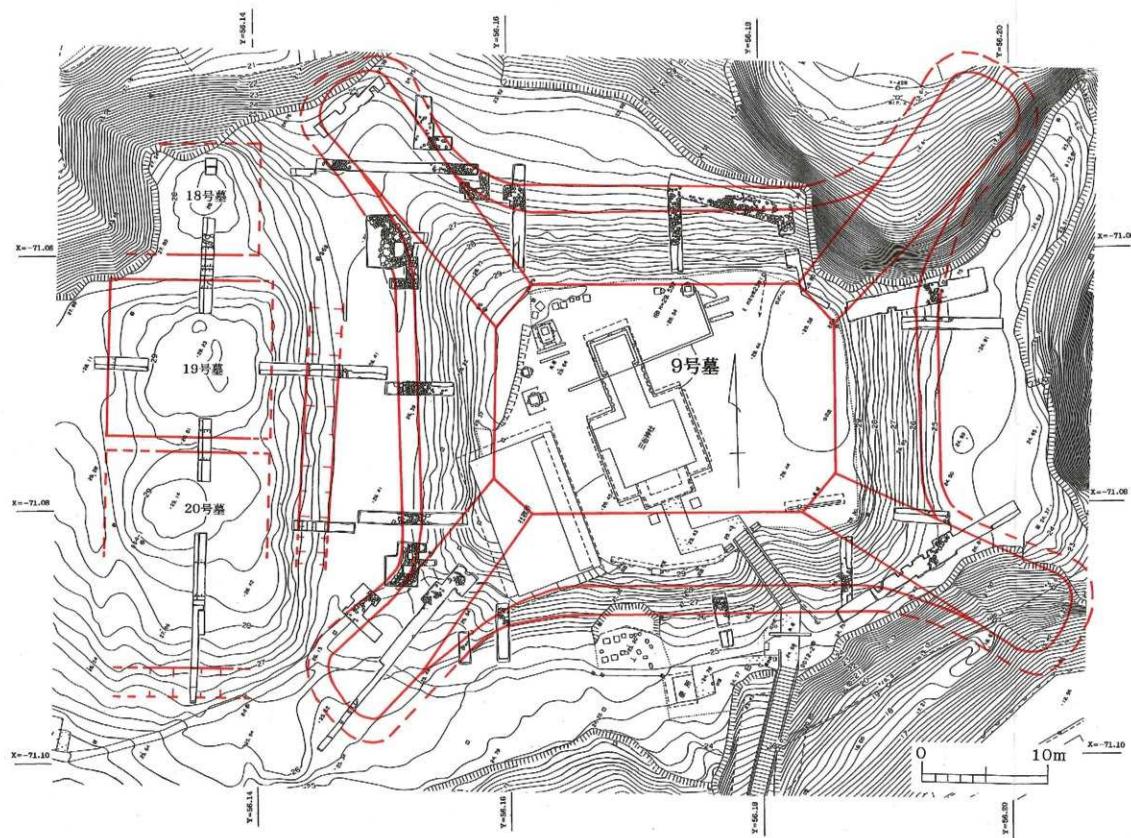


图113 9号·18号·19号·20号墓复元图

## 第10節 西谷7号墓の調査

### 1. 墳丘の現状（図115）

西谷7号墓は1～6号墓が立地する丘陵と谷を挟んで東側の丘陵最高所、標高49mに立地する。墳形は東西を長軸とした長方形のマウンドがあり、その南にも標高を下げた前方部のような平坦面がある。前方後方形あるいは長方形の墳墓である。

現況は山林で、墳墓の南側には丘陵をきって農道が走っている。また、長方形部と前方部の境に山道が南北に走っている。

### 2. 過去の調査

西谷7号墓の発見は、1975年の島根県教育委員会による分布調査時である。その後、1977年に出雲考古学研究会により実測が行われ、1980年に前方後方形墓として報告されている。

1997年には出雲市教育委員会により詳細測量、1998年には墳形、主体部の調査が実施されている。調査の結果、前方後方形としてする根拠が得られなかつたため長方墳として報告されている。規模は東西約22m、南北17.5m、高さ1～2mで、葺石はない。時期は出土土器から古墳時代前期と考えられる。墳頂の中心部では埋葬施設の第1主体、第2主体の2基を確認している。第1主体は長方墳の中心にあり南北を主軸とする。埋土上面には土器が散乱し、また、土壇埋土の中央で標石が出土している。これらは弥生時代の四隅突出型墳丘墓などによくみられる状況であり、古墳時代になっても弥生時代の葬送儀礼及び後片付けを継続していると考えられる。

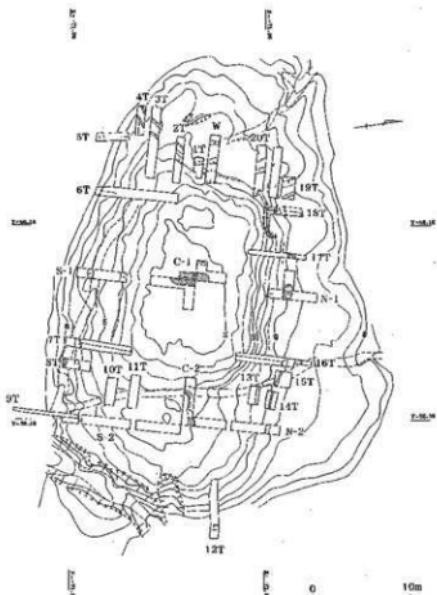


図114 7号墓トレンチ配置図（1:500）

2004年には藤田憲司氏が出雲地方の古墳時代前期の方墳の測量図から、隅のコンターラインが乱れていて、突出部をもつ可能性がある方墳を数例指摘している。その中に西谷7号墓もあげられている<sup>(1)</sup>。

(1) 藤田憲司2003「四隅突出型丘墓と前方後方墳」「山陰弥生遺跡めぐりアーガイド研究講座資料」山陰遺跡ネットワーク会議

### 3. トレンチの設定（図114）

1998年の調査はアルファベットでトレンチ名が付けてある。今回はそれと区別するため、数字でトレンチ名を付けている。今回の調査は、墳形を確認する目的で墳端部分に2ヶ所のトレンチを設定した。

上記の藤田憲司氏の指摘もあり、今回は長方形墳の隅の部分を中心にトレンチを設定している。

## 4. 各トレンチの調査

1T・2T・3T・4T (図117)

1トレンチ～4トレンチは西端の南側を確認する目的で掘削した。調査の結果、西端から南西へ向う幅1m～1.4mの溝を検出した。この溝は南西突出部を区画する西側部分と考えられる。そして、この溝は北西突出部の西側まで続いている、それぞれの突出部に向う部分でくびれていることがわかる。

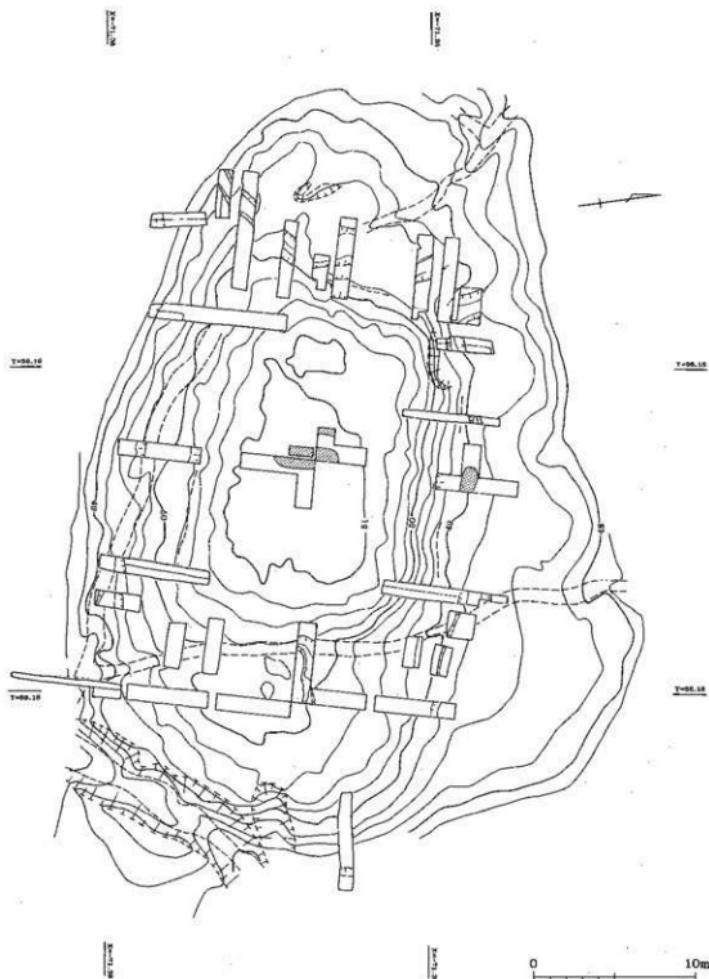
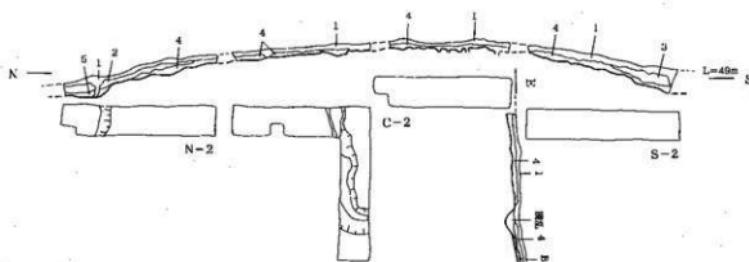
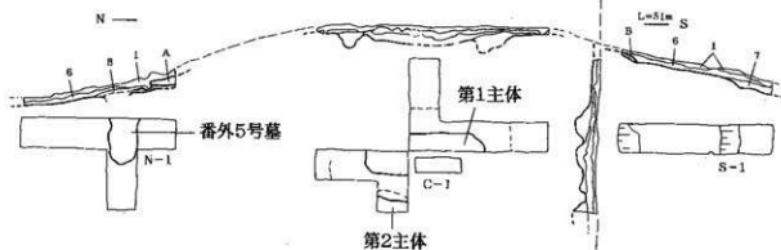


図115 7号墓調査後測量図 (1:300)



※C-1トレンチ土層については127図参照



1. 表土
2. 黄褐色土
3. 明褐色土
4. 暗褐色～褐色土
5. 明赤褐色
6. 褐色土
7. 黄褐色土
8. 暗褐色土
9. 赤褐色土（溝状落ち込み埋土）
10. 緋赤褐色土

- A. 反褐色土（盛土？）
- B. 黄褐色土（ややしまった土・盛土）
- C. 明赤褐色土（盛土）

0 8m

図116 7号墓トレンチ実測図 (1 : 160)

墳丘築造方法は、地山を削り出した後に盛土をして墳丘を整形している。貼石がないだけで、西谷の四隅突出型墳丘墓と築造方法は同じである。この溝の埋土は橙色土および明褐色土で腐植した色をしていないが、墳丘の斜面の盛土が墳丘築造後早い段階で崩れ埋まったと考えられる。問題となるのは、長方形墳の西端と溝までの間が現状で幅約1mのテラス状になっていることである。このテラスが元々あったものかは不明で、斜面がカットされて現状のようなテラスがあるのかもしれない。復元図(図129)は現状をもとに作成している。

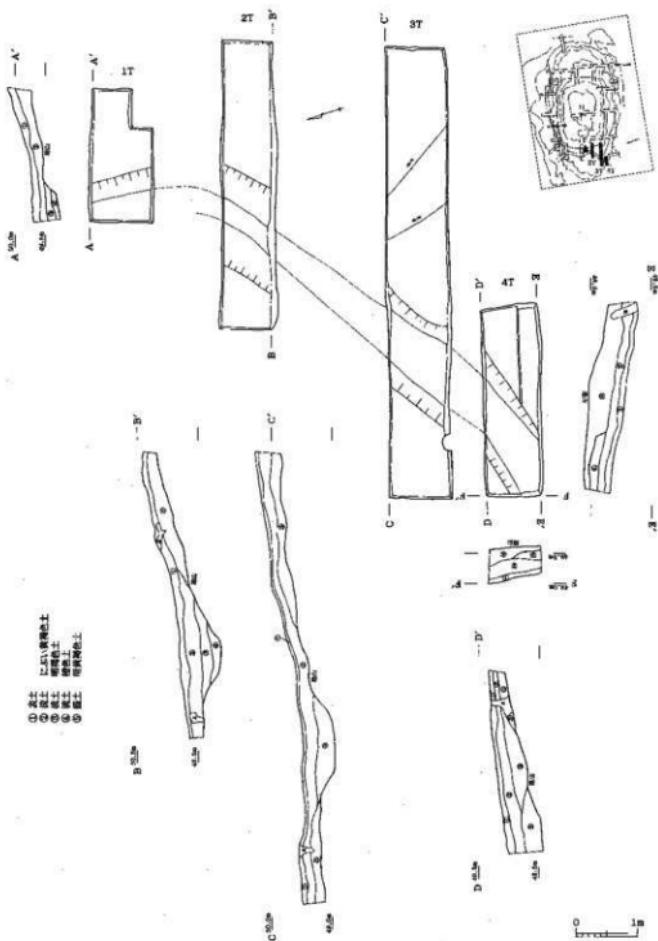


図117 7号墓1・2・3・4トレンチ (1:80)

### 5トレンチ (図118)

5トレンチは南西突出部の南側を確認する目的で掘削した。5トレンチ付近は現状で斜面が地すべりしている可能性も考えられる。調査の結果、地山を掘り込んだ浅い溝を検出した。この溝が南西突出部の南側を区画する溝と考えられる。ただ、南側の墳端形成は曖昧で、明確な溝を掘削していないと考えられる。

### 6トレンチ (図119)

6トレンチは長方墳の南西の隅を確認する目的で掘削した。調査の結果、トレンチの南の標高48.5m付近で地山の傾斜変換点を確認したが、明瞭ではない。

### 7トレンチ・8トレンチ (図120)

7トレンチ及び8トレンチは長方形墳の南東の隅を確認する目的で掘削した。調査の結果、トレンチの南で幅約1.6mの溝を確認した。溝は、長方墳を区画するだけではなく前方部も区画していることがわかった。また、溝は7トレンチから8トレンチにかけて墳丘に対して斜めになっていて、長方形墳が丸みをおびているためと考えられる。

墳丘築造方法は、地山を削り出し、墳頂近くは盛土をして墳丘を整形している。

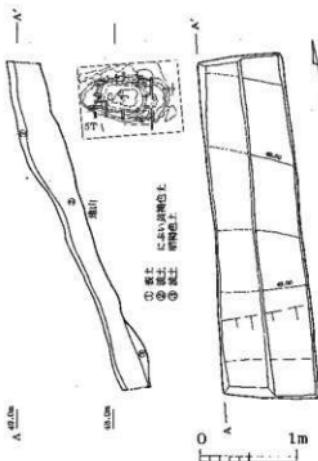


図118 7号墓5トレンチ (1:50)

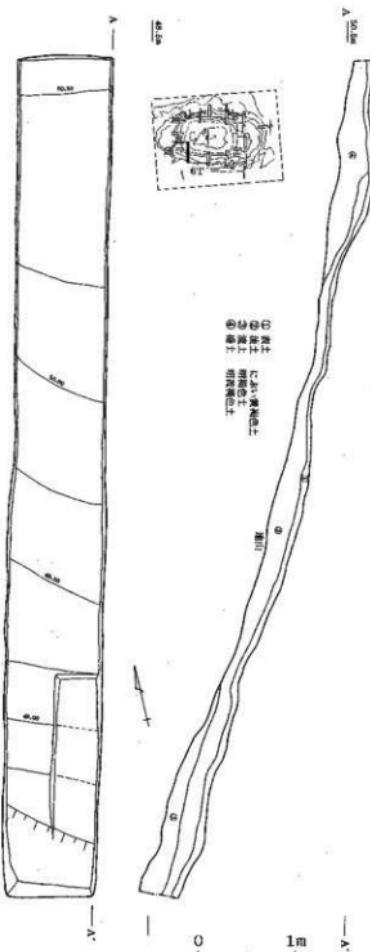


図119 7号墓6トレンチ (1:50)

## 9トレンチ・S-2トレンチ（図121）

9トレンチは8トレンチから続く溝を検出する目的で掘削した。調査の結果、約50cmの厚い流土が堆積していて、8トレンチから続く溝は検出できなかった。その後、1998年に調査したS-2トレンチと合成したところ、地山の傾斜変換点が標高46.5m付近にあることがわかった。ここでは、溝状にはなっていないが、8トレンチから続く区画と考えられ、若干くびれている。この先の東側で、この区画がどのようにになっているかは調査をしていないため不明である。

## 12トレンチ（図122）

12トレンチは前方部の先端を確認する目的で掘削した。調査の結果、トレンチの東側の標高47m付近で地山の傾斜変換を確認した。他の溝や区画よりは大きなカットであるため、墳丘に伴うものと断定はできないが、前方部の墳端の可能性もある遺構と考えられる。

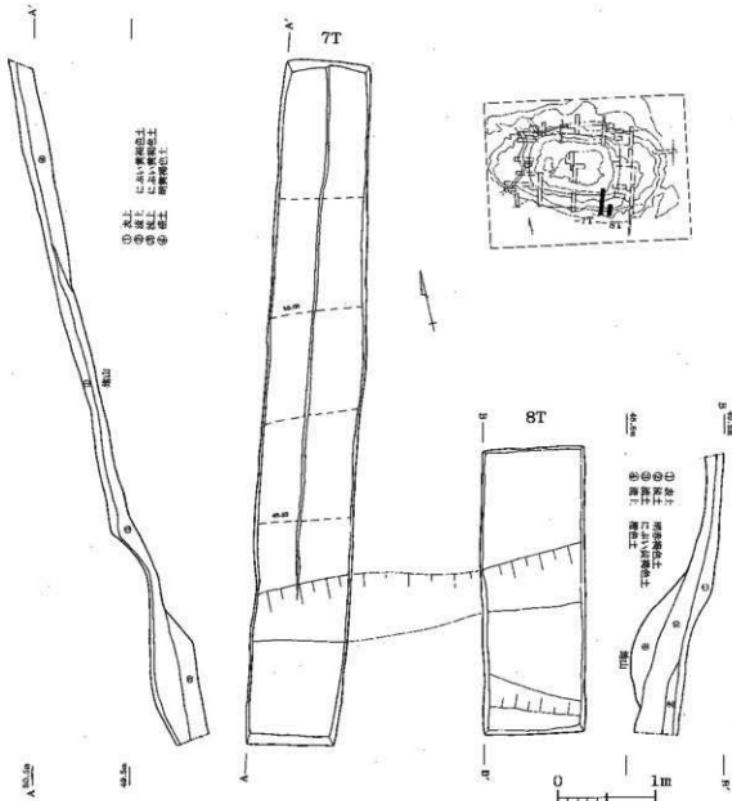


図120 7号墓7・8トレンチ（1:50）

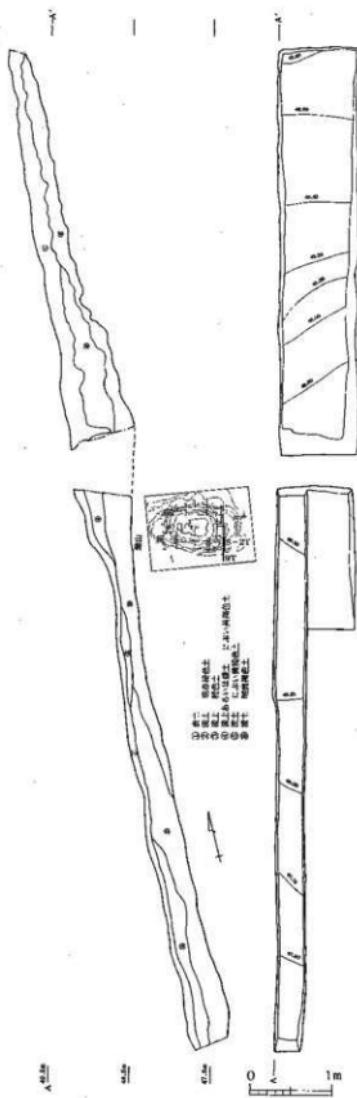


図121 7号墓8・S-2トレンチ (1:60)

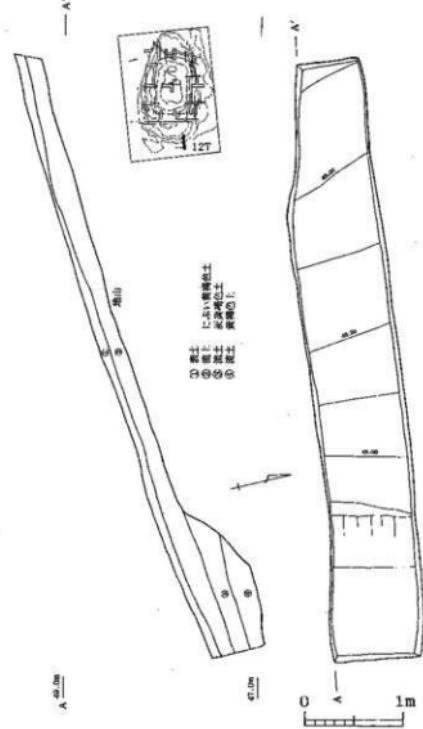


図122 7号墓12トレンチ (1:50)

## 10トレンチ・11トレンチ（図123）

10トレンチ及び11トレンチは長方墳の南東隅を確認する目的で掘削した。調査の結果、明確な区画はないと考えられる。10トレンチではコンターラインが弧状になっていて、長方形墳の南東隅の形状を表現していると考えられる。墳丘築造方法は、地山を削り出した後に盛土をして墳丘を整形している。

## 13・14・15・16トレンチ（図124）

13・14・15・16トレンチは長方墳の北東の隅を確認する目的で掘削した。調査の結果、トレンチの北側で溝を検出した。溝は前方部に向かい1998年のN2トレンチに若干くびれてつながる。溝の断面は、墳丘側の角度がきつく、外側の角度は緩い。墳丘築造方法は、地山を削り出し、墳頂近くは盛土をして墳丘を整形している。

## 17トレンチ（図125）

17トレンチは長方墳の北端を確認する目的で掘削した。調査の結果、トレンチの北側で溝を検出した。溝は墳丘に対し斜めになっていることから、長方形墳が丸みをおびていて、また、北西突出部に向う前のくびれが始まっていると考えられる。墳丘築造方法は、地山を削り出し、墳頂近くは盛土をして墳丘を整形している。

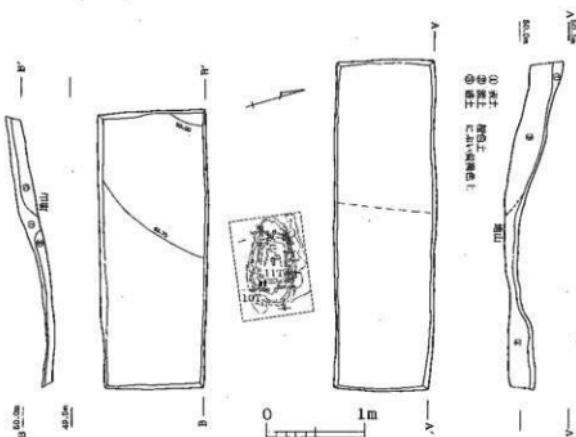


図123 7号墓10・11トレンチ（1:50）

## 18・19・20トレンチ (図126)

18・19・20トレンチは長方墳の北西の隅を確認する目的で掘削した。調査の結果、2つの溝を検出した。これらの溝は、北側から続く溝と西側から続く溝で、それぞれが平行して北西に突出している。溝と溝との間が突出部で、溝で突出部を整形して表現していると考えられる。西側の溝は削平され残りが悪いが、北側の溝は残りが良好で大きく曲がっていることが明確にわかる。上場は削平されていて不明であるが、下場の幅は両方とも約80cmである。突出部の先端構造は不明である。

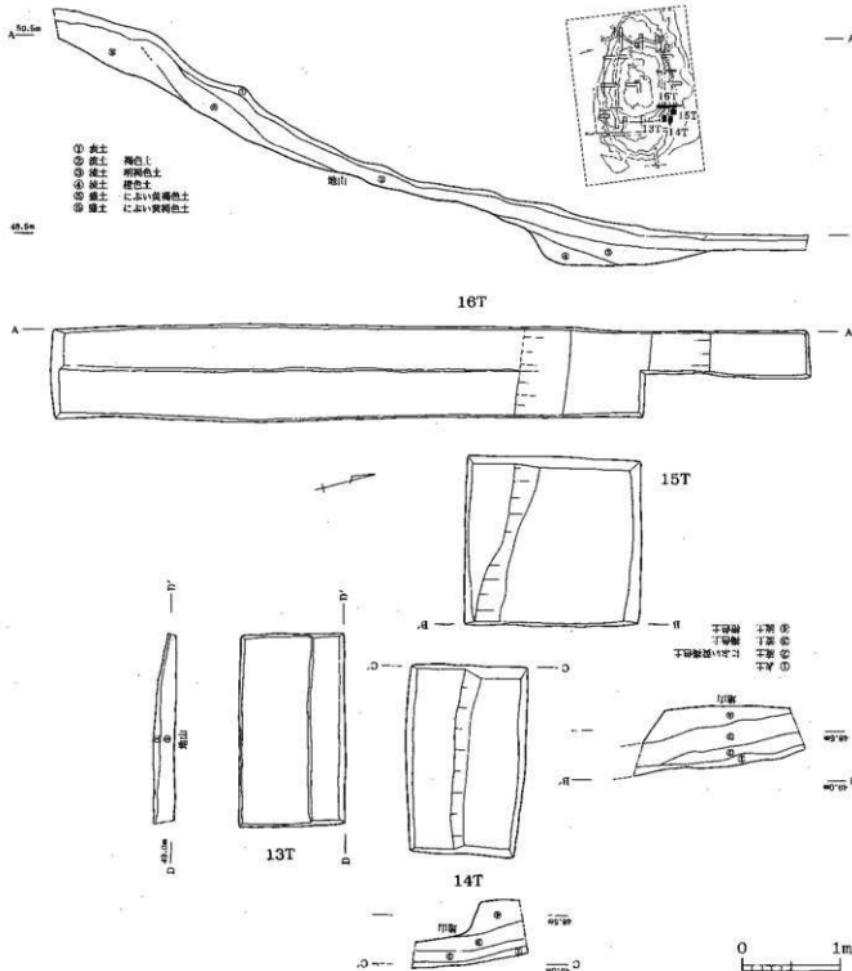


図124 7号墓13・14・15・16トレンチ (1 : 50)

## 5. 西谷7号墓の調査成果

西谷7号墓の評価は今回の調査で大きく変わった。それは、墳丘を巡る溝が検出されたことによる。その溝は、北西及び南西の隅で突出部を形成し、また、前方部まで続く溝である。調査結果をまとめ図127の復元図を作成した。上場が削平されているため下場のラインで墳形を表現している。

問題となるのは、長方墳とこの溝の関係をどのように捉えるかである。結論を言えば、溝で区画した基壇の上に主墳の長方墳が西よりに築造された墳墓と推定できる。主墳の墳端は曖昧に造られていて、外側の基壇の区画が明瞭に造られている。主墳の規模は盛土がある部分までと推定し、東西約23m、南北約15m、高さ1mと考えられる。基壇は一部を除き地山削り出しで築造してある。基壇の規模は東西約30m~38m(最大)、南北約20mを測り、前方部と呼んでいる平坦面には遺構はない。時期は第1主体直上の出土土器から古墳時代前期頃(小谷2式~3式)と考えられる。

以上のように西谷7号墓は特異な墳丘で、出雲でも他に例はない。特に興味深いことは、基壇の西側の2隅で、北西及び南西の突出部が築造されていることである。弥生時代の出雲の四隅突出型墳丘墓は石で突出を表現しているが、西谷7号墓は溝で突出部を表現している。弥生時代終末期の西谷6号墓は溝で突出部を区画し、その溝の中に配石を行っている。また、同時期の安来市宮山IV号墓も溝

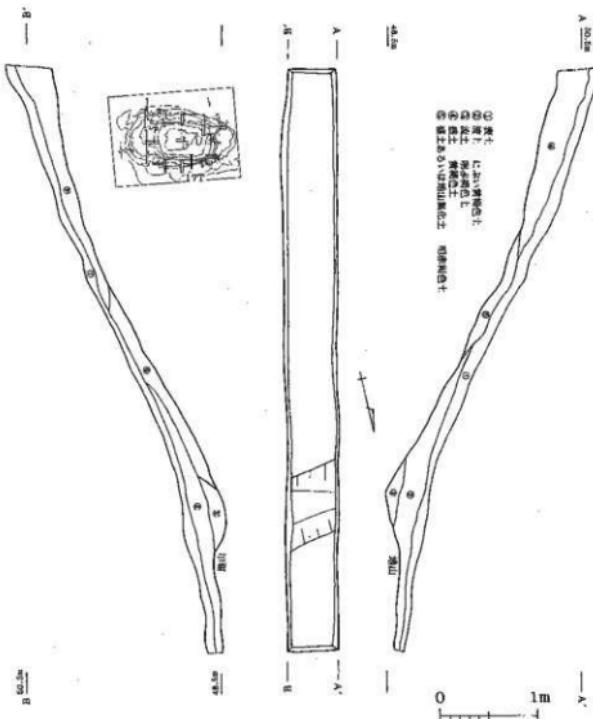


図125 7号墓17トレンチ (1 : 50)

で墳丘および突出部を区画し、その溝の中に配石を行っている。このように西谷7号墓の溝で区画した突出部は弥生時代の四隅突出型墳丘墓に系譜がたどると考えられる。また、主体部直上に上器を集め石していることや標石を置くなども出雲の四隅突出型墳丘墓の葬送儀礼に系譜がたどれる。

それとは逆に古墳時代になって新たに採用したものもあり、それは被葬者が剖抜式木棺に埋納されていることである。

このように西谷7号墓は弥生時代の伝統的な墓制に、新しい要素の方墳や剖抜式木棺を採用したのである。今まででは西谷墳墓群の弥生時代と古墳時代には断絶があると考えられていた。しかし、古墳時代前期の西谷7号墓から断絶は考えられず、弥生時代から古墳時代の墓制は継続しながら変化していったと考えられる。

ただ、現地での指導会では突出部を区画している溝や北側の溝は長方墳に伴うものではなく、全く別の遺構あるいは方形周溝墓が存在するのではないかという意見も頂いた。調査担当者としては、墳墓の立地などから方形周溝墓が存在することは考えにくく、上記の解釈が妥当であると考えている。

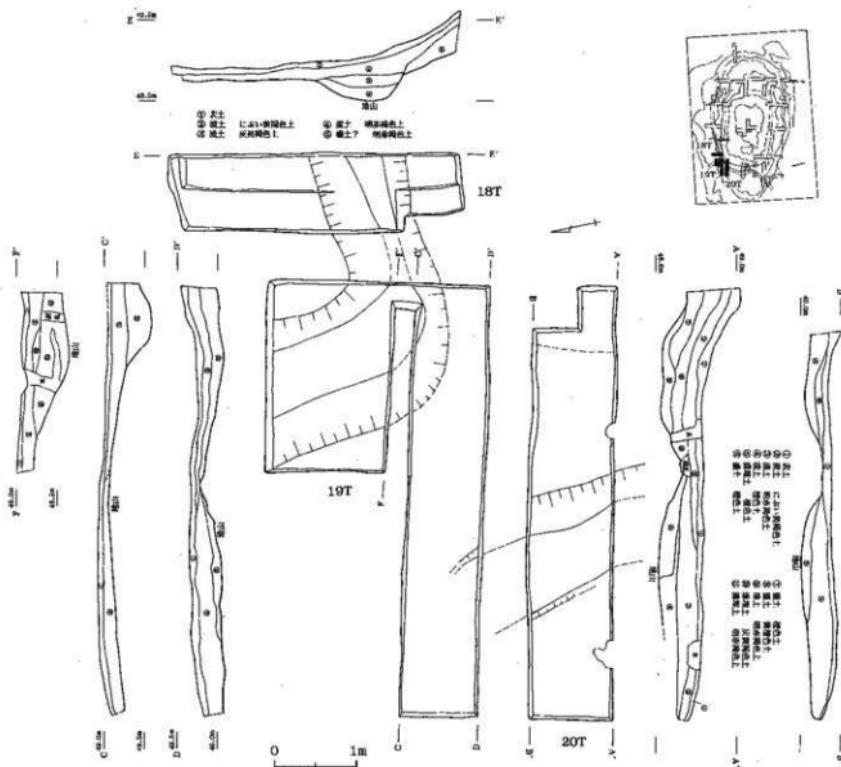


図126 7号墓18・19・20トレンチ (1:60)

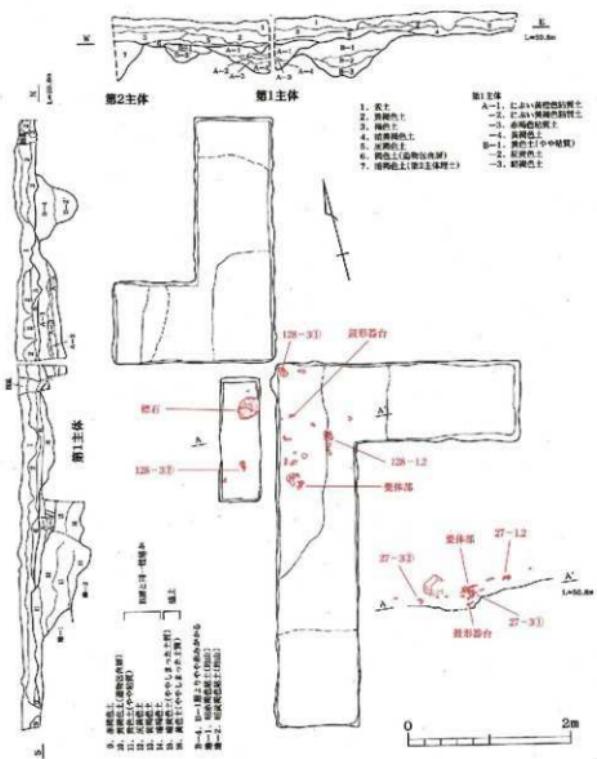


图127 7号墓主体部实测图 (1:60)

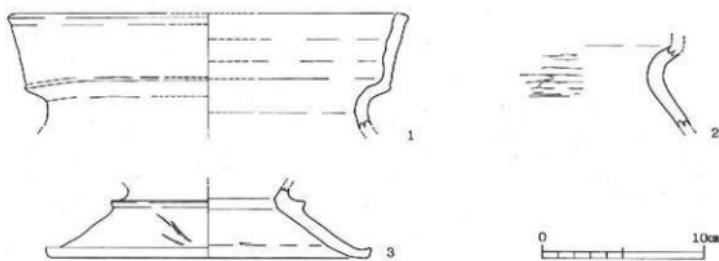


图128 7号墓第1主体出土土器 (1:3)

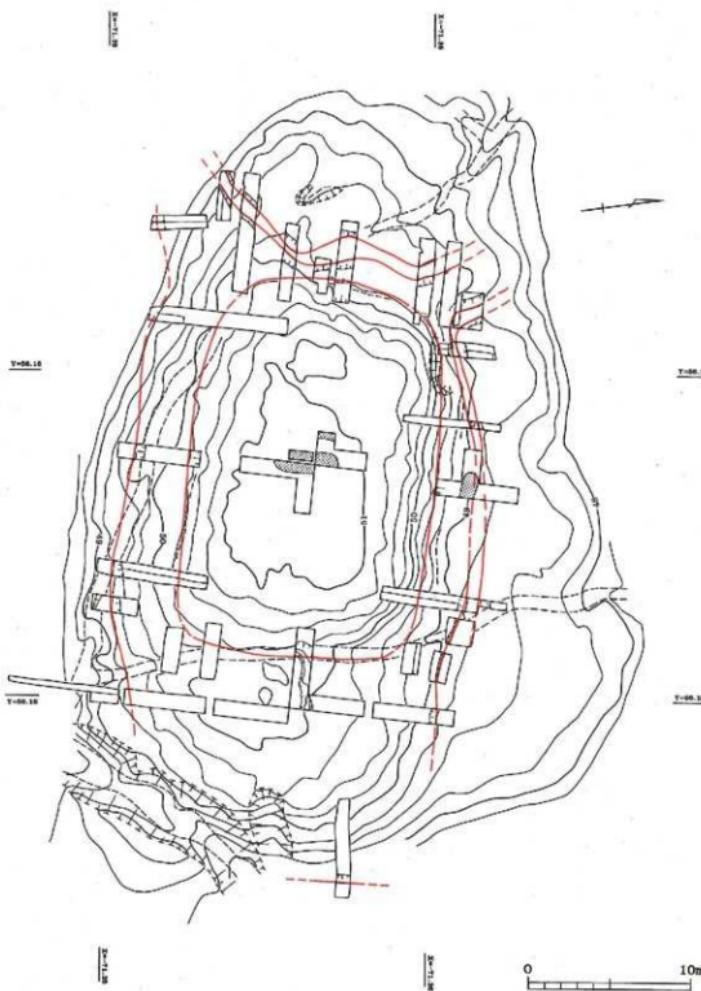


図129 7号墓復元図 (1 : 300)

## 第11節 西谷10号墓・11号墓・21号墓・27号墓の調査

### 1. 墳丘の現状

西谷10号墓、11号墓、21号墓、27号墓は、7号墓から北に延びる丘陵上にあり、南から北にかけて10号墓から並んでいる。現況は山林で、10号墓と11号墓の間に山道が東西に走り、その周辺は地形が改変されている。27号墓の北側には、墓地があり丘陵の先端は改変されている。

### 2. 過去の調査

10号墓・11号墓の発見は、1979年に出雲考古学研究会によるもので、1980年にはいずれも方形墓として報告している。

1997年には出雲市教育委員会が10号墓・11号墓の測量を実施し、その際に21号墓、1998年に27号墓を発見した。1998年の出雲市教育委員会の報告では、10号墓は南北10m、東西9m、高さ1.25mの方形墓である。11号墓は直径19m、高さ2.5mの円墳とし、従来の見解とは変っている。21号墓は南北10m、東西8m、高さ1mの方形墓として報告している。27号墓は2000年に報告され、南北8m、東西8m、高さ0.5mの方形墓である。27号墓の測量図の掲載は2006年の今回の報告が初めてである。また、10号墓、11号墓、21号墓、27号墓の発掘調査は今回の調査が初めてである。

### 3. トレンチの設定（図131・136・142）

今回の調査は、各墳墓の規模を確認する目的で調査を実施したため、墳墓の斜面から墳端にトレンチを設定した。トレンチは各墳墓の中心軸を通るように計15ヶ所に設定し、立木により無理な場合はその付近を掘削した。

### 4. 10号墓の調査

#### 1 トレンチ（図133）

1トレンチは、10号墓の北端を確認する目的で掘削した。調査の結果、明確な墳端を確認することはできなかったが、10号墓は約50cmの盛土で整形されていることがわかった。この盛土がなくなる部分がおよそ北端と考えられる。

1トレンチ内で10号墓とは関係ないと考えられるSX01を確認した。現況でも大きな落ち込みとなっていて、新しい人工的な掘り込みと考えられる。詳細な性格は不明である。SX01には山道が東西に走っている。

#### 2 トレンチ（図132）

2トレンチは10号墓の西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高約39.6m付近で地山がL字状にカットされている部分を見た。ここが10号墓の北端と考えられる。また、旧表土の上に約10cmの盛土をして墳丘を整形していることがわかった。

#### 3 トレンチ（図134）

3トレンチは10号墓の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高約40m付近で東西に走る溝を確認した。ここが10号墓の南端と考えられる。

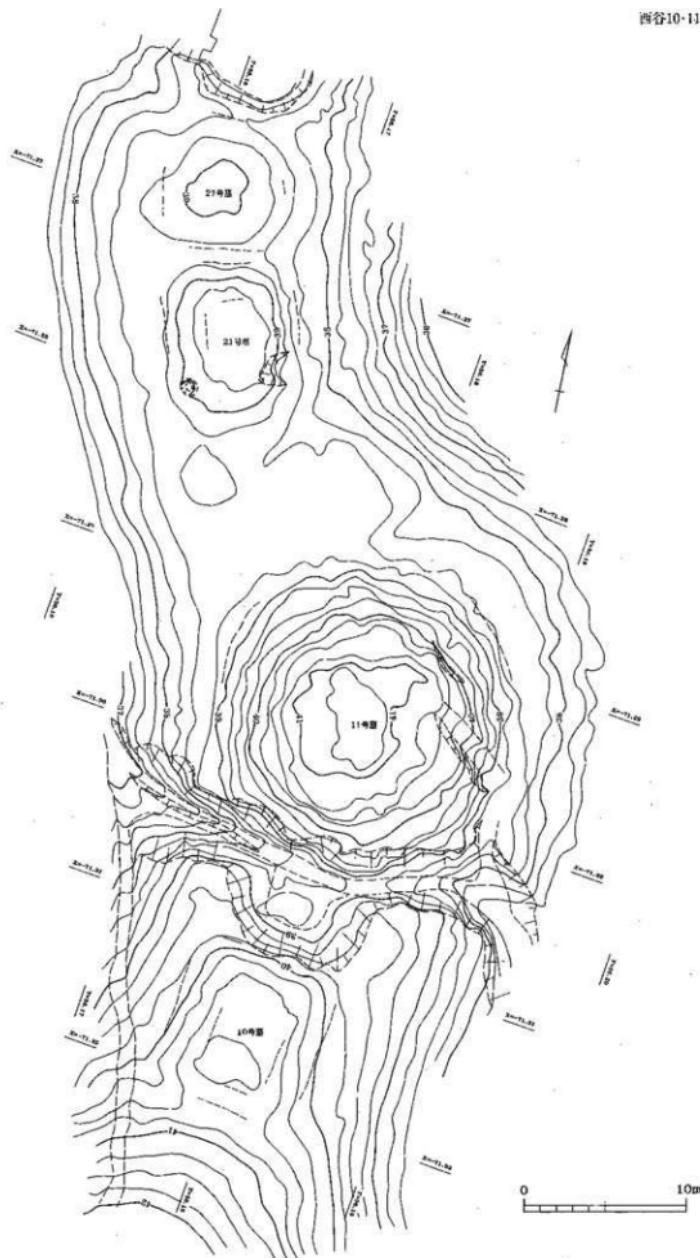


図130 10·11·21·27号墓測量図 (1 : 300)

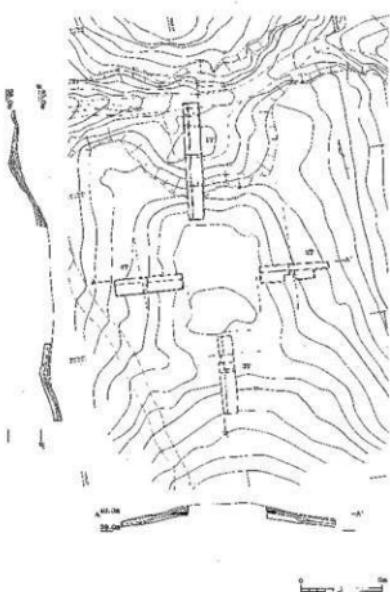


図131 10号墓調査後測量図（1:300）

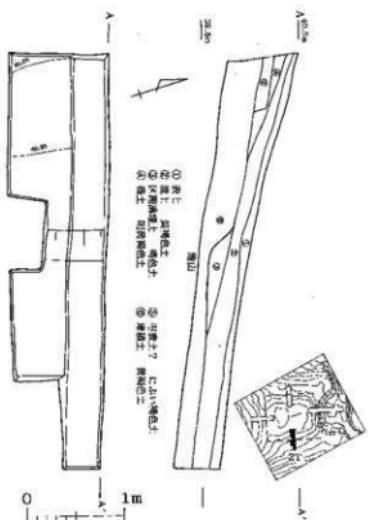


図132 10号墓2トレンチ（1:50）

## 4 トレンチ（図135）

4 トレンチは10号墓の西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高39.6m付近で南北に走る溝を確認した。ここが10号墓の西端と考えられる。また、旧表土の上に約30cmの盛土をして墳丘を整形していることがわかった。

## 西谷10号墓の調査成果（図151）

調査の結果、南北約10m、東西9m、高さ1.25mの小型の方墳で、旧表土の上に盛土をして整形している。遺物は無く時期は不明である。

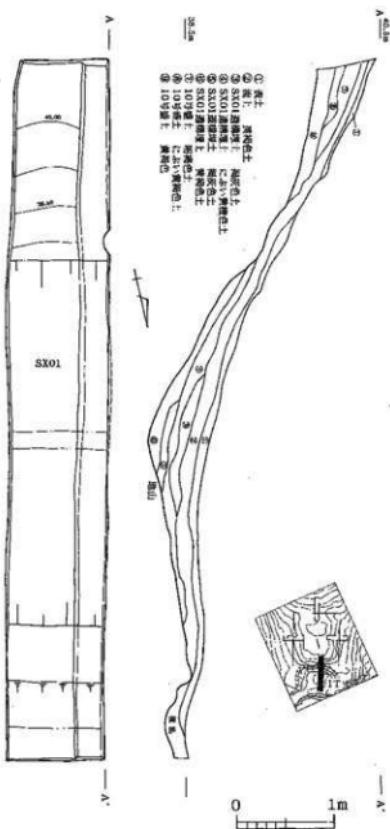


図133 10号墓1トレンチ（1:50）

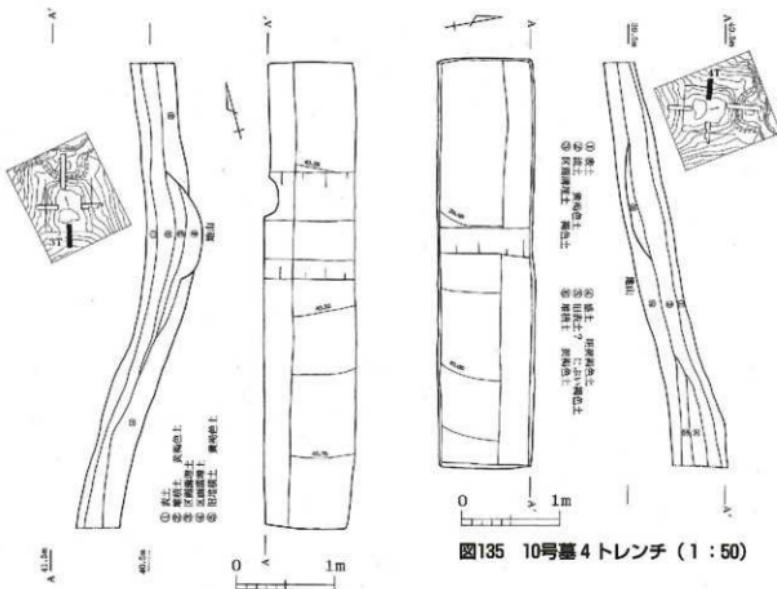


図134 10号墓3トレンチ (1:50)

図135 10号墓4トレンチ (1:50)

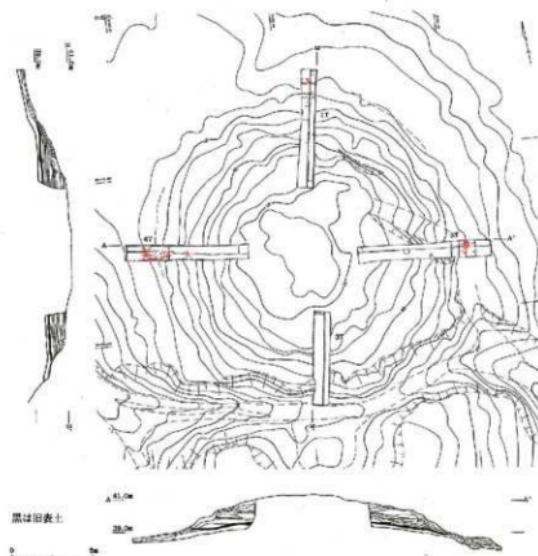


図136 11号墓調査後測量図 (1:300)

## 5. 11号墓の調査

### 1 トレンチ (図137)

1 トレンチは11号墓の北端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高38.25m付近で溝を確認した。ここが11号墓の北端と考えられる。また、旧表土の上に約1.5mの盛土をして墳丘を整形していることがわかった。その盛土は版築のように硬くはないが、異なる土を層状に盛って墳丘を整形している。②層の流土からは墳頂に並べられていたと考えられる埴輪片が散在していた。

### 2 トレンチ (図138)

2 トレンチは11号墓の東端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高38m付近で溝を確認した。ここが11号墓の東端と考えられる。また、旧表土の上に約1mの盛土をして墳丘を整形していることがわかった。その盛土は版築のように硬くはないが、異なる土を層状に盛って墳丘を整形している。⑥層の流土からは墳頂に並べられていたと考えられる埴輪片が散在していた。溝の底からは埴輪片が出土しないため、埴輪は墳端近くには無く墳頂部のみに並べられていたと考えられる。

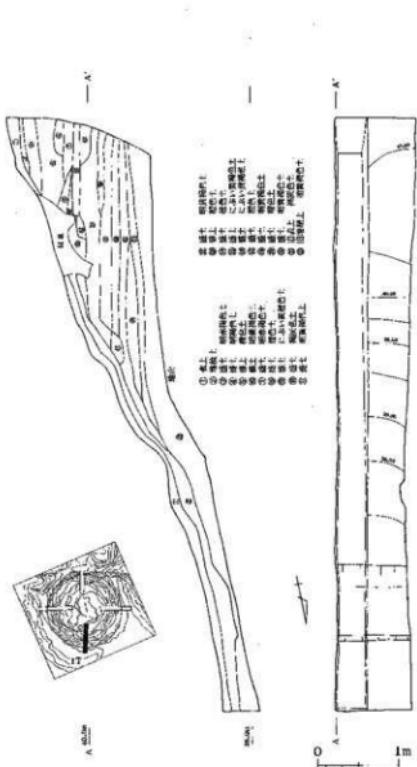


図137 11号墓1トレンチ (1:60)

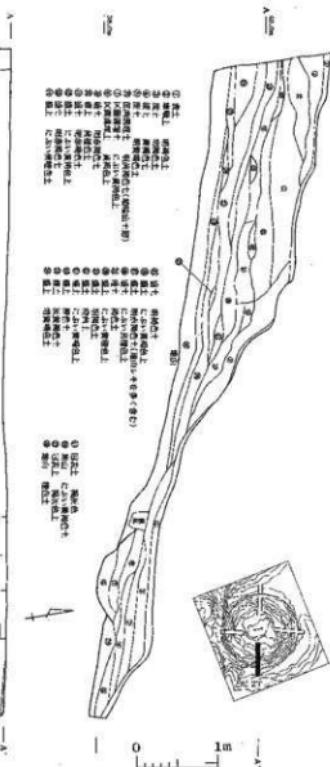


図138 11号墓2トレンチ (1:60)

## 3 トレンチ (図139)

3 トレンチは11号墓の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、墳端は山道を造る際に大きく削平されていることがわかった。ただ、盛土の状況は確認できた。墳丘の築造は、旧表土の上に約1mの盛土をして墳丘を整形していることがわかった。その盛土は版築のように硬くはないが、異なる土を層状に盛って墳丘を整形していく、1トレンチ及び2トレンチとはほぼ同じ状況である。遺物は墳端が攪乱されているため出土していない。

## 4 トレンチ (図140)

4 トレンチは11号墓の西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高38.6m付近で地山をL字状にカットした部分を確認した。ここが11号墓の西端と考えられる。また、旧表土の上に約1.1mの盛土をして墳丘を整形していることがわかった。その他のトレンチと同じく盛土は版築のように硬くはないが、異なる土を層状に盛って墳丘を整形している。②層の流土からは墳頂に並べられていたと考えられる埴輪片が散在していた。

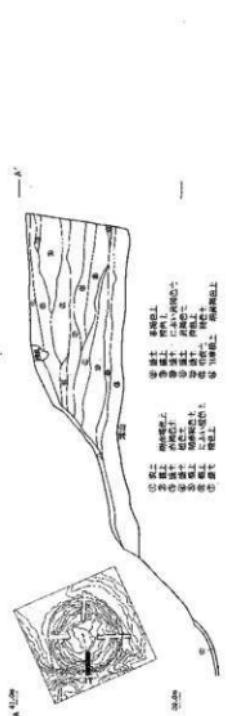


図139 11号墓3トレンチ (1:60)

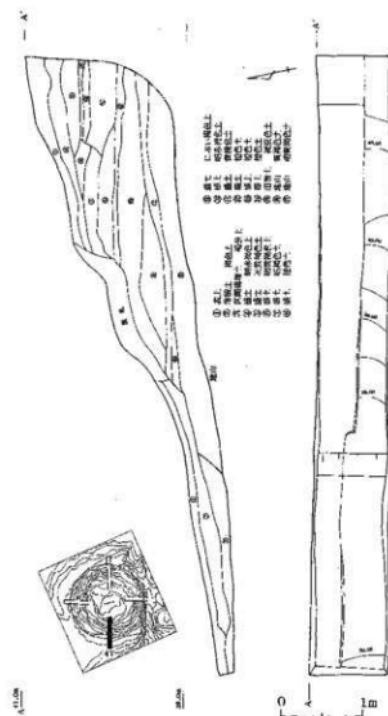


図140 11号墓4トレンチ (1:60)

## 11号墓出土土器

11号墓出土土器はすべて埴輪片である。141-1・6・7は2トレンチ、141-2~5・8・9は4トレンチから出土している。

141-1~5は口縁部片である。141-1・2は口縁端部が面をなす。141-1はタテハケ後ヨコハケが施しており、外面には黒斑がある。また、焼成後に赤色顔料を施してある。141-2は外面にタテハケが施され、内面は磨滅が激しい。141-3~5は口縁端部が先細りし、器壁は141-1・2より薄い。141-3は外面にタテハケが施され、黒斑もある。また、内外面に赤色顔料が施してある。

141-6・7は胴部片で、外面にはタテハケ後ヨコハケが施してある。また、黒斑もあり、焼成後に赤色顔料が施してある。タガは1条あり、高さは約1cmである。141-6には円孔が確認できる。141-7の外面にはB種ヨコハケがみられる。141-8・9は底部片で、一般的な底部調整ではないが底部を整えている。

これらの時期は出雲の円筒埴輪編年の2期（TK73前後）と考えられる。したがって、11号墓の時期もこの頃で占墳時代中期中葉頃と考えられる。

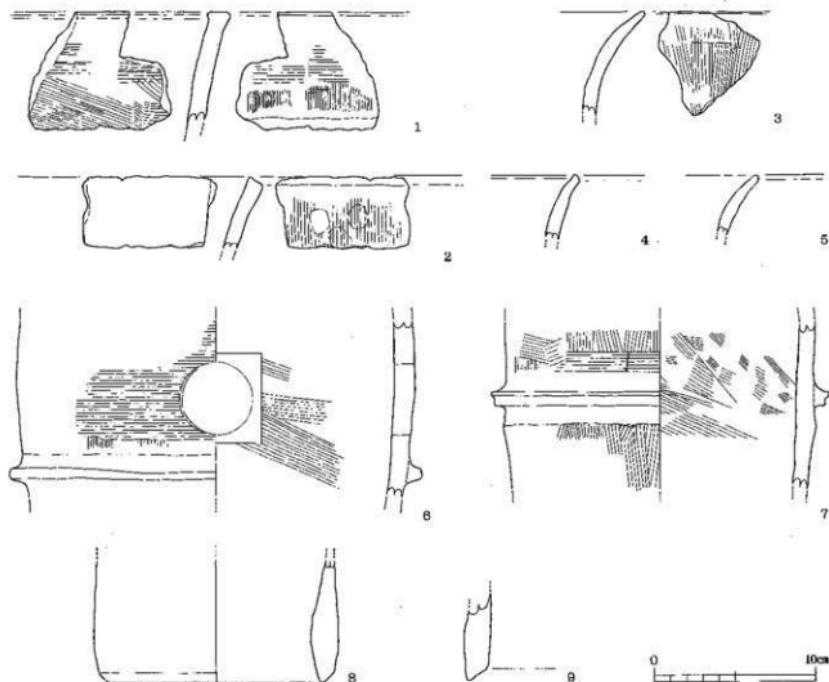


図141 11号墓出土土器 (1:3)

### 西谷11号墓の調査成果（図151）

調査の結果、西谷11号墓は直径約18m、高さ約3.5mの小型の円墳で、時期は古墳時代中期中葉頃と考えられる。墳丘築造方法は、旧表土の上に1m～1.5mの盛土して整形し、墳端は溝あるいはL字状にカットして墳丘を区画している。興味深いことは、盛土は版築のように硬くしまってはいないが、層状に盛土を行っていて、墳丘のほとんどが盛土で築造されていることである。また、墳頂には円筒埴輪が並べられていたと考えられる。円筒埴輪は、出雲編年の2期～3期（TK73）のもので黒斑がみられる。出雲平野の古墳時代中期の円筒埴輪は表採された荒木1号墳のみで、発掘調査では出土していないのが現状であった。今回、11号墓から出土したことは新たな資料の増加で貴重な発見である。18mの小型の円墳から円筒埴輪が出土することも興味深い点である。

## 6. 西谷21号墓の調査

### 1 トレンチ（図143）

1 トレンチは21号墓の北端と27号墓の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、切り合う溝を確認した。土層からは21号墓にどちらの溝が伴うのかは断定できないが、墳丘の規模や他のトレンチで確認した溝などを参考にすると、切っている方の溝が21号墓に伴い、切られている方が27号墓の溝と考えられる。また、墳丘は旧表土の上に約40cmの盛土をして整形していることがわかった。

### 2 トレンチ（図144）

2 トレンチは21号墓の東端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高38.5m付近で地山をL字状にカットした部分を確認した。ここが21号墓の東端と考えられる。また、墳丘は旧表土の上に約20cmの盛土をして整形していることがわかった。

### 3 トレンチ（図145）

3 トレンチは21号墓の南端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高38.2m付近で地山を掘り込んだ溝を確認した。この溝が21号墓の南端を区画した溝であると考えられる。そして、溝の埋土から図147の土師器が出土している。

### 4 トレンチ（図146）

4 トレンチは21号墓の西端を確認する目的で掘削した。調査の結果、標高38.1m付近で地山を掘り込んだ溝を確認した。この溝が21号墓の西端を区画した溝であると考えられる。

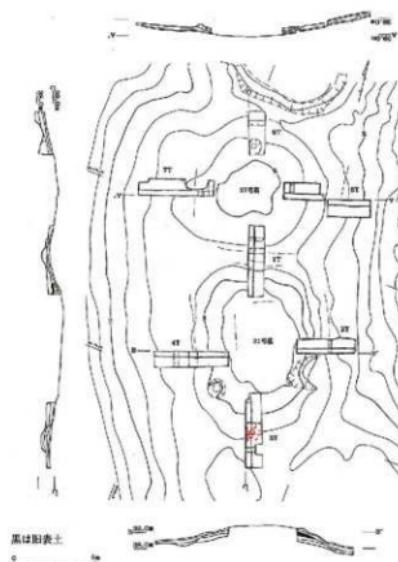


図142 21・27号墓調査後測量図（1:300）